
宇宙に転がる自由な気まま

水包トキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

宇宙に転がる自由な気まま

【Nコード】

N7217X

【作者名】

水包トキ

【あらすじ】

地球にでっかい紙飛行機が舞い降りた。そこから現れた二人の少女は一人の少年と出会う。

ボーイ・ミーツ・ガールから始まるスペースオペラ！

少年は巨大な紙飛行機を飛ばす。

宇宙からの迷子たち（前書き）

唐突に初めまして。水包トキという者です。ここでの初投稿になります。

恥ずかしながらプロを目指しておりまして、これは前に新人賞応募の際に書いたものです。第一次選考に通らずにライトノベルになるものですが、もしよかったら読んでやって下さい。

宇宙からの迷子たち

とある高校の教室の窓から白い紙飛行機が飛ぶ。緩やかな放物線を描く。

そのまま、落ちるかに思われたが向かい風を受け、尖った先端が上を向いて再び、青空へと舞い上がる。

広い真つ青な空に小さな空白が出来る。

校庭に三角形の影が落ちている。そこに更に三角形の影が落ちる。形は紙飛行機のものと同じ……だが、その大きさは常軌を逸するほどに大きかった。

窓から顔を出していた男子生徒がその影に気付いて目線を上げると、太陽を覆い隠すように空に浮かぶ大きな三角形のシルエット

巨大な紙飛行機……

先ほど、自分が投げた紙飛行機と酷似しているシルエットに男子生徒が目を剥く。

巨大な紙飛行機はそのまま、校庭に降りてきて下を向く尾翼部分を僅かに浮かして翼の先端で校舎の壁を微かに削って男子生徒の前にやって来る。

「ここ、三階だぞ！」

短い髪の中で前髪の一部が上にハネている以外は特徴のない男子生徒が息を飲む。自分が先ほど折った紙飛行機の形をした白い何かに呆然とする。

巨大な紙飛行機の天井から光の柱が上がって二つの小さな人影がせり上がってくる。

一人は真つ白なドレス　ノースリーブにフリル付のロングスカートと手首にシュシュのブレスレットを着けた緑色に近い青の大きな瞳に糸のように細い金に白が混じっているロングヘアの少女……

もう一人は対象的な黒の衣装　鉄の肩当てから伸びる細い黒いマントは足下まで達し、黒くタイトなワンピースの丈は短く、細い

脚線を際立たせる。クセツ毛の黒のショートヘア……隣の白の少女よりも目尻は上がっていた。

白の少女が目線を上げて空に舞っている……というよりも、落ちてくる紙飛行機に手を伸ばす。だが、軌道が逸れて少女の手から逃げる。

それを見た黒の少女がすつと手を伸ばして代わりに紙飛行機を取る。そして、校舎の方に掲げてみせる。

「すみませーん、これを飛ばした人って誰でしょうかー？」

男子生徒がためらがちに手を上げて応える。

「お、俺だけど？」

少女たちは顔を合わせて頷き、男子生徒に向かって足を前に出した。

（えっ？ こつち来るの？）と、男子生徒が身構えながら窓から後ずさつて少女たちが教室にやって来る。

二人の少女と一人の男子生徒を取り囲むように人垣が出来てひそひそと言葉を交わしているのを彼は背中を感じた。

「はじめまして。私はエリン」

白の少女が頭を下げて黒の少女にすつと手を向けて自己紹介を促す。

「はじめまして。私はウータです」

二人とも、まだ十歳程度で男子生徒が混乱し始める。

「俺は天海^{あまみ}系^{けい}、十七歳の高校二年生……ってそうじゃない。キミたちは何者だ？」

あのバカでかい紙ヒコーキはいったい何だっというんだ？」

「紙ヒコーキ？」

ウータと名乗った黒の少女が手に持つ紙飛行機に目を向ける。

「これ、紙ヒコーキっていうんですか」

エリンと名乗った白の少女も紙飛行機に目を落として系と名乗った男子生徒に再び、目を向ける。

「お願いします！ 私たちと一緒に来て下さい」

「はっ？」

「あの船を動かすのにあなたの力が必要なんです」

系と名乗った男子生徒が巨大な紙飛行機に目をやる。広い天板に紙の折り目が重なって出来る溝は存在せず、胴体は船首から船尾に向かうにつれて円筒上に広がり、船尾には青いレンズのようなエンジンが光を放った。

「船？ あれが？ 動かすって なんで俺なんだ？」

二人がまた、紙飛行機に目をやる。ごく普通の……折り方を教えるれば、五才の子供でも一回で折れるほどの簡単な折り方の紙飛行機だった。

「あなたが飛ばした紙ヒコーキが目に入ったから」

少女二人の異口同音……系が頭を抱えてしやがみ込む。

「俺か……俺がこの妙ちくりんの二人を呼んだのか？」

人垣からざわざわと声が聞こえてくる。

「なーんだ。選ばれた勇者とかじゃないんだ」

「紙ヒコーキ作って飛ばすのだけが得意な天海だろ。ありえないだろ」

「だいたい、高校生にもなって紙ヒコーキってないだろう」

「小学生でもあるまいしなあ……」

系が涙目になって立ち上がって人垣を指さす。

「お前ら！ さっきから黙って聞いてたら好き放題言いやがってからに！」

どうして俺よりも落ち着いてるんだよ。他人事にするなよ！」

系が腕を引かれる感触に振り向くとエリンとウータが自分の服の袖を引っ張っているのに気づき、その二人の表情に驚く。

二人とも今にも泣きそうな顔をして系の顔を見上げていた。

「お願いします。私たちと一緒に来て下さい。お礼は必ずします！

一緒に白い宙図を……じゃないと、またアイツらが……」

「アイツら？」

そこに二つの足音と共に教室の扉が開いてジャージを着た偉丈夫

と長い艶やかな髪の子生徒が駆け込んで来る。

「お前たち、まだ、ここに居たのか！ 早く避難をつて……誰だ？ その子たちは？」

教師であるジャージ姿の偉丈夫がエリンとウータに目を白黒させる。

「仙谷先生。いや、これには深い訳が……」

薄く笑う系に、長身に長い髪が似合う女子生徒が目を見てくる。
「天海くん、あの大きな紙ヒコーキ、あなたが作ったんじゃないわよね？」

「どうして俺がギネスに申請出来そうなくらい巨大な紙ヒコーキをこさえないといけないんだ。藤美……」

「そ、それもそうよね」

藤美と呼ばれた女子生徒が気恥ずかしさからか、頬をほんのりと赤くする。

「まあ、いい！ 天海、事情は後で聞くからまずは避難だ。その子たちを責任持つて連れてくるんだぞ」

「なんで俺が……」

「系さん、私たちと一緒に来て下さい！ 早くしないと！」

……風切り音……光、音、衝撃、熱、鉄片が窓から飛び込んで来る。

ダツガアアアアアアアンツ！

世界が回る回る……少女の言葉を遮って爆発が起こり、校舎に新たな巨大な影が差す。

空に浮かぶドングリ……七つの節があり、八つの円板が重なり、緩やかに回転しており、その一つ一つに砲台やレンズが備わっていた。トゲだらけのフォルムはドングリというよりも松ぼっくりに似ていた。

教室の中で灰や埃にまみれて倒れていた系が、床に手をついてぎこちなく顔を上げる。

「次は何が起きたってんだ？」

額の一部分が切れて血が流れてくる。空に浮かぶドンダに目をや
って周りを見る。人垣の何人かは倒れており、無傷の生徒に肩を貸
してもらって起き上がっている。

その生徒たちも目立った外傷はないように見えてほっと胸をなで
下ろし、今度は自分の前に目を向ける。

系の前でエリンが腕を手で押さえて血が滲んでウータが心配そう
に見ていた。

「大丈夫か？」

「それは天海くんもでしょう」

系の腕を取って藤美が起こそうとするが非力な彼女ではそれは叶
わず、逆の腕を取る仙谷が系を軽々と起こす。

そして、三人がエリンに目を剥く。エリンの腕を押さえる指の間
から見えるのは赤……そして、機械部品だった。

皮膚はめくられて血を流して骨ではなく、ケーブルや機械の骨格が
顔を出していた。

「キミは？」

エリンとウータが目を伏せながら口を開く。

「私たちは、ヒユナリ……『ヒューマン・オブ・マシナリー』です。
騙すつもりはなかったんですが……」

エリンが血が垂れている腕から手を離すとざっくりと切れている
裂傷が見える。その裂傷はすぐに水が沸くように気泡立って塞がっ
ていく。

（みるみる傷が治っていく。まいったな……）と、系がエリンの傷
を凝視しているとウータがその様子に異変を感じる。

「もしかして、私たちヒユナリのこと、見たことないんですか？」

「はっ？ って、待って待て！ 話が見えないんだって！ キミたち
はその……地球の人間じゃないのか？」

その……宇宙人？」

エリンとウータがぼかんと口を開けて一拍、頷く。

「えと、正確には人間じゃありません。今、言った通りに私たちは

ヒユナリ……機械人間なんです。

ここから一万光年離れた球状星団のプロメキス・セントから来ました」

ウータがハツと気付いたようにエリンに目を向ける。

「エリン、ここつてもしかして未加盟恒星系なんじゃない？」

「えっ？ 嘘！ だって宙図の反応はここからしたのに……」

二人が困り、落ち込む素振りを見せる。

「天海くん、この子たち、何を話しているの？」

藤美が系の肩を揺する。

「俺に訊くな！ えと、話をまとめるとキミたちは何かを探しに地球から遠く離れた星から来たロボットなのか？」

「はい。そう考えてもらえれば大丈夫です。そして、アイツらが

」

キツとウータが空に浮かぶ松ぼっくりを視線で射る。

『ガッーハツハツハツ！ ヒユナリども、何を道草を食っている？

早くカジユアの遺産を探さないか！』

第三者の声……ドスの利いた男の声は松ぼっくりからしてきて全員の見線を集める。

「アイツらは『宇宙海賊バーンザック』」

「私たちの探しているものを奪おうとしているんです。系さん、ゴメンなさい！」

ウータが系の腕を取って窓枠に足をかける。

「嘘だろ！」

「きゃあああああ！」

「俺まで！」

三者三様に言葉通りに驚く。今まで感じたことのない浮遊感に……系の体が仙谷と藤美と共に浮き、ウータに引かれて窓から飛び出した。巨大な紙飛行機の天板に降りてそのまま、腕を引かれる。

エリンもウータの後を追って窓から出て口を開く。

「アーメンガード！ お願い！」

『待つてたわ』

新たな女性の声……その声はふんわりと柔らかく、優しさが滲んでいるようだった。

天井の真ん中に光の柱が上がってウータが系たちを引いてそこに飛び込んでエリンも同じように入ると光の柱は潮が引くように下がっていき、系たちの姿が消えてしまった。

教室に残されて唾然となる生徒たちをよそに巨大な紙飛行機は再び、高度を増して空へと垂直に上がっていった。

『エリンちゃんとウータちゃんが手荒な方法でお連れしてしまつて申し訳ありません』

光の柱　トラクタービームによって巨大紙飛行機の中へと吸い込まれた系たちを出迎えての最初の言葉だった。

その声はエリンとウータのものではなく、中の空間に響く先ほどの女性の声だった。

系の前に広がるのは先ほどまでいた教室ほどの大きさの部屋に四方のうち、三面はガラス張りのようなモニター、後ろを見ると壁に簡素な扉があつてモニターの前には一人がけの革のリクライニングシートと操縦桿である無骨なスティックが左右に二つあつた。

それだけの空間……簡素な空間の天井や床はリノリウムに似ていた。

エリンがシートに駆け寄つて座り、スティックを握る。

「アーメンガード、まずは上昇！」

『了解』

モニターに映るのは系がいつも紙飛行機を飛ばす時に見る街の風景そのものだったがそれがせり上がって青空と松ぼっくりだけになる。

「うっ……バーンザックの戦艦・ヴァンドップはいつ見ても禍々しいなあ」

スティックを握るエリンが顔を曇らせる。そこにウータが駆け寄

つて首を傾げる。

「そうかな？ 私は格好いいって思うけどな」

「えー、ウータちゃん、趣味悪いよー」

「エリンちゃんが少女趣味なだけだよ」

二人が互いの意見を飲み込めず、後ろにいる系に視線を向ける。

「系さんはどう思いますか？」

重なる声に重ならない意見、引きつる系の顔に、彼は人差し指を前に突き立てる。

「そんなことよりも、前を見るー」

「ええ？」

『緊急回避します』

巨大紙飛行機が機体を傾けて敵戦艦のビーム砲を避ける。後方、遠くで山が爆ぜる。

「マジかよ！」

再び、敵戦艦のビームの発射口が光を放つ。

「また来た！」

エリンがスティックを傾けて機体が飛び、何とかビームを避ける。

「ウータちゃん、やっぱり、私じゃ無理だよー」

目を回すエリンにウータが焦りの色を出して振り向く。系と目が合う。時が一瞬だけ凍り付いて系はバツとウータに背を向けて走り出した。逃げ出したのだ。

「待てっ！」

ウータが飛び出すように駆けて系の背中に手を伸ばして彼の体を掲げるように持ち上げた。小さな女の子にしか見えないウータが男子高校生である系を軽々と持ち上げる様はまるで自分よりも大きな昆虫を角で持ち上げるカブトムシのようだった。

「うわっ！ やめろ！ やめてくれ！」

ウータは系の言葉に耳を傾けず、エリンのいる操縦席まで持つて行く。それに気付いたエリンがシートを空ける。ジタバタする系がそこに置かれる。

「何するんだよ！」

「違います。操縦してもらいたいんです！」

「予想出来た回答だけど、そんな俺に出来る訳ないだろう！」

「いいから操縦桿を握って！」

エリンが系の手を取ってウータ同様でもの凄い力でスティックを握らせる。

(さっきから女の子にされるがまま……)と、系が嘆きそうになる。その時だったシートの背もたれに預けている背中から頭へ電気が流れる。

「……つつううつつうう！」

系を感じる。と、いうよりも映像が頭の中に流れてくる。自分が持つ操縦桿スティックの人差し指がかかるトリガーが何なのか……親指を置いているスイッチが何の発射ボタンなのか……

「分か……る！」

いつの間にか頭を垂れている系に、そこに松ぼっくりから一発のミサイルが飛んでくる。

「危ない！」

エリンが声を上げる。ウータが目を閉じる。系がかぶりを振る。

ゴオツオオオオオンンッ！

……爆発……その衝撃と閃光に目を閉じずにはいられなかった。

そして、その場にいた巨大紙飛行機が跡形もなくいなくなる。

だが、その空の更の上に巨大紙飛行機は尖った先端を下げて爆風を全体で受けて上昇していたのだ。

「ぷっ……は！」

息することを忘れていた系が荒い呼吸を上げて辺りを見渡す。

自分の左右にはシートを掴む手を震わせるエリンとウータ 後

ろには手を合わせて怯えるようにしている仙谷と藤美がいた。

「俺が今……動かした？」

「系さん、次のアクションを起こして！」

アーメンガードの声に系が霧もやがかった思考が晴れて自分

たちに再度、向けられる敵の発射口に気付く。

「つつ！ なら！」

系がスティックを握る手に力を込める。

「三十六計！」

前に思い切り、スティックを倒して加速を身を感じる。

「……逃げるにしかず！」

巨大紙飛行機の急激な加速……系たちがその場から飛び去っていった。

宇宙海賊バーンザックの戦艦・ヴァンドップのブリッジに声が上がる。

「……“羅針盤の針”、この空域から離脱していきます。追いますか？」

舵輪の形をした操縦桿を握るエイのような半魚人が後ろに視線を送る。

「泳がせる」

「はっ？」

金で飾られた普通の椅子よりも二回り以上大きな肘掛け椅子に腰掛けるサメのような半魚人が鞭を振り上げてエイのような半魚人にしならせる。

バシイン！

無数の傷跡を持つエイのような半魚人の顔に新しいミミズ腫れが出来る。無数の傷跡を持つのは彼だけでなく、広いブリッジの中にいる者全てが見るだけで痛みを感じるほどの傷跡を背負っていた。

「ロディ、同じことを俺に二度も言わせるな」

「はい、すみませんでした。キャプテン・ノック……」

萎縮するエイのような半魚人……ロディが頷く。

ブリッジにいる他の半魚人たちも顔を曇らせる。だが、ブリッジ奥の金に飾られた椅子に腰掛けるキャプテン・ノックだけはにやりと笑ってみせ、言葉が続けた。

「いいか？ 奴らはまだ雑魚だ。泳がせて成長を待つのも時には必要なんだ。」

宙図を探させてカジユアの遺産を手に入れたところで俺たちはそれを奪えばいい」

キャプテン・ノックが横の小さなテーブルの上に乗っているローストフィッシュを手にとって骨ごとボリボリと音を立てて食べる。

「俺たちはあの小娘たちのケツを叩いて急がせるのが今回の仕事……分かったらサーチ怠るんじゃねえぞ！」

キャプテン・ノックは床に鞭を打ち据えて叱咤する。

(しかし、最後に見せたあの動きは小娘たちのものじゃないな……

これが杞憂で終わればいいがな……)と、キャプテン・ノックが顎をさする。鮫肌でジャリジャリと音が鳴る。

「七十二番目の息子の誕生日まであと一週間しかないんだ！

てめえら、気を引き締めろ！」

巨大紙飛行機は空におらず、海の中へと逃げ込んでいた。水深一万メートルの海溝……地図上で日本の下方にあるマリアナ海溝に巨大紙飛行機は停まっていた。

皆が内部の空間の真ん中に集合してウータの持ってきたキャンピングシートの上に座っていた。

系はエリンに頭に包帯を巻いてもらいながらうんざりした表情を取っていた。そして、エリンが巻き終えると不意に彼は声を上げた。

「で、ちゃんとした事情話してくれよ！」

『私が説明しましょう』

紙飛行機内部の空間に何かの機械を通したような女性の声が響く。「アーメンガードさんだっけ？ 姿を見せてくれよ」

『申し遅れましたね。私はこの船の管制コンピュータのアーメンガードです。』

対話は可能なんですけど、エリンちゃんやウータちゃんのような体はないの』

「もうそのぐらいじゃ驚かないぞ俺は！」

そう言いながらのため息……仙谷が頭を掻きむしる。

「ええ〜い！ 社会の歯車となった大人にはまったくついて行けない展開だぞ」

「先生、私もです」

藤美が涙目で周りを見渡す。三面モニターには光の届かない深い闇を映していた。

「これって何なの？ 船ってことは潜水艦か何か？ でも、空も飛んでたし……」

『ここは恒星間移動宇宙船のブリッジです。まだ名前を持たない船で、系さん、名前をつけてみますか？』

「あれ？ 俺、名乗ったっけ？」

『コンクリートの建物でエリンとウータとの会話を聞いていたので（コンクリートの建物……ね）と、系は文明の違いに頭を振りたくなったがエリンが包帯を巻いている最中なので止める。』

「私たち、アーメンガードとは少しぐらい離れていても通信出来るんだよ」

系の頭に包帯を巻き終えたエリンが系の顔を覗き込んで得意げに微笑む。

系が力なく微笑み返して表情を引きして口を開く。

「そろそろ教えてくれ。俺はどうしてその……キミたち選ばれたのか、本当の理由を……キミたちは何を探しているんだ？」

『……私たちが探しているのカジュアの遺産というものです』

（探し物の説明から始める？）と、系は片目を閉じてアーメンガードの意思を押し量る。

『二千年前、アルフォード・カジュアという科学者が娘たちに残したと言われる正体不明の遺産です。』

その正体は分からず、所在も不明でしたが“羅針盤の針”であるこの船が遺産の在処を記した宙図……宇宙空間地図の指し示して私たちは宙図を探す旅に出たのです。

宙図は隕石に偽装させてこの地球に落としたそうです。それで私たちはこの地に訪れたということですよ。

しかし、ここに来る途中で宇宙海賊バーンザックに狙われてしまったのです。』

「あのドングリに乗ってたアイツらか……なんで、アイツらが狙うんだか……」

『おそらく、カジユアは兵器開発にも力を注いでいたので彼らはカジユアの遺産を兵器か何かと誤っているんじゃないでしょうか？』

「でも、二千年前の科学者が作ったものじゃないのか？ そんな昔のものを見つけても、今さら、役に立たないんじゃないか？」

『カジユアには熱烈なファンがいるのでコレクターなどに売れば額は計り切れません』

「広い宇宙でも地球と同じようなヤツがいるのね……」
肩をすくめる系……

「逆だよ。地球でもこの広い宇宙と同じような人がいるんだよ」
ウータが足を広げてくつろぎながら言う。さきほどまであった緊張感はいつの間にか欠けているようだ。

「それで、どうして天海くんを連れてきたんですか？」

藤美がキョロキョロとしながらアーメンガードに訊く。藤美はまだアーメンガードの存在をよく分かってないようだ。

『彼にこの宇宙船の操縦を頼みたかったからです』
「でも、さっきはあの嬢ちゃんが操縦してたじゃないか。わざわざ、

ウチの生徒を連れ出さないでくれ」
『申し訳ありません。ですが、私は系さんの紙飛行機が飛ぶ姿を見て確信したのです。』

この方ならこの宇宙船を上手に飛ばせると……』
「どつして？」

系が唾を飲んで声を待つ。

『紙飛行機が飛ぶ姿があまりにも楽しそうだったもので……勘です』
ずっこける系たち、エリンとウータがきよんとする。

「系さん、最初に説明したじゃない。系さんが飛ばしてた紙ヒョーキを見て来たって」

「系さん、納得し切れなかったんだね」

仙谷と藤美の冷たい視線を受けて系は手で顔を覆い隠して丸まって恥ずかしさからシクシクと泣いている。

「天海くん、昔からそういうところあるよね……」

「天海、お前……急に宇宙船の操縦出来て調子乗っちゃったんだな

……

先生、気持ちは分かるぞ」

「傷をえぐるな！ 安い同情するな！」

半ば、涙目の系が顔を上げる。

「でも、最初に操縦桿を握った時に脳にビビッと操作方法とかが閃いたのは何だっというんだよ！」

「あれは私です。シートに触れた時に脊髄を通して宇宙船の操作方法をダウンロードさせてもらいました。

宇宙では公用語などは覚えずにダウンロードするのがポピュラーなんですよ」

「人体に影響ないんだろうな？」

ギリギリと奥歯を軋ませて怒りを露わにする系にアーメンガードは間を開けずに言う。

「私が行ったものは……」

（つてことは宇宙には危険なダウンロードもあるってことか？）と、系がめまいを起こしそうになる。

「すみません。系さんが何か勘違いしているようなので言い出しにくくて……」

アーメンガードが仮初めでも肉体を持っていたなら苦笑いを浮かべて頬でも掻いていることだろう。

「気遣いありがとうございます。てつきり、秘めたる能力が開花したのかと思ったので」

系が赤面して照れ隠しに笑う。

『でも、私の勘に狂いはなかったようです』

「そうそう、系さん、私たちよりも操縦うまかったもん」

「あれは、たまたまうまくいっただけだよ。ほとんど奇跡に近い」

「そ、そうですよ！ 天海くんをそんな遺産探しに巻き込まないで下さい！」

藤美が声を張り上げてみんなが面食らう。

「ふ、藤美？」

藤美がはつとして顔を赤くする。

「私は学級委員長なんだからクラスメイトの心配するのは当たり前でしょ？ それに一応、幼なじみだし……」

「お、おう……」

顔を赤くする二人にエリンとウータが首を傾げる。

「なんで二人とも顔を赤くしてるの？」

「心拍と体温が上昇してる」

「青春だからだ」

仙谷が遠くを見つめ、目を細める。エリンとウータは首を傾げる角度を更に増す。

「それで、キミたちはどうしてそのカジユアの遺産を探しているんだ？ 訳を聞かせてくれないと手伝うものも手伝えないよ。」

別に、困っているキミたちを無碍にはしない」

「ちよつと、天海くん！ それって本気なの？」

目を見張る藤美に系はバツの悪そうな顔をして頬を掻く。

「いや、こつやつて女の子に頼まれると断りにくいじゃん」

「はあ？ あんたはなにを考えてるのよ！ さっきの宇宙海賊見なかったの？ ビームにミサイルに私たち、もう少しで死んじゃうところだったのよ！」

藤美がヒステリックに声を発し、自分の体を抱きしめて身を震わせる。今になって自分の身に起こったことを実感しているようだ。つた。

その様子にはエリンはウータはしゅんとしてしまふ。

「おい、そこまで言う必要ないだろう？ この子たちだって必死だったんだから」

キツと系を睨む藤美……

「だってこの子ってロボットなんでしょ？ 心なんてないでしょ？」

藤美のその言葉に系も眉根を寄せて彼女を視線で射る。

「お前！ なに言ってるんだよ」

藤美がエリンを指さしてエリンがビクツと肩を震わせる。

「天海くんも見たでしょ？ この子の体は機械なんだよ！

なんでそんなに肩入れするのか私、分からないよ」

「え……？」

虚を突かれたかたちの系 エリンとウータを見て、頭を掻いて

一拍……

「なんでだろ？」

「なんじゃそりゃ！」

系の腹に藤美のストレートが入り、うめき声を上げて彼は体にくの字に曲げて顔から倒れ込んだ。

「もう私知らない！」

藤美が立ち上がって扉の方に駆けていき、自動で開いた扉に飛び込んだ。

『藤美さんは船室にお連れしておきます』

「まじめな子なだけにこういう状況に巻き込まれて混乱してるんだろ。」

落ち着けば自分がなにを言ったか分かるだろう」

そう言っただけで鼻でため息をつく仙谷……

「系さん……」

エリンとウータが突っ伏してる系の顔を心配そうに覗き込み、系は口の端を上げてウータの頭に手を置く。

「そんなに心配そうな顔しなくて大丈夫だよ。あいつ、昔から融通利かないところがあるからあんなこと言っちゃったけど、きつと本心じゃない。」

あんまり気にすんなよ」

上体を上げて息を抜いて入れ替え、気持ちを入れ替える系……

『みなさん、宙図の場所が分かりました』

アーメンガードの言葉にエリンとウータが顔を明るくする。コロコロと表情を変えていく少女たちに系は何故だか、安心感を覚えた。「やった！ どこですか？」

『地図に出します』

中央のモニターが光を発してアメリカ大陸を中心とした世界地図が映し出される。その中心よりやや下方に光点が点滅する。

「お、おい。天海、ここつてもしかて……」

仙谷の言葉に系は頷いて口の端を上げる。

「なんの因果ですかね？ ここ、メキシコのユカタン半島じゃないんですか？」

「チクシュループ・クレーター……白亜紀末の巨大隕石が落ちたところ」

『この地表より浅い所に宙図の反応を確認……』

それで、系さん……』

アーメンガードが言いよどむ。それに系は軽いため息を吐いて腰に手を当てる。

「しゃーない。取りにいくだけですよ。正直、俺はケンカとかしたことないんで何かあったら逃げますよ」

『戦うのは私たちの本意するところではありません。今しばらく、系さんの力を貸して下さい』

系は立ち上がって何かに気付いたように仙谷に視線を向ける。

「そういえば、先生、体育教師なのにチクシュループ・クレーターなんてよく知ってましたね？」

仙谷が肩を震わせて笑う。

「お前、体育教師をなめ過ぎだ。今度の通知表、期待しておけよ」系も肩を震わせて笑ってみせて操縦席に足を向ける。その横にエリンとウータがつく。

「そういえばさ、ウータちゃんって凄い力持ちだね？」

「えっ？ だってヒユナリだもん。ねえ、エリンちゃん？」

「うん」

「そーゆーもんなのかー」

（つてことはエリンちゃんもか……機械人間恐るべしだな……）と、系は自分でも意味しれぬ冷や汗を己から感じていた。

シートに腰掛けてそのシートにエリンとウータが手を置く。

ステイックを握る系が顔を引き締める。

「アーメンガードさん、上昇！」

『了解。船首をアメリカ南部に向けます』

「おう！」

ステイックを前に傾けて白い紙飛行機の形をした宇宙船が水深一万メートルから急激浮上、水面から出て、水滴がはじける。

巨大紙飛行機が地球人の少年によって一路、メキシコを目指して飛んでいった。

巨大紙飛行機の中、二つしかない船室の一つに藤美はいた。

ベッドが壁に打ち付けられた簡易テーブルだけのシンプル過ぎる

部屋……

照明は仄暗く設定されており、今の藤美の気分には合っていた。

そして、ベッドの上に彼女は膝を抱えて顔を伏せていた。

ブリッジから出た藤美は広い通路に出ると、アーメンガードに話しかけられてこの船室へと通されたのだ。

藤美はすることも怒りをぶつける相手もないことに気付いてベッドの上に座るぐらいしか選択肢が無かった。

（動き出した……）と、藤美は微かな駆動音を感じていた。いつもなら気付かないほどの小さな音……感情の高ぶりで感覚が鋭くなっているから、かろつじて感じ取れる。

「また、天海くんが動かしてるのかな？」

ぶすつとした顔をしてあの場から去った自分を追っては来ず、結

局は彼女たちに力を貸す系に苛立ちを覚えた。

（まったく……アイツはいつだってそう　とくに考えもせずには首突っ込んで大事になるのは昔からだっていうのに、本人に何の自覚もない）と、藤美が枕を掴む。

「あのバカ！」

投げられる枕が壁に当たる。

巨大紙飛行機のブリッジの系が振り返る。

「どうかしたんですか？　系さん」

「いや、誰か俺呼んだ？」

「いえ」

「ふむ」

エリンが小首を傾げて系が納得する。

「おつ、あれかな？　環状の隆起が見える。つて、マリアナ海溝からここまで五分ほどしか掛かってないってどれだけのスピードを出せるんだよ宇宙船は……」

「これでも、銀河連邦で定められた大気圏内でのスピードですよ。

この船でも光速の倍のスピードは出せますし」

エリンが心なしに楽しげに説明する。

「よく分からないが凄いのは分かった」

仙谷が顎をさすって首を傾げる。系が上唇を舐めて口を開く。

「それで、あそこからどうやって宙図を探し出すんだ？　あんまり、ここにいたらアメリカ空軍が来ちゃうよ」

「アーメンガード」

「はい」

ウータの声に応えたアーメンガードが彼女の足下に光を発生、その光に飲まれたウータが姿を消す。

「ええっ？　アーメンガードさん？　ウータちゃんに何をしたんだ？」

「え？　外に出しただけですけど？」

「つて、ここ高度三万メートルだよ！」

三面モニター中央の左下に自由落下中のウータを捉えた映像が映る。

「系さん、エリンちゃん、見てるー？」

音も拾ってブリッジに流れる。落下のため、前髪がめくられて肩当ての細いマントが上へたなびいている。

「普通に大丈夫なのね、ヒユナリって……」

ガクツと肩を落とす系をよそにウータがチクシユループ・クレーターの中心の海へと飛び込んだ。画面一面が泡となって透き通った海の中のウータを映す。

「高度三万メートルからの飛び込みってどれだけの衝撃がかかるんだ？」

腕を組みながら言う仙谷に系がブルブルと首を振る。

「人間は誰もやらないから考えるのやめておきましょう」

「そうだな……」

「もしも、人間がやったら」

「やめい！」

計算し、はじき出した答えを言おうとしたエリンの言葉に系が被せて遮る。面食らうエリン……

『イリジウムとかの反応確認。少し削ちやっていいのかな？』

水中で口を開かずにはどりをキョロキョロと見渡すウータが映り、それに合わせて彼女の声がブリッジに響く。

「なんで水中にいるのに声ができるんだ？」

『私がウータちゃんの思念波をキャッチして流しているんです。系さんたちの声も向こうに届きますよ』

「ウータちゃん、加減って分かる？」

『ん〜、手で形作って明かりの近くにもって行って壁とかに映すやつ？』

「それは影絵……そんな古風な知識はいらなから、チクシユループ・クレーターの中に新しいクレーターなんて作らないでくれよ」

『えっ？　なんで？』

「なんでも！」

『はい』

ウータの肩当てから伸びるマントがぐにやりと歪んで前腕部に螺旋状に巻き付き、ドリルになって回転を始める。

両腕にドリルを巻き付けたウータが地面を削っていく。水が濁っていき、気泡が沸き立っていく。

『ウータちゃん、宙図の反応データを送ります。そのまま掘っていくと別のものを掘り当てちゃうので修正して下さい』

「りょーかーい」

（別のものって何だろう？　訊くの怖いな……）と、系は『好奇心猫をも殺す』という言葉を思い出して命が九つどころか一つしかないことに口を噤んだ。

『！　系さん、バーンザックです！　ここより五百キロメートルに捉えました』

「なに？　えっ？　どうすんの？」

「掘り起こすまでまだ掛かるよ！　時間稼ぎして！」

「つつ！　どのくらいで敵さん来るんだ？」

『二分かかりません』

「……しよーがないか！」

巨大紙飛行機を反転させて発進させる。

「アーメンガードさん、下降！」

『はい、かこ……下降？』

アーメンガードが聞き返して系が頷く。

宇宙からの迷子たち（後書き）

読んで下さった方にはまずはお礼を申し上げます。次にご感想ご意見などありましたら、是非、言って下さい。

読んでくれる方をワクワクさせたくて書いています。

まだ様々な事に不慣れな身の上のため、至らない点ばかりですが皆様に「エンターテイメント」を提供したいという気持ちは誰にも負けないと思っています。その気持ちに合致する作品を書くために、酷評を受ける覚悟があります。

厳しいご意見ご感想を怖く思いながら、本当にお待ちしております。

白い宙図を求めて(前書き)

少し連続で投稿します。

白い宙図を求めて

大西洋上空に浮かんでいるヴァンドップのブリッジで、センサー類と向き合うオペレーターが声を上げる。

「羅針盤の針、接近してきます！ あと十秒で接触、五、四、三、

二……来ます！」

身構えるキャプテン・ノックをはじめとするクルー……

静まり返るブリッジは静寂のまま、数秒が経つ。

「あ………れ？」

操舵手のロディが辺りを見渡す。

「どうした？ コンパスの針はどこだ？」

「艦の周りをぐるぐると回っています！」

「そんなバカな……まさか！」

キャプテン・ノックが何かに気付いたように血相を変えて椅子から立つ。

「バカ野郎ども！ 羅針盤の針は下だ！」

ヴァンドップ 直下の海面がはじけて巨大紙飛行機が垂直に昇ってくる。

「くっ！ こちら視界遮るものない宇宙空間での戦闘に慣れてるんだ！ 海や雲、大気圏内にはものがあり過ぎる！ 気をつける！ 来るぞ！」

巨大紙飛行機がヴァンドップに迫る。そして、すれ違つ。

「あつ？」

巨大紙飛行機はそのまま、上昇して雲へと姿を隠す。

「今の羅針盤の針だったよな？」

「はい………」

オペレーターのためらいがちの返事にキャプテン・ノックがこめかみを掻く。

「なんで攻撃してこなかったんだ？」

「えーと……なんででしょう?」

「……………」

言葉を見失うクルー……

「……武器……なかつたり……」

一人のクルーが冗談めいた口調で言う。

「まさか……なあ」

ブリッジに乾いた笑いが生まれては消え、やがて、そんな乾いた笑いすら生まれることも無くなった。

ヴァンドップの前を下から上へと通り過ぎた巨大紙飛行機は雲の中に入り込んで静かに浮かんでいた。

ブリッジの中で仙谷だけが唖然としていた。

「あれって敵の戦艦だったろ? どうして何にもしないんだ?」

「何もしないんじゃないんです」

系が片目を閉じて鼻をこする。

「この船、敵にダメージ与えられる武装が何にもないんです。はっきり言って小回り利いて逃げ回るしか脳がないんですよ」

「まるで本当の紙ヒコーキのようだな……」

「笑えない冗談ツスよ!」

雲を貫いてビームが船体をかすめる。

「とにかく、ウータちゃんが宙図を探し出すまでの辛抱だ。行きま
す!」

ビームによって貫かれた穴から出てヴァンドップの周りを旋回しながら飛ぶ。

「私、行ってきます」

「え? 行くって?」

「アーメンガード!」

『了解です。気をつけてね、エリンちゃん』

頷くエリンがウータが外に出た時のように光に包まれてブリッジから消えて巨大飛行機の天板に出る。大気切り裂きながら飛ぶ天板

でエリンの長い髪とスカートがたなびく。

「系さん、ヴァンドップに近付いて下さい」

ウータの時と同じようにエリンの声がブリッジに響く。

「本当にいいのか？」

「砲台壊すだけですから！ それぐらいだったら私にだって……！」

「ムチャするなよ！」

ミサイルを避けながら急旋回、後ろで爆発が起きる。

「大丈夫なのか？」

「へっっちゃらですよ！」

巨大紙飛行機がヴァンドップに接近し、すれ違う。そのすれ違う瞬間、エリンが飛び出してヴァンドップの砲台の上に乗る。

「たぁーっ！」

指を組んだ腕を振り上げて砲台へと落とす。ひしゃげ、ねじ曲がったのを確認して斜め上のビームレンズへと跳び、蹴りを突くように入れて裂く。

機関銃の銃口がエリンへと向けられる。だが、彼女はいち早くそれを悟ってその場から飛んで別の砲台へと……

巨大飛行機から見えるヴァンドップの円板の一部から光と火が上がついていく。

「すごいな……」

仙谷が傍観し、系が生唾を飲む。

「これがヒユナリなのか？ でも、これじゃあ……」

（機械『人間』なんかじゃなくて……）と、系が汗を拭う。宇宙船の操縦は彼が思っていた以上に大変で逃げ回るのは重労働だった。

チクシユループ・クレーターにいるウータが地層を削っていき、ガツンと音を立ててドリルの回転を阻害される。

それに気付いたウータが腕を引いてドリルの先端に当たったものを見る。単なる岩石などではなく、明らかに地球やこの太陽系のものではないものが彼女の知覚センサーが捉えた。

表情を明るくしたウータがその物体の周りの岩石を削ってドリルを解いてマントに戻し、手を伸ばす。

それに指をかけて彼女はグツと力を込めて引っこ抜く。

（取れた！）と、ウータが自分の顔ほどもある岩のようなものを掲げるように持つ。

ふいに、スクリュー音が彼女の耳に入り、振り返る。

無数の魚雷が海の中を飛んできたのだ。弾頭には火薬などではなく、鋭く大きな爪を備えた手が取り付けられていた。

（地球のものじゃない！）と、ウータが目を見開いて構える。岩を左の脇に抱えて右の拳を固めると肩当てが装着される。

魚雷が迫ってウータがすれ違いざまに細いマントを振り下ろし、魚雷を切り裂く。

魚雷はそのまま、突き進んでターゲットから大きく逸れたことに気付いて旋回する……瞬間、縦に切り込みが入ってズレる。爆発、ウータに泡が迫って片目を閉じる。

別の魚雷が迫り、その鋭い爪をウータに振り下ろす。彼女は片目だけでも、その視覚センサーは魚雷との距離を正確に把握、彼女は爪を肩当てで受け止めて蹴りをたたき込んでへし折る。

（早く系さんたちの元に戻らないと……）と、ウータはへし折った魚雷を踏み越えて自分の周りを旋回する魚雷を睨みながら考える。

魚雷の一つに飛びつき、スクリューを切り取ってその動いたままの爪を掴んで接近してきた魚雷へと振り上げた。

一閃して掴んでいた爪を捨てて最後に残った魚雷と向き合う。

ヴァンドップのブリッジでオペレーターが声を上げる。

「発射した魚雷が戻ってきます。宙宙を入手した様子です」

キャプテン・ノックが顎をさすって口の端を上げる。

「くくつ、宇宙船を囿にして宙宙を探していたようだが、こっちはそれに付き合う振りだけさせてもらった。

しかし、ヴァンドップも結構やられたな……

お前ら、あの小娘どもは出来るだけ生け捕りにしろ！」
「！ 待って下さい。これは……この反応はヒュナリです。魚雷にヒュナリがとりついています」
「何っ！」

魚雷に乗ってチクシユループ・クレーターから大西洋に出たウータが巨大紙飛行機を見つける。

海面すれすれを魚雷が飛び、ウータがサーフィンのように乗ってアーメンガードと通信をする。

「アーメンガード、宙図見つけた。回収お願い！」

『ご苦労様です』

アーメンガードのねぎらいの言葉が頭に響いて巨大紙飛行機がウータの方へと飛んできてトラクタービームを照射、それに引き寄せられて船内に戻る。

「ウータちゃん、大丈夫か？」

その言葉にウータは歯を見せて笑い、

「うん、ばっちり！ そっちは？」

「エリンちゃんが応戦しているんだ。アーメンガードさん、エリンちゃんと通信出来ますか？」

『繋がります』

一瞬の間……エリンの音がブリッジにやって来る。

「ウータちゃん、宙図見つけたんだね。すごいすごい！」

エリンが砲台から砲台へと飛び移りながらはしゃぎ、その場でぴよんぴよんと飛び跳ねる。

「楽勝だったよー！」

「エリンちゃん、無事か？」

「ええ、系さんたちは？」

「そちから見える通りだ。キミを回収する。そしたら」

「そしたら？」

エリンとウータがくりくりとした瞳で系を見る。

「逃げる！」

系が得意げに口の端を上げる。

ヴアンドップへと接近、エリンが飛び出して自由落下　巨大飛行機が彼女をすくい上げるようにトラクタービームで船内へと招き入れた。

『宙図を手に入れて……逃すと思うか！　小娘どもー！』
キャプテン・ノックの叫びが上がり、アンカーが巨大飛行機へと射出されて捕まえる。

巨大紙飛行機のショックアブソーバーの限界　船内が激しく揺れる。仙谷の人間としての力の限界　投げ出されて壁へと背中を打ち付けられる。

「ぐぎゃっ！」

潰れたヒキガエルのような声を上げた仙谷が気を失ってしまふ。

系は凄まじい衝撃の中、ステイックを決して手放さず、結果、操縦席から投げ出されることもなく、難を逃れた。

エリンとウータは手でバランスを取って倒れはしないものの驚くそして、揺れが治まった時だった。アーメンガードが声を上げる。

『装甲板の一部が破損、敵が中に入ってきます』

ドオオオオオンッ！

ブリッジの左モニターが爆発して風穴の向こう　砂塵から人

影が現れる。

自動小銃を携えた半魚人たち、そして、それらよりも二回り以上大きな体のサメのような宇宙人……キャプテン・ノックが出てくる。血のように真っ赤な海賊の船長服を着て、その長い裾はボロボロで弾痕まであった。

「小娘ども……優しくしていればつけ上がりやがって！」

半魚人が整列してキャプテン・ノックがその一步前に入る。

構えられた自動小銃に系が立ち上がってエリンとウータの前に入る。

「なんだお前は……？　ヒユナリではないな。地球人か、なるほど

な……

お前がこの羅針盤の針を動かしていたから急に動きが変わったのか」

「だったら何だ！　こんな小さな女の子たちを追い回して恥ずかしくないのかよ？」

系の言葉にキャプテン・ノックが　彼だけでなく、彼以外の半魚人も全員、呆気にとられて一拍、笑い出す。

全員が肩を震わせて笑い、系が異様さを肌で感じて寒気と吐き気が襲いかかってくる。「な、何がおかしいっていうんだよ！」

「これは傑作だ！　地球人とはユーモアがある」

「だから、何がおかしいってんだ！」

「本気らしい。知らないならば、教えてやろう。」

ヒュナリとは軍事用戦術兵器だ。人間の形をしているのは、潜入などの目的にも使えるからだ。

そいつらがたまたま、同種族のメスの姿をしているからといって、情を移せば、いつか痛い目に遭うぞ」

（やっぱり、エリンちゃんもウータちゃんも活動範囲は広い。攻撃力は高いと思っただらそうということだったのか）と、系がキャプテン・ノックを睨む。

「なんだその目は？」

「だから何だ！」

「なにっ？」

系の目の前に尖ったサメ肌の鼻が触れようかというほどに近寄る。手のひらに汗が滲んで動悸は早くなり、膝が震え出す。系のはまったくの虚勢でキャプテン・ノックはそれを見透かしていた。

それでも、系は舌の根が乾く口を開き続ける。

「この子たちは必死の思いであんたたちに追われてここまで来たんだ！

この地球で俺に頼ってきたんだ！」

「『思い』だと？　まったく笑えんな……笑えないぞ。ガキ！」

キャプテン・ノックが系に手を伸ばし、彼は避けることが出来ずに頭を掴まれて片手で高々と持ち上げられる。

「系さん！」

飛び出そうとするエリンとウータだったが、銃が構え直されてその動きを止めてしまう。

「未開の惑星のサルが……ここまで頭が悪いとは思わなかった。

お前の目に映っているのは機械に人の皮を被せた人形よ！ こいつらには感情なんてものはない。あるのはプログラミングされた演算機だ。

男を騙すために涙を流すように作られたなあ！」

目を大きな手で隠されている系の口元がぐつと歪む。

「違う！」

自分を掴むキャプテン・ノックの腕に手を置いて渾身の力を込める。振り解こうとするが、悲しいかな 彼は非力だ。

「この子たちはただ一生懸命で……周りもロクに見えなくなるくらい一生懸命で！」

そんな子たちを放っておけるわけないだろ！

だから、俺はこの子たちの力になってやるんだ！」

「物わかりが悪過ぎる。早死にするぞ。こつやつてな！」

キャプテン・ノックが系を掴む手に力を込める。

叫びを上げる系に再び、飛び出そうとするエリンとウータ……引き金にかかる指に力が伝達される。

……ゴッウ！

鈍い音……その場にいる全ての者の動きが止まる。鈍い音の発生源は意外にもキャプテン・ノックの後頭部からだった。

「え？」

思わず、系を離すキャプテン・ノックに彼の後ろで振り下ろした鉄パイプに驚く藤美がいた。

「いった〜……」

藤美が涙目で鉄パイプを手放して自分の真っ赤になった手のひら

を見つめる。

「こっちの台詞だ！ 娘！ お前は何だ！」

「あ、あんたこそ何様のつもりよ！」

系の虚勢と違い、藤美の勢いに飲まれそうになるキャプテン・ノック……

「いきなり人んとこ乗り込んで銃突きつけて恥ずかしくないの？」

「は、恥ずかしい？」

「そうよ！ あんたたちがやってることは弱い者イジメよ！ ちっちゃな女の子二人に冴えない男一人捕まえて力でねじ伏せてバカじゃない！」

（冴えない男って俺？）と、系がチカチカする視界で藤美を確認する。

「この娘……言わせておけば！」

キャプテン・ノックが拳を振り上げ、藤美がぎゅっと目を閉じて体を強ばらせる。

「ウチの生徒に！」

藤美の前に躍り出る影……気絶していた仙谷だった。

藤美を押しして自分の背後を開けてキャプテン・ノックの腕を掴んで勢い殺さずを利用して身を引いて背中を床で転がしながら相手の腹に足を添える。

「手を出すなーっ！」

キャプテン・ノックの巨体が自分の勢いのままに宙へと放り飛ばされて受け身も取れぬまま、床に叩き付けられた。

……仙谷の巴投げが決まり、キャプテン・ノックが目をパチクリさせる。その時だった、アーメンガードが声を上げる。

『皆さん、伏せて！』

船体が激しく揺れて人工重力によってキャプテン・ノックたちが作った風穴へと全員を落とそうとする。

重力に引かれるキャプテン・ノックたちに対して系と藤美はエリオンとウータに手を引かれて重力に耐えた。

「ガキ、小娘ども！ まだだ！ まだ終わりじゃない！ これで逃げられたと思うなよ！」

「逃げおおせてみせるぜ。この子たちのために！」
系とキャプテン・ノックが視線を交えて風穴に飲まれてきえていった。

『ねじ切りつて逃げます』

巨大紙飛行機の船体が縦に回転を続けてアンカーの鎖をねじ切つて飛び立った。

アーメンガードが人工重力を切つて系が慌ててスティックを握つて前へ倒した。

宇宙海賊バーンザックから逃げ切れた系たちは日本まで戻り、浅間山火口へと身を隠して修復に必要な鉱石を船自体が採取していた。

時はすでに夜になっており、系と藤美は火口の縁に来ていた。

「藤美、あの時、よくあのサメ野郎を殴れたな？」

系が中腰になって石を拾って山肌の方に投げる。

「あれね……ほら、私だけあの時、船室にいたから見つからなかったのよね。」

アーメンガードさんに事情説明されて鉄パイプ出してもらってブリッジの方を見たら天海くんが頭を持ち上げられてたから心臓止まりそうなくらいビックリしたわよ」

「ははっ、わりー」

「まつ、他の半魚人たちもエリンちゃんとウータちゃんに意識向けてたからあのサメの後ろには結構簡単に行けたのよね」

「でも、殴るなんて普通出来ないって……」

その言葉に藤美は顔を逸らしてつぶやいた。

「じゃあ、あんたは何であんな担架切れたんだか……」

その言葉と一緒に風が吹く。

「ん？ ごめん、風で聞こえなかった」

「聞くな！」

「はいい？」

(それに、あのサメを怖がらずにいられたのは、あいつと私自身が被って見えたから エリンちゃんとウータちゃんにひどいこと言った自分と……)

あの時の自分があんなにも醜いとは思わなかった。だから、あの時に殴ったのは自分自身だったと思う」と、藤美が目を細める。

「系さん、船の修理終わりました。岩壊して宙図取り出すんで来て下さいーい」

二人から少し離れた位置にエリンがやって来て呼ぶ。

「早っ！ さすがは宇宙のテクノロジーってところだ」

「本当にすごいね」

系はエリンに手を振って示す。

「分かったー、今行くよ。行こうか、藤美」

「うん」

系が藤美の前に出て歩き出す。藤美がその後を追って歩き出す。ごつごつとした岩だらけの地面に足を取られて転びそうになる。

「きゃっ！」

短い悲鳴に系が振り返って彼女を受け止める。

不安定な体勢で系は藤美を受け止め、彼女は系にしがみついて顔を真っ赤にする。

「ごめん……」

「いや、悪い……ムリ……」

「へっ？」

急に傾く二人、系が後ろに倒れて二人とも転んでしまう。

「ちょ……いったー、何なのよー。もーっ！」

「ごめん。全身筋肉痛……もー、痛くて痛くて」

「はあ？ なんで筋肉痛？」

「いや、緊張で体ガツチガチにしてたし、こんな筋肉痛初めてだ」

藤美が起き上がって砂を払って系に手を差し伸べる。系が苦笑いを浮かべながらその手を掴んで立ち上がる。

巨大紙飛行機のブリッジに戻ると、ハンマーを持ったウータが待っていた。

「系さん遅いよー。もう少しで始めちゃうところだったよ」

「悪い悪い」

ウータが鼻でため息をつくとき、気を取り直してハンマーを大上段に構えた。

「それじゃ、待ちに待った白い宙図とのご対面！

いっくよー。破片飛び散らさないようにするけど、飛んだら各自、避けてねー」

「そりゃ、エリンちゃん以外ムリだって……」

系のツッコミをスルーするウータ……振り下ろす。

ガコンッ！

岩に亀裂入って中から『色』が見える。

「えっ？」

ウータの目が見開いて再び、ハンマーを落として中の物が顔を出す。

そこにあつたのは……赤……赤いリングだった。人間が付ける腕輪よりも一回り大きいサイズのリングがそこにはあつた。

「宙図ってこれでもいいの？ でも、白じゃないんだね……」

藤美が感想をもらす。

「赤……だよな？」

系が周りの顔色を窺いながらつぶやく。

「赤だな……」

「……………」

エリンとウータがうつむいて押し黙り、ウータはハンマーを手放して音を立てて床に転がる。

（どんだけ重いんだろ？ 後で持ってみ……いや、やめとくか。

今、あのハンマーより重い空気が流れてきてるぞ）と、系が場の雰囲気重くなっていくのを感じた。

二人の顔がくしゃっと歪んで 泣き出す。声を上げて泣き出す。

子供のようにな……

「いや、子供だよな」

「違うでしょ！」

藤美がエリンとウータに近付いて言葉をかける。

「エリンちゃん、ウータちゃんどうしたの？ 探してるのと違ったの？」

泣きながら二人が頷く。服の袖で涙を拭いて背中を優しく叩く。

「白じゃない。赤だったんだよ……」

系が二人に目配せしながら出てきたリングに手を伸ばす。

そして、触れるとリングが赤く発光する。天井に光の文字が浮かぶ。そこには、『ネクストマップ』と現れた。

「これは？」

エリンとウータも泣き止み、天井に映し出された文字を見る。

「そうだったんだ……」

エリンとウータがつぶやき、リングは次に宙図を映し出して一つの星がチカチカと点滅している。

「これは天の川……？ ケンタウルス座か？ 沖繩行った時に見たぞ」

系が少ない知識から絞り出す。

「アルファ・ケンタウリだよ。地球から一番近い恒星……」

藤美が口元に人差し指を当てて頷きながら言う。

「ここに本当の白い宙図があるのか？」

「うん、今度こそ……ウータちゃん！」

二人が顔を見合わせて頷き合う。

『行き先は決まりましたね。いつでも、どこまで飛べますよ』

アーメンガードの言葉にも頷き、エリンとウータが系たちと向き合う。

「系さん、藤美さん、仙谷先生、ありがとうございました」

二人が頭を下げて三人が少し、面食らう。

「特に系さんには本当に迷惑かけました。私たち、これからプロキ

シマ・ケンタウリに行って白い宙図を探します」

二人はまだ濡れている頬を拭いて微笑む。だが、どこか頼りないものを系は感じずにいられなかった。だから、彼は口を開いてしまった。質問を投げかけてしまった。

「待ってくれ……キミたち、まだあの宇宙海賊に狙われているんだる？」

「それは……」

表情曇らせ、言葉を濁らせる二人に「やっぱりな」と系が目を細める。そして、ため息をつく。

「仕方ね。行くか」

苦笑いに近い形で口の端を上げて系が二人に歩み寄る。

「系さん？ 本気ですか？」

「言つたる？ キミたちを放っておけないって……」

あんな風に泣かれたら放っておけないんだ」

「いいんですか？ だって」

言葉を遮る系の手……エリンとウータの頭に置いてポンポンと優しく叩いて撫でる。

「言わずもがな……ってやつだろ？」

「ま、待ってよ！ 天海くん！」

「そうだぞ、天海！」

系は二人に振り向いて頭を掻く。

「最初に言つた通りさ……」

こんな風に泣かれてさ 放っておける訳ないんだよ」

笑う系……藤美が複雑な表情をして口を開く。

「なら……私も」

「ダメだ！ この船を動かすのに俺は必要だけど、キミは必要ないんだ」

言い切る系に言葉を失う藤美……そんな二人をエリンとウータが心配そうに見守る。

「俺はちゃんと帰ってくる。この地球に……」

親父とお袋にはうまく言っといて下さい、先生」

「教師として許可出来るはずないだろう」

系が眉根を寄せる。

「俺は男として女の子の手助けをしたいんだ！」

系と仙谷が鋭い視線を交える。そして、不意に仙谷が目を閉じてため息を吐く。

「学校は休学扱いするから、留年しない内に帰ってこいよ」

「先生！」

仙谷の言葉に藤美が驚き、思わず声を上げてしまいが仙谷は手で制し、系の答えを待った。そして、系は、

「尽力します」

（今日はよく苦笑いするよ、俺）と、系が本日何度目か分からないほどの苦笑いを浮かべる。

そして、巨大な紙飛行機が夜空へと上がっていった。

「あのバカ……」

藤美と仙谷が元の高校の屋上で彼らを見送った。

「大丈夫だろ。あれで肝が据わっている。それは俺よりも付き合いたいお前の方が分かるだろ？」

「分かりますよ。バカみたいに真っ直ぐで、迷子だった私のヒーローだったんですもの」

（彼と初めて会った時、引越してきたばかりの私は街で迷子になっていた。

そんな時に会って彼は暗くなるまで私の家を探してくれた）と、藤美はその後、自分が迷子になったことに気付いた系を思い出して笑った。

そして、涙を流していた。

「家に送る前にラーメンでも食っていくか？」

「いいですね……それ」

巨大紙飛行機のブリッジで系は浮かぬ表情をしていた。自分が下した決断が正しかったのか間違っていたのか……そんな思考がぐるぐると頭の中で回り、不意に彼は自分に向けられる視線に気付いた。

「エリンちゃん？ ウータちゃん？」

「藤美さんのこと考えてるんですか？」

「まあね」

少しむっとしてみせる。ストレートな問いに対する幾ばくかの反抗……だが、少女たちには通用しなかった。

「系さん、せつかくですから呼び捨てで呼び合いませんか？」

「いいよ。じゃ……エリン、ウータ」

「はい、系」

「うん、系」

二人の破顔一笑に系は自分の宇宙に出るという判断が間違いないことを感じた。

『私もいいですか？ 系』

「オツケオツケー、なんでも来いだ」

『そろそろ大気圏に突入します、系』

三面モニターに目一杯に広がる星空……誰もが一度は行ってみてみたいと思つたことだろう。天海 系……一人の平凡な学生がその手に握る操縦桿を通して掴んだ大きな紙飛行機は広い広い空へと飛ばされた。

……そう……彼の手によって紙飛行機は飛ぶのであった。

「行くぜ銀河！ しばしの別れ地球！ 飛ばすぜ！」

感情の高ぶりで系の目尻に涙が浮かび、それを親指で拭つてこの紙飛行機の名前の言う。

「キカ・クラフト号！」

高々と掲げられる系の腕、名付けられた巨大紙飛行機 キカ・クラフト号が宇宙へと出たのであった。

「えー、何か可愛くない……」

「格好良くない……」

『四十点ですかね』

後ろからの声にカクンと首が倒れてしまっ系だったが、笑い、真
っ直ぐに前を見据えてスティックを前へと倒した。

隣りの恒星系へ

「直接行くんじゃないやなくてメトロズドアってヤツを使うんだろ？」

『はい、時空貫通弾を使用します。分かりますよね？ 系』

少し、説明的なアーメンガードの話し方は事務的なものではなく、まるで教師が生徒に対して話しているようで時折、ほんわかしたような雰囲気醸し出すのは独特のもので管制コンピューターに『人柄』を感じられる。

「アーメンガードのダウンロードでしつかり刻まれてるからね」

『それは良かった』

（本当にこの人たちには嫌みつてもものが通じないんだな）と、系は肩に力を入れなくていいことに気付いて気持ちが一瞬軽くなるのを感じた。

そして、スティックのトリガーを引かれるとキカ・クラフト号の船首よりも少し下の装甲板が展開して発射口が現れる。

紫色の弾頭の白いミサイルが発射されて前方の何も無い空間で爆発する。そして、宇宙空間の一部が切り取られたように青に近い紫色の空間が出現する。

「うっ、すごい色だな……」

「でも、こうやって亜空間を通らないと星間移動なんて出来ませんよ」

エリンの柔らかい言葉遣いからは彼女のマジメさと優しさが反映されており、少しのんびりした調子と可愛い声相まって耳に優しい。

「アルファ・ケンタウリまで四光年とちょっとだよ。この船……キカ・クラフト号が光速の倍の速度まで加速出来ても二年かかるからウータの砕けた口調は系に対して完全に警戒心を解いた様子でボーイッシュな風貌とは違い、可愛い女の子の顔を隠さないのを見た目の印象を良い意味で裏切ってくれる。」

「往復四年……俺、成人しちまうよ」

キカ・クラフト号が亜空間へと突入して見える景色が一変する。中に入ると緑色の光点まで見える。

『実際、光速以上で移動するとウラシマ効果で歳取りませんよ』

「分かってるよ。だから、メトロズドア使ってワープしてるんだろ？」

「このキカ・クラフト号の場合は時空貫通弾を使って擬似的に亜空間を形成してそれを通っているんですけどね」

系が宇宙の技術に質問を考えるが何から訊けばいいか分からず、自分が何を分かってないのか分からなくなった。そんな折り、不意に系が声を上げる。

「あ……っ」

「どうしたんですか？」

系の顔が青ざめ、引きつっていく。

「そういえば、宇宙海賊……バーンザックだっけか？ アイツら、地球に置いてきた形になったけど、大丈夫かな？ 地球をメチャクチャに破壊してないか？」

『大丈夫だと思いますよ、アイツらは侵略が目的ではなく、カジユアの遺産が目的ですから無駄に弾丸などを消耗するのは避けます。』

宇宙に出ると何が起きるのか分かりませんからね。宇宙の旅というのは基本的には物資節約ですからね』

「あのサメ怪人たちが節約……想像出来ないな……」

系の想像が弾け飛んで『カジユアの遺産』という単語が気を引く。

「そういえばさ、まだ聞いてなかったこと」

『系、時空貫通弾を発射して下さい。そろそろ通常空間に出ないと通り過ぎます』

言葉を遮られた系がアーメンガードの言葉に慌てる。

「そういうもんなのか？ まだ十分ぐらいいしか経ってないぞ」

「光年単位で移動しますから四光年なんてすぐなんですよ」

「うーむ。まだ地球人には理解が及ばないな……」

系が再び、時空貫通弾を発射して亜空間と通常空間を繋げて亜空間から出る。左側に太陽が三つ見えてくる。

「あれ？ 太陽が三つ？ 一つ小っさ……」

真ん中の白い光を発する恒星の横に、橙色の恒星にそれらよりも明らかに小さな赤い恒星が黒の宇宙空間に浮かんでいた。

『真ん中ののがアルファ・ケンタウリでその周りのは伴星です。ちなみに小さいのは赤色矮星でプロキシマ・ケンタウリです』

「あつ、それ聞いたことある。『太陽系から一番近い恒星』だっけか？ あれ？ アルファ・ケンタウリが『太陽系の隣の太陽系』か

……

「ややこしい……」

ぶすつとした表情で系が眉根を寄せる。

「『系』が付くだけで意味合いが変わっておもしろいですよね」

「それで、あの太陽に本当の宙図があるのか？ 取りに行くのムリだろ」

『はい。キカ・クラフト号はおるか、太陽の中に入れる宇宙船なんてどこにもありませんよ、系』

「地球の太陽の表面が六千度だっけ？ そりゃ、ムリだよな」

『いえ、温度一万程度なら耐えられますがコロナの熱にはムリです』

「コロナ？」

『太陽の大気層のプラズマです。二百万度以上あり、皆既日食を見たことありませんか？』

太陽が月に隠れた時、白い輪の光が出ますよね。あれです』

「でも、一万まで耐えられるのか……すごいな」

『宇宙船の炉や兵器のことを考えれば別段、驚くことではありません。そこら辺も説明しますか？ 専門的なことになりますからオススメ出来ませんが』

「俺の頭じゃ理解出来ないからいいよ。それより、本当にどうするんだ？」

『宙図の解析出来ました。ここから二十一光分のところにある惑星

あるみたいです』

「んじゃま、行きますか」

『系、出発までの手順を踏んでくれたらあとはこちらで飛びます。どのくらいか速度まで出しますか？』

「いきなり、光速つてのは怖いからその半分にしておくか？」

『分かりました。船首向けます』

「よーそろ」

ステイックを前へと傾けて発進する。そこで系の肩をエリンが叩いて振り向くと彼はうなじに冷たさを感じた。

声にならない悲鳴を上げて系がバツと後ろを見ると結露している青いボトルを持ったウータが悪戯っぽい笑顔を浮かべていた。エリンも同じ笑顔で系を見る。

「お疲れ様、系。飲み物だよ」

「静かにしてると思ったら飲み物取りに行ってたのか」

系は受け取り、口をつけると微かなグレープフルーツの香りと直線的な砂糖の甘みが口腔に広がり、口を離して口腔に空気が触れると塩気を感じられた。

（これってまさか……）と、系が思わず、ドリンクを訝しげに見つめる。

「どうかした？」

系の様子に首を傾げるウータに手を軽く振って懸念などを払う。その瞬間、系の腹部から音が鳴る。

いつもなら赤面するところだがそれよりも、系は自分が空きっ腹であることに驚いた。

「そうか、昼食べたきりか。でも、体疲れて何にも食べられそうにないし、この船に食料あるのか？」

「私たちヒユナリも食事しますから積んでますよ、食料」

「そういえば、私もお腹減った。ご飯にしようか？」

二人が系から離れていってエリンがブリッジから出て、ウータがキャンピングシートを広げる。そこにナンタケットバスケットを持

つてきたエリンが戻ってくる。

『あとは私がやっておきますから系は食事をして大丈夫ですよ』

「そういえば、アーメンガードはキカ・クラフト号の操縦出来るんじゃないのか？」

緊急回避やら鎖ねじ切つてたりしてたじゃん」

『私はあくまで補助です。人間、それに準ずるヒユナリの意思が必要なんです。』

私が緊急回避などの行動を取るには銀河連邦によって定められた幾つもの条件を満たした時だけです』

「そういえば、銀河連邦なんてあるならそこに助けを求めればいいんじゃないのか？」

『それは……』

「けーい、早くご飯食べよー」

ためらうようなアーメンガードの言葉を遮ってエリンとウータが系を呼ぶ。

『系、これからも操縦してもらうので先に食事を済ましてきて下さい』

「ん。分かったよ」

操縦席からエリンとウータの元に行き、腰を下ろす。天井や壁を見る。がらんとした空間の真ん中に存在するのは自分たちだけ……生活感のない空間が彼にここが非日常であることを思い出させる。

だが、エリンとウータが広げる食器やサンドイッチとサラダにくすりと笑う。

「どうかした？ 系」

「いや、宇宙に出て、初めて口にするものがこれか……ってね。

だけど、体が疲れて受け付けそうにない。さっき飲んだのも少しでも揺すられたらはき出しそう……」

そう言う系の顔は確かに青ざめており、とても食事を出来る様子ではなかった。

「そう言っただけで胃に負担をかけないものを用意しました。どう

ぞ」

エリンが皿を両手に持って系に差し出す。そこに乗っているのは肉まんのような真っ白い饅頭だった。

「本当に大丈夫か？」

「宇宙のテクノジーを信じなさいな」

自信満々にウインクするエリンに系は天井を仰いでまだそこにある饅頭が目に入って手を伸ばした。

触れる指先に温もりと柔らかい質感が伝わり、系が口へ近づけて花の香りが鼻孔をくすぐられて警戒心を解いて口の中に入れた。

前歯で噛み切る。マシユマロよりも柔らかく、それでいて食感のはつきりとして適度な塩気が舌に広がって奥歯で咀嚼……嚥下すると消えた。

（食道を通ったことも胃にたどり着いたことも分からない）と、系が饅頭を見て、笑う。

「喉のところで勝手に消化吸収されるので胃の負担になることはありません。」

即効性の栄養補給で疲労回復しますよ。食べ物というよりも薬です」

「へえー」

系が全てをたிரらげて完食するとサンドイッチに手を伸ばした。

「系、即効性といってもそんなに早くは効きませんか？」

「いいのいいの、俺は順応し安いんだから」

「確かにキカ・クラフト号を簡単に操縦しちゃうわ、私たちについてきちゃうわであんまり後先考えてない？」

ウータが口元を手で隠してジツと系を観察する。

「みもふたもない……」

視線を外してサンドイッチを食べる。タマゴサンドを胃に入れるとずしつとした確かな重みを感じた。

外した視線で系は宇宙空間に浮かぶ岩石や惑星を見る。

「へっ……へっ」

系がにんまりと笑う。

「どうしたの、系？」

目尻に溜まった涙を拭って系が口を開く。

「いや、なんだかさ……本当に遠くに来たんだなって……まだ地球人が見たことのない景色がそこにあるって思ったら嬉しくなったんだ。」

別に望んで来た訳じゃないのにワクワクしてる自分がいて……危機感ないのかもしれないけど、やっぱり、俺は 男なんだなって

……」

「？」

二人が揃って眉根を寄せて首を傾げる。

「地球人っていうのは不思議な考えを持ってるんですね」

「そう見えるか？ 初めて見た……見たことのない景色にワクワクするのは誰でも一緒じゃないのかな？」

「ふーん」

ウータがサンドイッチを食べる。小さな口で先をちよつことだけ食べてエリンが系の額に視線を移して思い出す。

「系、頭の包帯替えますね」

「あつ、頼む」

エリンが立ち上がって系の後ろに回って包帯を取って新しい包帯を取り出す。

「そうだ。この船って武器無いの？ あつては欲しくないけど、またバーンザックのヤツらが攻め込んできた時に迎撃しようもないからな」

『このキカ・クラフト号に武装を施されてないのと同時に私には携行武器の物質合成の設計図はないんです。藤美さんが鉄パイプを持っていたのは覚えてますか？』

「ああ、アイツ、鉄パイプなんてどこから拾ってきたんだか……」

『あれは船の一部品であるバイパスパーツだったんです。武器を合成出来ればそれを渡していたんですが……エリンもウータも武器は

必要ありませんからね』

「確かに……」

エリンが系の頭の包帯を取り替えてウータの隣に戻る。

系が自分よりも幼く小さい少女に視線を送る。二人とも見た目には単なる少女にしか見えないものの彼女たちの力の凄さを彼はよく知っていた。

「でも、あんまり女の子に頼るのは男としては気が引けるんだよね」

「系、なに言ってるの？ 私たちは系にこのキカ・クラフト号の操縦を頼ってるんだよ？」

お互い様だよ」

「そうは言ってもやっぱり、女の子が危険な所に向かわせるのはねえ……」

腕を組んで渋い顔をして難色を見せる系にウータが嬉しそうに笑う。

「系って私たちがヒユナリなのに優しいよね」

「ん？ ヒユナリだからって別に特別なにかを思うことはないよ。

地球人なんてみんな、そういうもんじゃないかな？」

「だったら……地球ってとても素敵だな……」

憧れのような言葉とは裏腹に二人は顔を伏せてしまう。その様子に何かを感じた系が話題を切り替えようと頭を回転させる。

「そう……言えば……さ、聞きそびれてたんだけど、どうしてキミたちはカジユアの遺産を探しているの？」

このキカ・クラフト号って遺産の在処を指し示す『羅針盤の針』なんだろう？」

系が「ハズレだったけど」と付け足して二人の反応を見る。

二人は顔を上げて「ああ」と忘れていたものを思い出すように頷く。

「私たちは 正確には私たちの『オリジナル』はアルフォード・カジユアの娘なんです」

『娘』という単語よりも『オリジナル』という単語に反応を見せ

る系……

「オリジナル？」

「えと……」

エリンが自分の胸に手を当てて視線を落とす。

「私たちの人格形成にはオリジナルがいてそれがアルフォード・カジュアの娘なんです。

実はカジュアの遺産というのはその娘のためのもので『カジュアの遺産』とは周りの人が勝手に言ってるだけなんです」

「それじゃ、その娘たちはどうして自分たちでカジュアの遺産を取りに行かないんだ？」

「本当は自分で取りに行くつもりだったんですが、セブライブ戦役という宇宙戦争に巻き込まれてしまって年老いてしまい、私たちヒユナリという素体に自分の九才までの人格と記憶をコピーさせて旅に出したのです」

「どうして九才？」

「ちょうど、その時にお父さんから探すように言われたからです」

「ん？ それってカジュアから直接言われたの？」

「はい、そうですけど？」

系が眉の端を掻いて視線を巡らせて戻す。

「何かさ……時系列おかしくない？」

「と、いうと？」

「いやさ、アルフォード・カジュアが二千年前に残した遺産を探してるんだよね？」

「で、その娘さんたちがその時に宇宙戦争に巻き込まれちゃったんでしょ？」

「そうです」

「なら、キミたちっていくつ？」

「今までの稼働時間のことですか？ それだと地球時間で二百年ほどです」

「……に、二百！」

目を剥いてすつとんきょうな声を上げる系に二人が少し驚く。

「え？ 待って？ なに？ だって、寿命……は？ どういうこと？」

すつかり狼狽している系にエリンとウータも訳が分からない様子で、エリンがひらめく。

「あ、ああ……そつか、系！ 宇宙では地球で考えられないほどに寿命などは延びているんですよ。それこそ、このサンドイッチ一つ見てもテロメアを伸ばす作用があるんですよ。」

キカ・クラフト号に流れる空気も老化を抑える成分が含まれてるので地球という寿命が百年なんて過去のことです」

「地球でも科学が進歩するたびに寿命が延びているよね？」

「食べるものが良くなれば平均寿命が上がってるし、それと一緒にだ
よ」

「そつかそつか、江戸時代なんか寿命は六十ぐらいって話聞いたことあつたな。」

ん？ あれは病とかで倒れるからって話だったかな？」

首を傾げる系に二人がおかしくなつて笑う。

「まあ、現在、この銀河系では 種族の違いなどもありますけど平均寿命千三百歳ぐらいですかね」

「ちなみに、私たちヒュナリの寿命は計測不可能なんだよ」

「それって歳取らないってこと？」

「って訳じゃないんだけどね。ちなみにコピーされた人格と記憶が九才っていうのは生物学上のもので実際は四十年間の記憶なの」

「うーむ。スケールがでか過ぎていまいち把握出来ない」

「いいじゃん。別に……私たちは私たちでしょ？ 系はそう考えてくれるんでしょ？」

ウータが伏し目がちに系を見る。系はその目に自分で言ったことを思い出して鼻をこすつて口の端を上げた。

「だったな……」

（俺はこの銀河で自分の星のことだって全て知ってる訳じゃない。）

全て知ってる人間なんていないんだ。でも、そこにあるものを受け止めていこう。

俺は俺として……な」と、系は照明らしきものがないのに明るいこのブリッジでドリンクを掲げて見つめた。

ふっと笑って飲み慣れた味を感じて見えない宇宙のテクノロジーを感じて飲み終わると、「あっ」と声を上げてエリンとウータに目を向けた。

「そつだ。これも気になってたんだ」

「？」

真剣な顔つきで近付く系の顔に息を飲む二人……

「キミたち二人って……双子？」

拍子抜けする二人が肩を下ろして口を開く。

「系から見たらそうかな？ 元は同じもの訳だし……」

「そつか、一卵性が。やつぱり、似てると思つてたよ。オリジナルの人たちとそつくりなのかな？」

「そついえば、系。まだ時間ありますから少し休みますか？」

今まで働き通しですからね、このままでは宙図を見つける前に倒れてしまつかもしれませんよ」

「そつだな……腹いっぱいになつたら少し眠気が出てきたよ。仮眠しておくかな？」

そついつて系は立ち上がって操縦席の方へ……それを見て、二人が慌てて立ち上がる。

「系、仮眠するなら船室使いなよ。ベッドあるよ」

腕を引かれて眠そつに目をこする系が口の端を上げる。

「いいよ。何かあった時にすぐに船を動かさなきゃいけないだろ？ バーンザックのヤツらがいつまた襲ってくるか分からないし……」

ほら、アイツら結構、しつこそつだったじゃん」

「う、うん。でも……」

「いいっていいって……俺、椅子に座って寝るの慣れてるんだよ。

授業中、寝ること多いからね。それに……」

系がシートに腰を落として深く息をつく。

「この椅子、座り心地いいからすぐに寝れそう……」

目を閉じて一秒もせずに寝息を立て始める。

「はやっ！」

「系って呑気よね……」

『だからこそ、私たちに力を貸してくれるのかもしれないね。』

そうだ、エリンちゃん、ウータちゃん。武器の合成は出来ないんですが……」

「なにになー？」

二人が目を丸くする。

「けい」

系が眠りに落ちてから数十分後、よだれを垂らして気持ちよさそうに眠っている彼を揺する者がいた。

「ん？ んん？ 着いたのか？」

ぱちりと系が目を開けると中央のスクリーンいっぱい緑と青のモザイク模様の星が見え、エリンとウータの顔も見えた。

「おおーっ！ 何て名前の星なんだ？ 地球そっくりだな！」

その光景に僅かに残っていた眠気は飛び、がばつと立ち上がって歓喜の声を上げる系にエリンとウータが笑う。

「系、名前なんて無い星の方が多んだよ。このアルファ・ケンタウリは知的生命体がないから文化がないの」

「そっか、隣の恒星系に人がいないから宇宙人との交信も出来ないのかな？」

「そうだね。実際、系たちの太陽系は文化圏内から少し離れた所にあるからわざわざ、交信を取ろうとする人は少ないんじゃないのかな？」

お父さんも、もしかするとそういうところだからこそ、宙図をこの辺りに隠したのかもしいしね……」

系がぶすつとした調子で手のひらに顎を乗せる。

「ちえつ、俺たちはやっぱり、銀河の田舎者だったのか……」

その時、系が自分の顎に違和感を覚えた。正確には顎を乗せている手のひらの感触が　だ。いつの間にか薄い革のようなゴムのよ
うな素材の指が出ている手袋を着けていた。

「ん？　何だこれ？　てか、何だこの服？」

寝る前まで着ていた薄汚れてしまっていた学校の制服は跡形もな
く無くなっており、代わりに彼が今、身につけているのは肩に乳白
色のプロテクターが付いた青いジャケットだった。

タートルネックで七分袖の黒いシャツに膝とスネの部分に乳白色
のプロテクターが付いた青いジーンズのようなズボンと肘でまくら
れている青いジャケットの背中には円い幾何学模様のような機械部
品露出していた。

頭の包帯は取られて膝元まで先が伸びる八チマキが巻かれて左の
手首には白いブレスレットをしており、履いていた上履きはどこに
行って代わりに軽い金属で出来たショートブーツがそこにはあった。
その姿をいつの間にかウータが持ってきていた全身鏡で系が眺め
る。

「何だこれ！　ちよつと格好いい！」

ポーズを取ってみる系……

『武器の設計図はありませんでしたが、宇宙服を合成しました』

「これが宇宙服？　とてもそうは見えないけど」

ポーズを変える系にエリンとウータが困ったような笑みを浮かべ
る。

『肩と足のプロテクターと手袋、その八チマキから常にバリアーが
放射されており、その状態でも宇宙空間に出られるんですよ。』

それに八チマキが系の意志を感知して服全体に伝えて物理的に機
密性を上げます』

「どういうこと？」

『身を守る強固な盾をイメージしてみてください』

「ん？　そんないきなり言われても……」

だが、次の瞬間、ハチマキの先がぐにやりと歪んで浮き上がった。系の顔に絡みついたかと思うと閃光が走ってヘルメットに変形した。プロテクターと同じ乳白色をしており、耳の後ろの部分からアンテナが伸びて青いバイザーからは系の目が見える。

「うっそ！ どういうこと？」

「精神感応形状記憶合金ですよ、系」

「ああ、メガネとかで使われるヤツだっけ？ すごいな！ まるで生き物のように動いて俺に巻き付いて一瞬焦った」

鏡を見るとジャケットの前は閉じ、袖も伸びて手袋で指先が覆われていた。

『機密性の確保がされて有害な電波や紫外線などから身を守って物理的な防御も増しています。武器は用意出来ませんでした。これで存命確率は上がりました』

ヘルメットを解く系が再び、ヘルメットを形成する。

「へへへっ」

これに気をよくした系が何度もヘルメットを解いては形成します。

『……ちなみに、やり過ぎると命縮めますよ』

「ええっ！」

ヘルメットを解いたところで系は血相を変えて思わず、左胸に手を当てる。

『嘘です』

系がその言葉に全身から力が抜けてへたり込む。

「頼むよ、アーメンガード……っっていうか、嘘つけるのね……」

『当たり前です』

「そーなの……」

「系があまりにも楽しんでたからちよっかい出してみたくなったんだね。気持ち分かる」

「分かるな！」

後ろにいるエリンをジロツと系が睨む。そこで、系が気付く。

「そっいえばさ、着てた制服はどうしたの？」

「クリーニングして畳んでおきました」

「ありがとう……で、俺を着替えさせたの誰？」

「え？ 私たちですよ？」

曲げていた首を戻すと鏡の横から顔を出しているウータも頷く。

「うん、私たちが居ないもん。この船に……」

「……………」

系が無言でヘルメットを形成して中腰になって抱えた膝に顔を埋める。

「どうしたの、系？」

「気分悪いの？」

「いや、なんでもない……すぐに立ち直るからちょっとだけ待って

……………」

「う、うん」

何が起こってるのかわからないといった感じのいつもと立場が逆のエリンとウータが系の背中を見つめてしばしの時を待った。

初めての惑星で

「おっしやーっ！ 気を取り直して行くぞ！ おーっ！」
瞳に火を灯した系が二人に向かって拳を突き上げてみせる。

「どうしたの、系？」

「おーっ！」

エリンの疑問に構わず、系が再び、拳を突き上げる。

「おーっ！」

ノリの良いウータがそれに合わせて拳を突き上げる。それを見たエリンがよく分からないまま、拳を上げた。

「お、おー……」

「さて、それでこの星に降りるんだよね？ 大気圏突入か……突破はしたけど、突入って難しいんだろ？ ニュースで見たことある。空気の抵抗で摩擦熱が発生して真っ赤に燃えちゃう映像は衝撃的だったな」

シートに腰掛けて系がスティックを握る。

『はい。角度浅いと大気に弾かれますし、昔なら角度が深いと本当に燃え尽きてましたから……今では燃え尽きるような心配はありませんが船体に負担がかかりますからオススメはしません。』

『何事も経験です。やってみましょう』

「よっしやー！」

系が船首を下げて加速する。何かにぶつかる衝撃が船体に襲いかかって微かに揺れる。

船の周りの気体と摩擦が起こり、高温でプラズマになって赤く明るく輝いてキカ・クラフト号自体が燃えているように見える。

「だ、大丈夫なんだよな？ この船？」

「自分が名付けた船なんだから信じなさいな」

「お、おうよ」

ウータに肩を叩かれた系が上唇を舐める。船体を反転させて広い

天板で大気に乗り、空力ブレーキで減速、プラズマが散って……大気圏へと突入した。

『さすがです、系……』

まさか、船をひっくり返して衝撃波を受けるとは。想定されている運用方法とは異なる操縦を見せるなんて……』

「いや、この真っ平らな天板で降りた方が早く減速出来るかなって

……」

「さすがアーメンガードが見込んだ人間ですね」

『私、とつても勘が良いから』

（勘が良かったり、嘘つけたり、本当に人間と変わらないんだ。これが宇宙での機械の頭脳なんだ。人の心と何も変わらない）と系が口の端を上げた。

低空飛行で飛ぶ彼らの眼下に広がるのはオーストラリアほどの小さな大陸が点々と青い海に浮かんでいたのだった。

「で、どこの島に降りる？」

「あっ、あの島動いてる！」

エリンが中央右端を指さす。

「えーっ、それはないでしょ？」

半信半疑の系がエリンの指さす先を見ると、他の大陸よりも一回り小さな大陸が確かに雲が動くように海の上をプカプカと揺れ動いていた。

「本当だ……」

『宙図の反応は移動しているなのであの浮島にあると考えられます。』

おそらく、宙図衝突の際に不安定だった地層の一部が崩落してしまっただけでしょう』

「本当にそんなことあっていいと思ってるのか？」

『広い宇宙では起きたことに対して寛容に受け止めないとこの先、もちませんよ』

「分かってるよ。それで、あそこに降りるか？ 緑……森ばっかで

着陸出来そうな場所はあるにそうにないぞ？」

「こんな時こそ、アンカーですよ」

「そうだったね、重力アンカー射出！」

船体を巨大浮島に向けて系がスティック上部のボタンを押すと船首両舷の装甲が開いて錨が射出、浮島の地面に突き刺さる。

「じゃ、行ってきますね」

「留守番よろしく、系」

「……やっぱり、留守番か」

系から離れようとした二人がぼつりとおつばやかれた言葉に振り向く。

「系、一緒に行きたいの？」

「ん、いや……正直行ってみたいけど、キカ・クラフト号から離れられないから……」

『行ってもいいですよ、系』

「えっ！」

期待に溢れた表情を取る系だったがすぐに表情曇らせる。

「いいよ。いつ、バーンザックが来るか分からないし……」

『系が左の手首につけている腕輪は通信機にもなっているんです。』

それを通して私やエリンちゃんたちと通信が出来ます。私に指示をくれれば簡単な操作は出来ますから』

「本当に行っていいの？」

『はい』

「じゃ、お言葉に甘えちまうぜ！」

『それと、その腕輪は言語の自動翻訳機にもなっているのでなるべく、外さないで下さい。』

外しても持つておいて下さいね』

「あれ？ 翻訳機が必要ななら今まではどうしてキミたちの言葉を理解出来たんだ？」

『キカ・クラフト号の近くなら私が翻訳出来ます。宇宙船には自動翻訳機は標準装備されていますからね』

「公用語くらいダウンロードしてもいいぜ？」

『いえ、こう言うのも何ですが、系はカジユアの遺産を探し出した
ら地球に戻るんですから必要以上に脳へのダウンロードを行うのは
よくないと思います。』

電子頭脳と違って有機脳は情報を完全に消去することは出来ない
ので……』

「そっか、分かったよ」

系の声は少しばかり、寂しそうに聞こえ、エリンとウータは彼に
気付かれないようにその顔を覗き込んだ。

『大気成分は地球とほぼ同じ。ヘルメットは形成しなくても大丈夫
です。』

気をつけて下さいね。系はキカ・クラフト号に欠かせない存在な
んですから』

「そこは私たちに任せて」

「系のことは私たちがしっかり守るからアーメンガードは船をお願
い」

『いつてらっしゃい』

三人が光に包まれてキカ・クラフト号の天板へと電送される。

「電送自体は便利だけど、キカ・クラフト号の周りじゃないといけ
ないのは少し不便だな。……で、どうやって下に降りるんだ？」

二人が系の腕を取ってにっこりと微笑む。

「まっ、そりゃ、そうだよな……」

系が大きく息を吸い込んで一拍、地上三十メートルからエリンと
ウータが系の腕を引いて森林へと飛び降りていった。

「うわあああああっ！」

系の叫びが木霊し、木々をうまく避けてズンと音を立てて着地す
る。目を瞑って衝撃を待っていた系が目を開けて自分がすでに着地
していることに気付く。

「おっ、この服のおかげかそんなに衝撃来ない」

系が自分の瞳に映る光景に目を大きく見開く。百メートル近い高
さの木が所狭しと並んでいた。葉は針のように細く、木漏れ日が森

林の中に差す。

「セコイアか？ 初めて見た」

「いえ、普通の針葉樹ですけど、ここの星の重力は地球の半分程度ですから大きく育っているんでしょう。それに全部が結構な樹齡ですよ」

「ちなみに、飛び降りて系の足にあんまり衝撃が来なかったのは宇宙服のおかげもあるけど、重力が低いってのものあるよ」

「へえー……」

それを聞きながら木漏れ日を見上げる系はまったく別にことを考えていた。

（空が青い。大気が同じだから見せる空の色も同じ青なんだ。その青空に空白……）と、系がキカ・クラフト号を眺める。

「系、そろそろ行こう」

「おっと……そうだったな」

先に歩き出すエリンとウータの後に続いて歩き出す。木の枝に乗っている赤い一つ目のリスのような小動物が系の目を引く。大きな赤い宝石のような瞳がまばたきすることなく系を目で追う。系も目が離せなくなり、木の根に足を取られて体勢を崩す。

少し慌てるも立て直してリスがいた方向を見るとそこにはもう、何もいなかった。

系が視線を戻すと昆虫のような羽を生やしたトカゲが足をぶらんと下げて彼の目の前を横切っていく。

「すげー、どういう進化したんだろうな？ エリンとウータは俺たちと姿形まったく一緒なのにな？」

「ふふっ、それぞれの惑星の環境に合わせた進化をするのが生命体ですからね」

「でもね、惑星によってはここみたいに知的生命が生まれにくいところもあるの。」

そういうところは自然の形のまま触れないって決まりになってるんだけど、私たちも初めて来たな」

「ふうん。勝手についてきて言うのもなんだけど、ここって危険な生物とかはいないの？」

「地上にはそんな危険な生物はいないみたいですよ。」

「系が起きる前にアーメンガードがサーチしてましたから」

「そっか、今度は少し楽に行きたいもんだよね……」

「系が肩を回して長く息をついて緊張を解く。」

「しかし、この七百万平米の森の中からどうやって宙図を探すんだ？ 大陸サイズの島なんて広すぎるだろ？」

『まだ正確な位置は分かってません』

系の左腕のプレスレットからアーメンガードの声がしてきて足を止める。

「アーメンガードか、正確な位置が分かってないのに降ろすなよ」

『宇宙では位置の特定なんて本来しません』

「どういうこと？」

『恒星間距離を考えて下さい。系さんたちはこれをあまりにも大きいものとして捉えて天文学的数字として言い表していますよね？』

でも、私たちはこの恒星間距離を普通に移動しますので天文学的数字でも何でもありません。

星と星の間は開き過ぎているので、わりかし私たちは大ざっぱにしか認識していないんですよ。直径十センチの宙図を探すなんて私たちにしたら太陽系から針一本探すようなものなんです』

「気の長い話だな」

『長生きなので』

系がその言葉に肩を揺らして苦笑いする。

「でも、地球では結構、早く見つけなかったか？」

『地球には特別、特殊な物質はありませんでしたから宙図の反応は捉えやすかったです。』

でも、地球までたどり着くのに二百年余りかかりましたから』

「そんなにのんびりしてたら誰かに遺産もってかれるんじゃないか？」

「え、それは困ります。お父さんの遺産を探すのが私たちの存在理由なんですから」

「そうだよ。誰かにお父さんの遺産を奪われてたら取り返しに行かないと……」

（諦めるっていう発想はないんだろな。どこまでも前向きか……）
と、系は口元を隠してクスリと笑う。

「でも、宙図がなければ、そう簡単に見つかるもんじゃないんだろ？ 宇宙は広いんだからさ」

「本当？」

二人が系の顔を覗き込んでその大きな瞳を更に大きく見開く。

「断言は出来ないけど、大丈夫だろ。宇宙ではみんな、気長なんだから？」

『まあ、地球の人に比べれば……ですけどね』

ズツ……シンツ！

遠くから鈍重な音と共に地面が揺れる。

「とっ？ なんだ？」

系たちが音のした方を向いて動きを止めて観察する。

ズツ……シンツ！

「また同じ音……大きい」

「つて、近付いてきてないか？」

森の中がざわめき立ってヒレで羽ばたく取りたちが逃げていく。

系たちが虫や動物たちが逃げてくる方向に目をやるともう一度、音がして木々をなぎ倒して現れたのは、バッタの脚を持ったクジラだった。

「わあああああ！ 何だこりゃーっ！」

「大きい！」

「逃げるぞ！」

系は二人の腕を引いてクジラから逃げるために駆け出す。クジラが屈んでブワツツと大気唸らせてバネのように跳ねる。系たちに巨大な影を差す。系が後ろ目で確認、グツと踏み込んで前へと飛び

込む。

ズツシイッ！

バツタのような脚は系たちの真横に落ちて系は砂埃舞い上がっているのも気にならず、荒い呼吸でクジラの胸ビレのない腹部を見上げていた。

クジラは再び、屈んで系の鼻先まで体を降ろしてバネのように跳ねて彼らの遙か後方へと跳んでいった。

エリンとウータは系の小脇にすっぽりと入ってきよとんとしており、系は二人の顔を見て、安堵の息を漏らす。

「つたく、何だったんだ？ あの脚の生えたクジラは……」

「きつと、海を回遊している生物なんでしょう。その回遊コースにこの島が通ってしまっただけですわね」

「すげー確率……」

三人が立ち上がって砂をはたいて落とす。

「大丈夫だったか？ エリン、ウータ」

「うん、大丈夫。系こそ大丈夫？」

「本当は私たちが守らないといけないのに系に守られるかたちになつてごめんなさい」

「俺は何ともないし、何とも思っていないさ」

「いきなり、あんな大きな魚がやって来るんでビックリしちゃった。系は驚かなかったの？」

クジラを跳んでいった方向を三人で見ると時々、飛び跳ねて頭が見えるクジラが現れては消え、微かな震動を感じる。

「魚だったのかな？ こうなると地球の分類なんて適応されなくなるんだな……」

俺はただ単に逃げ足が速いっただけだよ。臆病なんだよ」

「本当に臆病な人はいきなり訪れた私たちを助けてなんてくれませんよ」

「それはほら、女の子に助けに来てくれーって来られたら断れないもんだからさ」

肩を揺らして笑う系に、再び、地面が大きく揺れる。
「えっ？」

今度の震動は先ほどよりも大きく、音のする方を見ると無数のクジラが跳んでこちらに向かって来ていた。

「何で？ って違う！ 群れで回遊しているんだ。逃げるぞ！」
「う、うん！」

三人が駆け出してそれを追ってクジラが跳ねる。

「系、まだ追ってくるよ。可哀相だけど、追いつく？」
「追ってくる？」

ウータの顔を覗き込んで系はその言葉に思考を走らせて「あつ」と声を上げて再び、二人の腕を取って横に走り出した。

「どうしたの？ 系？」

「違ったんだ」

「違う？」

「見てみな、あのクジラたちは俺たちを追ってた訳じゃないんだ。回遊してたんだ。餌を求めてたまたまこの島にやって来たただけ

……って自分で言ってたのに巨大なクジラを見て慌てちまったんだ」
足を止めて横断していくクジラたちを眺める系たち……

系は二人から手を離して汗を拭う。二人に目を向ける。

「けど、この星には危険な生物はいないんじゃないのか？ あのクジラ、木をなぎ倒してガシガシ進んでいくぞ」

「ええ、地上にはいませんよ」

「えっ？ 海中にはいるってこと？」

「はい」

頷くエリンにうんざりするようになだれる系がつぶやく。

「そんなトンチはいらないって……」

『宙図の反応を確認しました。エリンちゃんたちの後ろにいます』
「後ろ？」

振り返る三人が見たものは赤い玉のような鼻をしたトナカイだった。

「あはははははっ！　なんだありや！　赤鼻のトナカイだ！　現実
にいちゃったよ！

クリスマスでもないのにさー！」

系だけが声を上げて笑う。その様子に二人はぼかんとしてしまう。
ウータは系とは別のところに目が行き、指さす。

「あつ、宙図！」

赤鼻のトナカイの角の根元に緑色のリングが引っかかっていた。

「なにっ！　って、また白じゃないのか……」

「いいの！　捕まえるよ！」

エリンとウータが飛び出してトナカイに手を伸ばす。

だが、トナカイはたつと音を立てて二人の頭を踏み越えて枝分
かれしている角から翼膜を広げて空へと飛び上がった。

「ははっははっ！　赤鼻のトナカイは本当に空を飛ぶのか」

再び、笑い出す系に頭に足跡をつけられた二人はトナカイを睨み、
飛び出してトナカイに向かう。

「届かない！」

「エリンちゃん、ごめん！」

必死に手を伸ばすエリンの頭に再び、足がかけられて今度はウー
タが彼女を踏み越えて高く跳躍する。

だが、ウータはトナカイのいる高度を飛び越えてしまい、高い空
でその事実を驚いて手足をバタバタと振ってしまう。そのまま、自
由落下……

「おつとつと！」

系がウータの落下予測ポイントに行き、手を出す。風を切り、ウ
ータが系の元に落ちて砂塵巻き上げる。

……ドオオオオオン！

「いててて……」

尻餅をついているウータにその彼女の下敷きとなっている系の前
にトナカイは降りて一瞥をやってトナカイは森の中へと走って消え
ていった。

「あーっ！ 逃げちゃった……」

白目を剥いている系に腰掛けたウータが唇を尖らせてそこにエリンも着地、不満そうに自分の頭を踏んだウータに目を向ける。

「ひどいよ、ウータちゃん」

「ふふっ、ごめんごめん」

エリンは「もーっ」と声を上げながら頭をこすって髪型を整えて系が気絶していることに気付いた。

「あっ、系が伸びてる……」

「え？ 本当だ。なんで私の下のいるんだろ？ もーっ、あのトナカイ追わなくちゃいけないっていうのに……」

「ウータちゃん、系を連れてキカ・クラフト号まで戻っていてよ。」

私、あのトナカイ捕まえて宙図手に入れるからさ」

「簡単に言うけど、一人で大丈夫なの？ 系をキカ・クラフト号に置いて二人でやった方がいいんじゃないの？」

「大丈夫大丈夫。広い地形ならともかく、森のように障害物が多くて狭い所ならやり方次第でウータちゃんよりも動けるもん」

「そっか、何か考えがあるんだね。じゃあ、任せた。私はこの荷物置きにキカ・クラフト号に戻ってるね」

と、言うとウータは立ち上がって系の首根っこを掴んで肩越しに持ってエリンにっこりと笑いかけた。

「うん。お茶の用意でもしておいてよ」

ウータを見送ってエリンがむんつと両の拳を胸の前で固めてやる気を出して森の中へと走り出した。

エリンは手首につけているシュシュを取って木の枝にかけてシュシュは尋常じゃないほどに伸び、そのまま、足を進めた。

エリンは縦横無尽に森の中を駆け巡って木に角をこすりつけている赤鼻のトナカイを見つけ出して口の端を上げた。

「見つけた！ 痛くしないからジツとしてね」

その声に赤鼻のトナカイは振り向いてエリンを流し目で確認、角の翼膜を広げて威嚇する。だが、それが効果ないと見ると逃げるよ

うに駆け出した。

「あーっ！ もう！ また逃げた！ …… なーんてね」

エリンが腰に手を当てて胸を張って見下ろすようにトナカイの逃げた方向を見た。

走るトナカイの目の前に急に白いシユシユが現れてトナカイの走りやを遮ってシユシユはたわみ、トナカイを弾いてエリンの腕の中へと飛ばした。

透き通るほど薄くなっていたシユシユがたわみが戻る勢いで縮んで元のサイズに戻ってエリンの小指に引っかかる。

「はい、大人しくしてねー」

トナカイが暴れる。だが、エリンがガツシリと掴んで離さず、身動きが取れない。エリンが角の根元にかかっているリングに手を伸ばす。

「あれ？ これ、外れない」

枝分かれしている角では枝の部分で広がっているため、そこでリングが引っかかって取れないのだ。

「ど、どうしよう？」

エリンが困惑していると茂みが揺れて別のトナカイが飛び出してきてエリンへと身当てしてそれに驚いたエリンがトナカイを離してしまった。

「なにっ？」

見ると一回り小さいトナカイがエリンに捕まっていたトナカイに寄り添っていた。シユシユを手首に戻しながらエリンがその光景を見る

「親子……なのかな？」

子トナカイは後ろ足を引きずって木の枝が刺さっており、赤い血を流していた。傷は真新しく、エリンが先ほどのことを思い出す。

「さっきのクジラのせいで倒れた木の枝が刺さっちゃったのかな？

痛そうだな……」

傷に手を伸ばそうとするとその手を親トナカイが角で弾く。

「っ……っ」

顔を歪めるエリンに真っ赤になった手を親トナカイが見て、鼻先を近づけてくる。

「？」

親トナカイが舌を出してエリンの手を舐める。

「心配してくれるの？ でも、大丈夫だよ。こんなの怪我のうちに入らないもん」

「エリンちゃん、宙図は手に入った？ あれ？ トナカイ増えてる……」

ウータが駆けつけてきてその様子に少し驚いて子トナカイの傷に気付いた。

「どうしたの？ エリンちゃん、乱暴なことでもしたの？」

「違うよー。多分、さっきのクジラのせいで怪我しちゃったんだよ。だから、必要以上に気が立って私たちから逃げたんだと思うの。」

ウータちゃん、傷薬も持つてるでしょ？」

「うん、携帯用の細胞活性スプレーね」

ウータが肩当てに手を入れて手のひらサイズのスプレーを出してラベルを見ると眉根を寄せた。

「これは放射能除去だ。こっちだったかな」

反対側の肩当てに手を入れてゴソゴソと手で探り、何かが手に当たったようでも眉根を寄せる。

「これはレーションだな……」

「ウータちゃん、整理しとかないといざという時に取り出せないよ？」

「分かってるんだけどねー。物が多いからどうしてもおっくうになっちゃうんだ」

「なら、戻ったら私も手伝うから整理しよ」

「ありがと。あっ、めっけ」

ウータがもう一度、手のひらサイズのスプレーを出してラベルを確認、満足そうに頷いてエリンに見せる。

「細胞活性ね。これでいいよね？」

「うん、早く治療してあげて」

「はいはい」

ウータが子トナカイに近寄るがその間に割って入るように親トナカイが出る。

「とと、別に危害加えるつもりはないんだけど……」

「トナカイさん、今は私たちを信じてくれないかな？ 怪我したままじゃ、嫌でしょ？」

親トナカイは鼻を鳴らし、後ずさる。

「分かってくれたんだね」

「じゃ、まずは枝抜くから力抜いてね」

ウータが子トナカイの横にしゃがみ、枝を抜くと子トナカイが悲鳴のような鳴き声を上げて前足をウータへと突き出す。

「おっと」

それを軽々と受け止めて鼻で軽くため息をつく。

「エリンちゃん、ちょっと押さえてて」

「うん」

エリンが子トナカイの前足を取って親トナカイが子トナカイの顔を寄せて頬ずりする。

それを確認したウータが傷口へとスプレーを噴霧する。傷口が沸くように動き、みるみるうちに塞がっていく。清潔な白いハンカチをエリンから受け取って後ろ足についている血を拭う。

「これでよし」

立ち上がって肩当てにスプレーをしまつてエリンと顔を合わせて次に二人は親トナカイの角にかかっているリングに目を向けた。

「どうしよう、ウータちゃん。角が枝分かれしているから宙図が引つかかって取れないんだ」

「そうなの？ 困ったな」

ウータがクセのある髪の毛の穂先をいじる。親トナカイは二人の顔を覗いて一拍、頭を振るとリングがかかっている方の角がぼろり

と落ちた。

「えっ！」

「嘘っ！」

角と一緒にリングが落ちて親トナカイがそれをくわえて二人に差し出す。

「くれるの？ 私たちに？」

「でも、角が取れて痛くないの？」

『トナカイやシカ科の動物は角が生え替わるんだよ』

二人の頭の中に系の声が響く。

「系、起きたの？」

『ああ、今、キミたちの真上にいる』

二人が頭上に目を向けるとキカ・クラフト号が空に浮かんでいた。

「トナカイの角が生え替わるって本当？」

『本当だ。シカの角っていうのは皮膚が盛り上がって出来るもので人の髪や爪と同じものと考えればいいよ』

「じゃあ、いいのかな？ 受け取って……」

『おいおい、それはキミたちの物だろ？ たまたま、そのトナカイが角を生やす時に引っかけただけで邪魔に思ってたんじゃないのかな？』

「良かった。じゃ、もらうね」

エリンが親トナカイからリングを受け取って顔をほころばせる。

「じゃ、これは系へのお土産しょ」

ウータが落ちているトナカイの角を拾ってトナカイの方を見る。

「もらってもいいかな？」

親トナカイが頷いてウータも顔をほころばせる。

「けーい、お土産もらったよーっ！」

頭上のキカ・クラフト号に向かってウータが角を振って見せる。

『はははっ、ありがとうな』

キカ・クラフト号からトラクタービームが放射されてエリンとウータの体が浮いて吸い込まれるように船へと近付いて中へと電送さ

れた。

ブリッジでは系が待っており、エリンとウータはそれを見るなり、系に駆け出して彼に飛びついた。

いきなりことに驚くも系は何とか二人を受け止めて苦笑いを浮かべる。

「おいおい。どうしたどうした？ 急に甘えだしてないか？」

「いーの！ 系は何にもしてないんだから労ってよ」

「私たち、頑張ったんだから褒めて褒めて」

「よく分らないけど、仕方ないな……」

系が二人の頭を撫でると二人は嬉しそうに微笑んで系から手を離れた。

「それで……宙図を手に入れた訳だけど、また白じゃなくて今度は緑色か。ハズレ？」

「ハズレじゃないよ。これはね、宇宙図の一部なんだ。

宇宙図っていうのは直径十萬光年の銀河を描いた宇宙の地図で、宇宙という立体物の形を捉えるのに平面の図じゃ、正確な形はムリでしょ？」

「そっか、銀河のイメージ映像見ると楕円形だっけ。確かに、一方向から宇宙を見ると星の後ろにその星より小さな星があったら分からないよな。

それじゃ、全部で三つあるのか？」

「はい。それで、宇宙はただそこにあるだけでなく、広がっていきすし、星も次々と生まれているので宙図はそれぞれ予測、予知、推論する回路を持って三つの宙図の揃うことによって正確な形を定められるんです」

「確かにそれなら宙図も三つ必要な訳だ。でも、それを知ってるんなら何で赤い宙図を手に入れた時、泣いたんだ？」

二人は頬に朱を交えて上目遣いで系を見る。

「宙図ってね、今はこんな形になってるの」

そう言っってウータが取り出したのは文庫本サイズの厚みを持った

光沢のある黒の中に遊色を含んだブラックオパールのようなプレートだった。

プレートから光が発せられて銀河の立体映像が映し出される。

「技術の進歩で宙図も一枚のプレートで描けるようになっていて一世代前の三枚描写型のこと忘れてたんだ。」

それに三枚描写型も分かれている姿なんて見たことなかったから、地球で白いプレートの形が出てくるかと思っただら赤かったからビツクリしちゃったんだ」

「なるほど、宇宙でも3D化が進んでいるのか……」

二人から顔を逸らしてふっと笑う系に、エリンとウータは不思議そうに覗き込もうとする。

「それじゃ、もう一つの宙図を探しに行きますか」

系が二人と向き合って頭の後ろで腕を組んでむんと背中を伸ばして笑いかける。

「うん。あれ？」

手に持つリングを見て、エリンが小さく声を上げて驚く。

「どうしたの？ エリンちゃん」

エリンの顔がみるみるうちに青ざめていく。

「どうしよう！ この宙図、壊れちゃってる！」

「ええっ！」

「なにっ！ どうしてだ？」

エリンが涙目になって首を横に振る。

「分からない。でも、長い間、雨風にさらされたりしてから接触不良を起こしちゃったのかも……」

「そうか、赤い宙図は地中に埋まってたからそこまで衝撃を受けたりしてなかったけど、二千年も転がっていたらそりゃ、故障しちゃうよね」

「どうするんだ？ 故障してるんじゃ、次の宙図の在処からないだろ？」

修理……って出来ないのか？」

『一世代前の宇宙図の修理ならだいたいのところで可能だと思えますよ。』

「ここから一番近い商業惑星のアキナットに行きましょう」

「商業惑星？」

『名の如くです。銀河での商業を目的とした惑星でいわゆる爪楊枝から恒星間弾道ミサイルが手に入る商いを行う場というところでしょうか』

「へーっ、文化のある星にやっと思行けるんだ。色んな宇宙人に会えるかな？」

「ふふふっ、驚きますよ」

「？ よっし！ 行こうぜ！」

系が操縦席まで駆けてシートに腰掛けてスティックを握る。

「まずは大気圏突破だな。こういう時は再突破か？」

地球への突入が再突入なんだから、再突破になるんだろうけど地球では『突入』するのも別に『再』じゃないよな？ あれ？」

「どつたの、系？」

ウータが系の肩に手を置いて顔を覗き込んでくる。系はその顔をしばし、見てから不意に口を開いた。

「まっ、いつか。それにアキナット行ったら買うものあるな」

「買うものって？」

「いいからいいから」

系がスティックを握り直して前へと倒した。

「変な系なの」

ウータとエリンがシートの後ろで互いに肩をすくめる。

キカ・クラフト号は大気圏を突破し、再び、次元貫通弾を使って擬似メトロズドアを形成して亜空間に入る。

『所要時間三時間ほどです』

「今回は随分かかるな」

『今度の移動は四百光年ですからね。太陽系からアルファ・ケンタウリまでとは、さすがに違いますよ』

「そーいうもんなのかー」
「額くことしか出来ない系……」

スクープ！ 地球人が宇宙文化に接触！

エリンとウータがしきりに首を傾けて船を漕いでいるような仕事を。それに系が気付いて二人の顔を覗き込むと眠そうに目をしよぼしよぼとしていた。

「どうした二人とも、眠いのか？」

「……眠くなんて……ないよ」

「……そうだよ。まだ宙囀は二つしか見つかってないんだし……」

言葉とは裏腹に二人はまぶたを重そうにしており、系はその様子にふつと笑って立ち上がってまず、エリンの背中をぽんと叩いた。

「何かあったら戦ってもらうのは二人なんだから、その時に力出すために少しは休んでもらわないと俺が困るんだよ」

エリンの体からすつと力が抜けて系の腕に小さく収まる。小さく寝息を立て始めて系がそれを確認してウータに目を向けると、彼女はすでにへたり込んでシートに寄りかかって眠っていた。

「寝る時も二人一緒なんだな……さすが双子ってところだな」

系はエリンの膝裏に手を入れて抱え上げてブリッジから船室に行き、ベッドに寝かしつけて今度はウータを同じように抱えて持ってきてエリンの横に寝かしつける。

二人は眠りながら手をさ迷わせて互いの手を取って顔を近づけて体を丸めた。系は毛布をかけて船室を後にした。

「ありがとうございます、系。」

私では声をかけるだけで二人を寝かしつけるのに苦労していたんです」

「俺は何もしてないよ。二人が勝手に寝ただけだって」

「いえ、系が居ることによって二人とも安心しているんでしょうね。いつもよりも眠りが深いです」

ブリッジに戻った系がシートに腰掛けて頬を掻く。

「二人が系に飛びついたのはきつと、トナカイの親子にあてられて

少し、寂しく思ったからなんでしょうね』

「不思議に思ってたんだけど、エリンやウータ……ヒユナリは歳を取らないのか？」

ウータがヒユナリには寿命がないみたいなこと言ってたけど、あれって何なのかな？」

『あれはですね……』

アーメンガードが言いよどむが、ぼつりぼつりと語り出した。

『ヒユナリは前にお話した通り、兵器です。用途に応じてその姿形を変えます。』

エリンちゃんとウータちゃんのオリジナルについてお話しましたよね。

その方はカジユアから遺産を受け取ることに強い執着を持ち、当時の再現にこだわってエリンちゃんとウータちゃんの成長にプロテクトをかけているんです』

「成長？ プロテクト？」

『はい。エリンちゃんやウータちゃんのタイプは本来、最低限の知識を備えて経験を蓄積して特殊な用途に合わせた成長が出来るものなんです。』

ですが、先ほども言った通り、彼女は自分の九才だった時にこだわっているので成長させないようにしているんです』

「それで、二人は二百年も生きてるのに子供っぽいのかな？」

『そういうことになりますね』

「アーメンガードはオリジナルの人たちに会ったことはあるのか？」

『私はこの船と一緒にずっと眠っていました。セプライブ戦役が終息して彼女はこの船を再起動させてエリンちゃんとウータちゃんというコピーを連れて来たのです。』

彼女は心身ともに疲れ切り、自分の代わりに遺産を探して欲しいと言われたのです』

「思い入れが強いんだな。でも、なんでそんなに？」

アーメンガードはカジユアの遺産について何か知らないのか？」

『遺産に関する情報は私自身にもプロテクトがかけられていて引き出せないんです。』

ただ、アルフォード・カジュアはこの船の中で彼女に探すように言っただけで、何故だか、すごく嬉しそうでした。』

「ふーん。まったく謎は解けないな」

『全ては三枚の宙図を手に入れてカジュアの遺産を見つければ分かることですよ。私たちにとつての謎は宙図はどこにあるかの一点だけですから』

「そりゃ、そうだ」

（でも、なんでアルフォード・カジュアは遺産の在処を宙図を三枚に分けたうえ、それを銀河のあちこちに隠したんだ？ そんな手間のかかることをなんでしなくちゃいけなかったんだ？ 今、俺たちがしていることってまるで……）と、系は足を組んでその上で頼杖をついて視線を落とした。

「そういえば、宙図の修理の目処ってついているの？」

『商業惑星にはたくさんさんの機械技師がいますから宙図の修理なら大して手間もお金もかかりません』

「さつきはバーンザックのヤツらが現れなかったし、今回も平穩無事に行きたいよ、まったく……」

『本当ですね』

系とアーメンガードが笑い合う。二人ともエリンとウータを心配してのこと。まるで、兄と姉……もしくは父と母のように笑った。

亜空間から抜けたキカ・クラフト号の眼前に剥き出しの金属部品のつぎはぎだらけの球体が現れる。

それをブリッジのスクリーン越しに系と眠りから覚めたエリンとウータがその光景に瞳を輝かせる。

「おお、機械惑星だ。未来っばい！ あれが商業惑星？ 宇宙港はどこだ？」

『商業惑星には宇宙港はありませんよ』

「えっ？　なんで？」

『検問が必要な惑星というのは国家が成立しているところだけで、商業惑星では兵器の持ち込みをしないといけないのでいちいち、検問なんてしていると時間が掛かり過ぎますからね。商人たちが寄り集まって形を成しているだけの惑星なんです。』

商業惑星をへたに攻撃したらそこにある武器や圧縮物資、結晶工ネルギーなどに火がついて辺りの惑星を巻き込んで大爆発を起こしますから、そんな危険なことをわざわざする人間なんていないでしょうね。』

「へー、上手くやってるんだな……」

『大気圏突入をお願いします。発着場があるので私が誘導します。そこで簡単な細菌検査だけ受けてもらいます。』

「あつ、やっぱり、そんな感じのはあるんだ」

『宇宙港では細菌検査はもちろんのこと、気が遠くなるほどの項目の検査があるんですよ。』

キカ・クラフト号が大気圏を突破してアキナットの空を飛ぶ。その先で別の宇宙船が開けた場所に降りていく。

「あそこかな？」

「そうですね。今日も船がたくさんです。隅の方に降りて下さいね」「なんで？」

「宇宙船の大きさってまちまちなんだけど、キカ・クラフト号は小さいし、ここの発着場って定位置がないから好きに停めるのね。」

だから、私たちが真ん中とかに停まったら後から来た大きな船が気付かなくて踏みつぶしちゃうんだよ」

「確かにキカ・クラフト号って際だって小さいよな」

発着場にいる他の宇宙船に目を向けると高層ビルを横にしたような宇宙船がほとんどの中、キカ・クラフト号の大きさはまるでおもちゃの船……

その紙飛行機のおもちゃのような見た目通り、この広い銀河を往くにはひ弱に見えて仕方が無かった。

「武装もないし、キカ・クラフト号って大きさはどのくらいなんだ？」

『全高十メートルに全長三十メートル、横幅は二十メートル程度です』

「バーンザックのヴァンドップは高さでいったらこっちの十倍以上はあつたよな……」

改めて思うとよく逃げられたよな、俺たち……」

『それは系の腕が良かったからです』

「よせやい。おだてたって何にも出ないのは知ってるだろ？」

そう言う系だが、顔は明らかに照れてにやけ、ぶんぶんとはもない空間に手を振る。

そして、発着場の隅の方に降りて系たちはブリッジを出て、昇降口からキカ・クラフト号を降りる。

「って、出入り口あつたのかよ……」

二つの太陽が照らす大地に足をつけて系は今し方、通った昇降口に目をやる。

「普段は使っているんですけど、緊急時や、前の星のように着陸出来ない時は電送で出入りしてるんです」

「出入り口ないと中造つたら外に出られないもんね」

「だなー」

開けた空間　発着場からターミナルに歩いて行き、中に入るとガヤガヤとして喧噪に出迎えられた。

「わっ！」

系が思わず、声を漏らして目を丸くした。

そこにはあまりにも雑多な種族の宇宙人が一堂に会していた。エントランスで姿形がそれぞれ違い過ぎる人間がいた。

キョロキョロしている系の手を引いてエリンとウータが歩き出す。

「ほら、系、ジロジロ見ると失礼だよ」

系の瞳に映る多種多様な宇宙人たち、かつて人間が想像した宇宙人はほぼ全ており、広いエントランスには大小様々な体に妖怪に近

い者もいた。

(のっぺらぼうだ。どうやって物見てるんだ?)と系が次に目を映したのは目が六つある宇宙人だった。

物珍しそうに辺りを見る系を引っ張ってエリンとウータはスタスタ歩いてゲートのような物をくぐる。そして、建物を出る。

「? あれ? 細菌検査つてヤツは?」

「えっ? さつきしたじゃないですか、ゲートくぐって」

「さっきのが? 光も霧も当てられてないじゃないか」

「系の想像と違っただけだよ」

前を向くといつの間にか行列に並んでいて先を覗くと宙に浮くタイヤのない車に乗り込む人々が見えた。

「エアカーか。空を飛ぶボードとかじゃないんだ」

「そんなのだと、道路がないからぶつかりっぱなしですよ。商業惑星ってみんなが好き勝手にやってるのでフライボードを使うとケンカが絶えませんから」

「へーっ」

「ちゃんと空の道が整理されている場所だとフライボードもありませんよ」

「えっ、マジ? 一回乗って見たいと思ってるんだよな」

「系って何か中途半端に知識持つてるよね?」

「ああ、それは時々見るSFで色々知ってるだけだよ。まさか、地球人の創作が本当にあるなんて思いもしなかった。まさに事実の小説より奇なりとはね?」

「なにそれ?」

「ほら、俺たちの順番」

三人が話しているうちにエアカーに乗る順番が回って来て自動的に扉が開く。中を覗くと三人掛けシートにその前にディスプレイが置かれて無人だった。

「おっ、自動制御だ。ハイテク」

乗り込み、系を真ん中に三人が座ってエリンがディスプレイに指

先でタッチして操作、行き先を決定するとエアカーが動き出した。ニューヨーク・ブロードウェイを三倍ほどにスケールアップさせた大通りに電飾や立体映像の派手な看板を出している店に歩道には溢れるほどの人々が歩いている。

その中で、端の道でエアカーが走り、真ん中の道では全長四十メートルの巨大ダンプトラックが巨大ロボットを乗せて走っていた。

凄まじい喧噪の中、それを完全に遮断してエアカーの中は快適であり、系は身を乗り出してディスプレイをまじまじと見て、見知らない文字や地図を観察し終わると背もたれに体重を預けた。

「どんな所に行くんだ？」

「あらゆるものの修理を一手に請け負う工場があるんです。大きくてこの星の二十分の一も占めているんですよ。そのくらい大きくなると宇宙船の修理なんて出来ませんから」

「そっか、修理するために工場に宇宙船入れないといけないもんな。他の宇宙船、とにかく大きいから」

窓から外を眺めると道を行き交う人々にどれだけ首を上げようと全てを見ることは叶わないほどに大きい建造物に系は足元が浮く感覚を覚える。

「大きいんだな……全部……」

身長五メートルほどの巨人が肩に身長五十センチほどの小人が乗っていた。

「大きいだけじゃないよ。広くてそれに相当する複雑さがあるんだよ」

「？」

系と同じように外を眺めるウータがつぶやく。系がその大きな瞳に映る景色を見る。歪んでいるように思えて彼は声をかけようかと悩んでしまった。

ほどなくしてエアカーは巨大ドームの前に止まって扉が開いた。

「とうちゃーくっ！」

ウータがびよこんと両腕を上げて外に出る。系は先ほどの違和感

が無くなっていることに安堵してエアカーから出てエリンが続く。
巨大ドームに入っていく人々に上を見上げると幾つかの宇宙船が降りていき、飛び立っている。

中に入ると黄色いヒヨコが小さな羽根を羽ばたかせて系たちの元に近寄ってくる。

『ガイドロボのパロットです。本日のご用はどのようなものの修理でしょうか?』

「可愛いー」

「へー、受け付けない代わりにガイドロボが来るんだ。金かかってるな」

周りを見ると同じ形のヒヨコが入って来た者を相手をしていた。

「今日は宙図の修理を頼みに来たんだけど、行きつけの店があるから大丈夫だよ。ありがとう」

『いえ、何かありましたらすぐに呼んで下さい。飛んで行きましょ
う』

「はははっ、確かに飛んできてもらっよ」

『では、ごゆっくりと』

「サンキュ」

エリンとウータが手を振ってガイドロボットは別の人のところへと飛んでいった。

系がドーム内を一望する。まだらに開いている天井は高く、雑多な種族の人々が様々な店をブースで開いていた。ガヤガヤとした喧噪の中、エリンとウータが足を前に出す。

「系、行こう」

「ああ」

歩き出し、人の波に乗る。またしても、系はキョロキョロと目新しい宇宙人に対して目を向けてしまう。

岩の肌がカメの甲羅のように並んでいる人間や、ウミウシのような軟体動物のような人間もいれば、十人に一人ほどの割合で地球人に似た宇宙人がいるがよく観察すると耳が尖っていたり、目が三つ

の者などいて一様に系の目を引く。

「なあ、色んな人がいるけど、みんな仲良くやってるみたいだな？」

「え、ええ……」

系の言葉にエリンが表情を曇らせてうつむく。系が先ほどのウータを見るような既視感を覚える。不意に系の隣りを誰かがすれ違う。「！」

思わず立ち止まって系が振り向いてしまう。その動作にすれ違った宇宙人も立ち止まって向き合う。小柄な身長に灰色の肌……頭髪はなく、大きな黒目が特徴的な地球で一番、目撃されている宇宙人……リトル・グレイだった。

「本当にいたんだ」

「……………」

リトル・グレイは肩を回してムーンウォークで人の波に戻っていた。リトル・グレイの姿は見えなくなり、しばらくして遠くで「ポウツ！」というシャウトが高音のシャウトが聞こえてきて系が肩をビクツと震わせた。

「やっぱり、地球に来たことあるのかな？」

嫌な汗をかいて拭う系が振り返るとそこにエリンとウータはおらず、あるのは見知らぬ宇宙人たちの背中だった。

「えっ？」

目を見開き、視界が幾ばくか広がるものの求める者は現れない。だが、系は視界を広げるのが目的ではなく、目の前の光景が信じられなかったのだ。

「俺、迷子？」

辺りを見渡すが答える者はどこにも存在せず、系から再び、嫌な汗がだらだらと流れて顔面を流れる。

「この広い宇宙に迷子になったのか？」

系が、だつと地面を蹴った。人波をかき分けて白と黒の二人の少女を探す。

「え、エリンーっ！ ウーターっ！」

二人の名前を呼ぶが返事は来ず、系はとにかく走ってあの小さな少女の姿を探す。辺りを見ながら走る彼の前に不意に人影が現れる。「とっ！」

「きゃっ！」

ぶつかって段ボールが宙に飛ぶ。そして、尻餅をついた系の頭に落ちる。

「あだっ！」

系の目から星が飛んで、段ボールは地面に落ちて口が開いて機械部品が転がる。道を歩く人々がそれに驚いてみんな、避けながら何事も無かったように人の波になっていく。

「いたたたっ！ ご、ごめん……」

系にぶつかつたのはエリンやウータと同じくらいの小さな女の子で、違うのは獣毛に包まれた長い耳が垂れていた。粗末な服を着て、顔も薄汚れていて、女の子が系に駆け寄る。

「ごめんなさい。ごめんなさい！ 私が不注意だったばかりに……」
女の子は涙目で系に異常がないか事細やかに観察する。触れてい
いか分ならず、手が中空をさ迷う。その様子は困惑というより、怯
えに近い。

「大丈夫、大丈夫……俺、見た目より頑丈だし、ぶつかつたのは俺
が飛び出したせいなんだしさ。気にしないで」

「いえ、ごめんなさい。ごめんなさい。だから、ぶたないで」

「はっ？ ぶたないって。それよりも、そっちは怪我ないか？」

ふと、系が段ボールから転がっている機械部品を見て、手に取る。
だが、その重さに驚き、肩が下がる。

「重いな。なんでキミみたいな子供がこんな荷物を運んでるんだ？
っていうか、こんなのどうやって持ってたんだ？」

「あっ、あの……私……ヒユナリなので……」

女の子が胸元で手をギュッと結んで伏せた目を泳がせながら言う。
「そうか、ヒユナリだから力持ちなんだ。俺もヒユナリ知ってるけ
ど、こっちが困るくらいにパワフルでさ……で、はぐれちゃったん

だよね……」

系がどんよりとした雰囲気となり、地面に『の』の字を描き始める。

「あつ、あの……」

「つと、落ち込んでる場合じゃないな。早く拾わないと邪魔になる」
系が横になっっている段ボールを立てて拾った機械部品を入れていく。

「あつ、私が拾いますから！」

女の子が手を伸ばして系の手を払う形になる。女の子の顔が引きつる。女の子が頭を手でかばって身を縮こませる。

「どうした？ 早く拾おうぜ」

系が首を傾げて女の子が頭から手をどかしてきよんとする。彼の顔を無言で見つめて系がその視線に気付いて見返す。

「どうして、あなたはヒユナリに対して普通に接するんですか？」

「ん？ ああ、兵器なんだから、キミら……」

女の子が表情を曇らせ、系も苦い顔をする。

「だから、感情が無いみたいに見えるヤツもいるんだろ？ ひどい話だよな。」

まっ、俺はそういうヤツとは違うから」

系が機械部品を拾い終えて段ボールを持つと上がるが上がない。表情を曇らせていた女の子が慌てて手を伸ばす。段ボールを持ち上げて女の子が立ち上がる。

系も立ち上がると女の子は頭を下げた。

「ごめんなさい」

必死に何度も謝る彼女に系はつい、くすりと笑う。

「謝ることないだろ？ ぶつかったのは俺で荷物ばらまいたから拾っただけだろ？」

「でも……」

「なら、『ありがとう』で頼む」

「えっ？」

「俺の知ってるヒユナリの女の子はもつと笑うぜ」

女の子にグツと親指が立てられ、ぼかんとして一拍……少しだけ、ほんの少しだけ彼女は表情和らげて笑った。

「ありがとうございます……ごさいます」

「おうよ！」

「こらっ！ ヒユナリ！」

第三者の男の声に二人が振り向くと赤いトサカを生やし、青い羽毛に覆われた鳥が人の姿をしている宇宙人が肩を怒らせて女の子に近付いてきた。

「荷物の一つもろくに運べないのか！」

鳥人間が女の子の髪をむし掴みにして引く。彼女が痛そうに顔を歪めるが声を押し殺すように耐える。その光景に系が息を飲む。

「おい。何でいきなりそんなことするんだよ！」

「あん？」

系の存在に気付いた鳥人間は系の顔を見るなり、吊り上げていた尻尾を一気に下げて女の子から手を離して自分の手を揉み出す。

「これこれは……お客様でしたか。このヒユナリが大変失礼致しました。」

こいつは廃棄処分寸前のものを再利用してますので、至らない点が多く、申し訳ありませんでした。

「ああっ！ 服がオイルで汚れてらっしゃる」

鳥人間がキツと女の子を睨んで頭を小突く。

「こいつめ！ 拾ってやった恩をどうしてそんなに簡単に忘れるんだ！ 代わりはいくらでもいるんだぞ！」

「ごめんなさい、ごめんなさい」

女の子は泣きそうになりながらただ謝るばかりで、鳥人間がまた、女の子の髪を引っ張る。

「お、おい！ やめろって！」

「ああ、今回の件はこれにて穩便に済ませてもらえないでしょうか？」

手のひらを返す鳥人間がカードを取り出して頭を深々と下げながら差し出す。

「こ、これは？」

系は受け取らずに訊く。鳥人間は系の手を取ってカードを握らせると顔を近づけると耳打ちしてくる。

「ほんのお気持ちばかり……トリト工務店をこれからもよろしくお願います」

「えっ？ えっ？」

「ほらっ！ 行くぞ！」

鳥人間が女の子を連れて人波に消えていく。最後に女の子と系の目が合い、彼はその何かを訴えかけるような瞳に手を伸ばした。

「ま……」

声をかけようとした瞬間、肩を叩かれて振り返ると荒い息のエリンとウータが目を剥いていた。

「あっ、エリンにウータ……」

「もーっ、系！ どこ行ってたのよ、探したんだからね！」

「一人で勝手にどっか行って迷子になったらどうするのよ！」

「実際、迷子になってました。はい」

引きつる系にエリンとウータは系のバンダナを引いてずんずんと女の子が消えていった方向から逆方向に進んでいく。

「おっとつと！」

バンダナを引かれて後ろ向きに歩くしかない系……女の子が連れて行かれた方向を見るともう見なくなっていた。これだけ大きな建造物の中でこれだけの人混みで見知ったエリンとウータでさ、出会うのにこれだけ時間が掛かってしまったのだ。もう、出会うことはないのだろう。

エリンとウータに引かれて辿り着いたブースに系は目を見張った。機械がゴタゴタと編み込まれて形を成す小屋に入ると、小屋と同じように機械で編み込まれた柱時計が出迎えてくれた。

（他の店に比べて随分と小さいな……）と、系が風変わりな趣の店

に軽く警戒してしまう。

店の中は薄暗い照明に少し、埃っぽいものを感じて機械油のニオイが鼻にやんわりと入ってくる。

柱時計に隠れるように店内の奥には作業台があり、その作業台の前で椅子の上であぐらを掻いている男の背中が見えた。

「んー？」

真っ白な白衣を着たドレッドヘアの男が自分が座る椅子を回転させて銀色のサングラスをかけた真っ黒な肌を男がエリンとウータを見るなりにかつと白い歯を見せて笑った。

「エリンにウータか。どうした？ カジュアの遺産を見つけたか？」

「ううん、遺産の在処を記した宙図は見つけたけど、壊れちゃって作動しないの」

「ほう、それは困ったな」

真っ黒な肌の男とエリンとウータは顔見知りらしく会話を行う。

真っ黒な肌の男は椅子に乗ったまま、作業台を押してキャスターによって移動、系たちの前で上手に止まる。

「おや、新顔だね。だが、単なる人間か。まっ、いつか。俺の名前はイデオムだ。」

機械技師をやっている。よろしく」

「地球人の天海系です」

系よりも見た目は二つか三つほど年上の男が椅子に座ったまま手を差し出す。系は躊躇せず手を出して二人が握手する。だが、イデオムの腕が肘からすっぽりと抜けて系が固まる。

イデオムはその反応に満足がいったようににかつと笑って白衣の袖から本当の腕を出してわきわきと指を動かす。

「はっはっはっ！ 驚かせてごめんな。それは単なる義手だよ。驚いた？ 驚いた？」

「たいへん良い趣味をお持ちで」

驚かされた腹いせに義手を捨てる。

「さて、壊れてる宙図を直しにここに来たんだろ？ 見せな」

捨てられた義手を気にせず、イデオムはエリンとウータに手を差し出して二人は頷いて緑色のリングを取り出す。

「ほう、一世代前の宙図の片割れか」

イデオムがリングに顔を近づけて様々な角度から観察する。

「多分、接触不良なんだと思うけど、イデオムさん、見てくれる？」

「オツケー、と言いたいところだが、少しばかり仕事が立て込んでいてな。引き受けてもいいが仕上がりは明日になるだろうな」

ウータからリングを受け取ったイデオムが人差し指で回しながら言い、エリンとウータが頷く。

「いいですよ。ここまで来るのに二百年かかったんですから一日なんてすぐですもん」

系が作業台の上にとっちやりと乗ってる機械部品の山を見る。

「ちなみにどのくらい仕事を抱えてるんですか？」

「ん〜？ 五百程度か？」

「五百！ 一人でやるんですか？」

「はっはっはっ！ なーに、俺は天才だからな。この程度は一晚で片付けられるんだ」

系が訝しの視線を送る。

「自称天才が天才だった試しがありませんでしたけど」

「か〜っ！ これだから銀河の田舎者は！ 嫌になっちゃうねー、まったく」

「そっだよ、系。イデオムさんはこれでも若いカリスマでここには修行のために修理店を開いてるんだよ……で、いいですよね？」

「『これでも』はいらないけどね、エリン」

「？」

首を傾げるエリン……分かっていない模様……

エリンの様子にうなだれてしまいうデオムに系がフォローを入れる。

「自他ともに認める天才なのは分かりました。すごいですね、イデ

イオムさん」

「俺は人の優しさを理解出来る天才だから感謝するぜ。系くん」

銀色のサングラスの奥の涙を拭うイディオム……そして、気を取り直したのかにかつと笑う。

「今日はホテルにでも行きな。そして、アメをあげよう」

不意に差し出される握られた両手にエリンとウータが顔を近づける。開かれる手には赤色の包装紙とピンク色の包装紙に包まれたアメ玉が現れた。

「こつち」

二人が異口同音、ピンク色の包装紙に包まれたアメ玉を指さす。(どうするんだろ?)と、系は子供のこだわりの強さを改めて思い知らされる。

イディオムはピンク色のアメ玉の手を握り、もう一度、開くと一つが二つに増えていた。

「おおおっ!」

子供心を分かっているイディオムの行動について系が拍手を送り、エリンとウータがアメ玉を受け取ってにっこりと笑う。

「ほら、系くんも受け取っておけ。うまいぞ」

「この歳で人からアメをもらうとは思わなかったな」

エリンとウータは受け取ってすぐに包装紙を外し、虹色のアメを口に入れた。系はポケットに入れておいた。

銀河での悲しい常識

「そうだ。エリンにウータ、少し、おつかいを頼まれてくれないか？」

イデオムの申し出に二人が口の中でアメ玉を転がしながら大きく頷く。それを見たイデオムが名刺サイズのプレートを出して二人が受け取ると箇条書きリストの立体映像が映し出される。

「ちよつくら足りないパーツを頼む。それがクレジットにもなってるからそれで支払いよろしく」

二人はアメ玉で頬をぶつくりと膨らませて口を開く。

「分かった。じゃ、ちよつと行ってくるね」

「系はここで待ってて」

「ええ？ 俺も行きたいな」

「ダメだよ。また迷子になったらどうするのさ。さっきはたまたま私たちが見つけたからいいけど、今度こそ迷子になっちゃうよ」

「うっ、それを言われると弱いな……分かったよ」

「仲良くすっぺ！ 系くん」

「へいへい」

「じゃあ、ひとつ走り行ってきます」

二人が走っていき、店内に系とイデオムの二人だけになる。

「さて、少し、話をしよう。実はアーメンガードから連絡があつて事情は聞いているんだ。地球っていう境界の惑星でエリンとウータに頼まれてトイ・フライトの操舵士になつたんだろ？」

「トイ・フライト？」

聞き慣れない単語について聞き返してしまう。

「ああ、今はキカ・クラフト号って名前だったっけ。トイ・フライトは周りが勝手に言ってる名前さ」

「あっ、ああ……」

なあ、あんたはエリンたちとは顔見知りなのか？」

「ふふつ、俺はアルフォード・カジュアを崇拜しているからね。相手がヒュナリでも協力しているんだ。もちろん、見返りはカジュアの遺産の真実さ」

「ヒュナリでも……協力？ さっき、ヒュナリに対してひどい扱いをするヤツを見たんだけど、ここではそんなにヒュナリは身分が低いのか？」

イデオムが床を蹴って椅子を回転させる。

「人がいる惑星には初めて来たんだろ？ キミはここをどういう風に見た？」

イデオムが回転ながら口の端を上げる。

「どうって……広くてでかいなって あと、すごくたくさん種類の人間がいるんだなって思ったけど……」

「そう、そんなに種族がいるならさ。優劣をつけたくなるのが人情つてもものだろ？」

でも、銀河では人種差別は起きていない。それぞれ種族によって能力は目に見えて違うというのにさ」

「でも、それは文明が発達するにつれて解消されるものだろ？ 事実、地球では黒人差別つてのがあったけど、それはもう無くなってるんだ」

「甘い。甘いねえ。さっき、俺があげたアメよりも甘い」

「どういうことだよ？」

回転が終わってむっとする系と向き合うイデオムが上体を後ろに逸らす。サングラスの隙間から微かに目が覗けた。

「地球での種族の違いなんて微々たるものだろ？」

「ちょっと気になって調べたけど、大まかに白人、黒人、黄色人種の三つだけなんだろ？」

「しかも、それはもはや、廃れたもの見方だ」

イデオムが緑色のリングから系を覗いて系が身構えてしまう。

「宇宙は違う。違い過ぎるんだ。互いに別々の概念を持って別々の思想で暮らしている。」

例えば、ほとんどの種族のものが持つ“怠惰”を俺らは知らない。概念がない。それと同時にキミたちは“物心がついた時の怒り”を知らないだろ？」

「？ えっ？ え？」

頭がこんがらがる系の様子にイデオムが頷く。

「分からないだろう。理解出来ないだろう。こっやって種族はそれぞれに決して分からない概念を持っているんだ。理解し合うことは出来ない。」

……相手を蔑むことは止められないんだ」

系が喉を鳴らして後ずさる。

「で、でも、実際に銀河では差別は起きてないんだろ？ 矛盾してるじゃないか」

力が入り、自然と手を振って語気を強めてしまう系だった。

「そう、起こるべき現象は起きてないんだ。その矛盾を埋めるのはヒユナリなんだ。」

兵器として造られたヒユナリは兵器として使えないと判断されれば、廃棄処分を受けるか小間使いとして奴隷のような仕打ちを受けて生きるかのどちらかだ」

「何でそんなことが起きているんだ？ ひどい話だ」

「確かにひどい。だが、ヒユナリは造物主には逆らえないんだ。そうして、ヒユナリは図らずとも銀河の安定を保っている。」

ヒユナリが差別される対象として一手にその役目を背負って人々はその事実にも目を逸らしながら、今日も人々は表面上で笑っているんだ」

「あ、あんたはどうなんだ？ あんたもそんな風に、ヒユナリのことを……エリンとウータのことを考えているのか？」

「どうだろうな？ さっきも言った通り、それぞれの考えの違いは本当に分かりづらいんだ。だが、俺はヒユナリを兵器として高く評価しているつもりだ。俺自身が一科学者だから……」

イデオムがサングラスのブリッジを押し上げる。

「元々、ヒュナリに対して人はそんなに深く考えないからな。これが銀河の内情だ。」

「どうだい？ 宇宙への甘い幻想は打ち砕かれたか？」

系はその言葉を静かに聞いていた。自分の胸に親指を突き立てて目の前の相手に殴りかかりたい思いを必死にこらえて……

（ダメだ。この人が悪い訳じゃない。殴るのはお門違い……殴つても何の解決にもならない。俺は……）と、系は自分の胸に押し当てる親指を離して今一度、イデオムと真剣に向き合う。

「俺は別に甘い幻想を抱いて宇宙に出た訳じゃない。ただ、一生懸命だったあの子たちの手助けをほしかっただけなんだ」

「キミは良い顔をするんだな。そんなに真剣な顔を見たのは二百年振りだよ」

「俺を試したんですか？」

肩をすくめてイデオムは再び、回転する。

「別に……そういう風に取ってもらってもいいかな」

拳を固めてしまう系だったがイデオムはその様子を察しながらふざけた振る舞いを止めない。そこにバツとエリンとウータが入ってくる。

「ただいまーっ！」

両手にカゴを持った二人が入って来て系の毒気は抜けてイデオムが回転を止める。

「お、おかえり」

固めた拳を後ろに隠して系がぎこちなく笑う。

「はい、イデオムさん。これで全部だよ」

カゴを受け取ってイデオムが中を覗いて視線を戻す。

「確かに。おつりはお駄賃だ。受け取っておきな」

「えっ！ いいの！ 結構残ってるよ」

「キミたちの旅の足しになればいいと思つての俺の気持ちだ」

「……………」

系は怪訝な表情でイデオムを見て、彼はその視線に気付くと齒

を見せて笑った。

クレジットを手に持つてはしゃいでいるエリンに系が歩み寄ってクレジットを取り上げてそれをイデオムに突き出す。

「これは受け取れない。必要以上の施しは受けられない。俺たちは自分の心で決めた道を歩くんだ」

「け、系？」

エリンとウータが系に驚き、その顔を覗き込む。系は視線だけ二人に送って口を開く。

「いいよな？ これを受け取る意味は俺たちにはないんだから」

「う、うん」

「そう……だね」

すっかり気圧されたエリンとウータはついつい頷いてしまった。

「じゃあ、イデオムさん。宙図の修理だけ頼みます」

「宙図の修理 だけ ね」

イデオムが「だけ」という言葉を強調して言い、系は胸元のざわめきを抱えたままに外に出た。

少しふてくされた様子の子がドーム内を歩いていき、系の変化に戸惑っているエリンとウータがその後続く。

「け、系？ 何かあったの？」

「イデオムさんに何か言われたの？」

系が二人の声色の変化に驚いて振り返るとエリンとウータが心配そうに振り返った系を見上げ、系は自分の眉根にシワが寄っていることを初めて気付いた。

三人は足を止めて向き合い、系が鼻のため息をついて二人の頭を手を置いた。二人はビクツと身を固めるも系がいつもの調子に戻っていることにすぐに気付いて硬直を緩めて系の様子を見つめる。

「ごめんごめん。ちよつと難しい話をして、ついつい難しい顔をしちゃってたんだ。」

もう大丈夫だよ」

「難しい話って？」

ウータがくすぐったそうに目を細めて指の間から系の顔を見上げる。

系は二人から手を離して二人の大きく開かれている瞳を見る。その瞳に映るのは自分の口の端を上げている顔で、安堵して口を開く。

「へへっ、今はまだ知る必要なんてないんだよ。気にするな」

「系、私たちのこと子供扱いしている……」

「たとえ、二百歳でもお前らは子供だよ。俺の妹みたいなもんだ」

「えーっ、そんなのおかしいよ。私たちの方がお姉さんだよ」

「そうだよ。系はまだ十七歳でしょ？ それなら私たちの方がお姉さん」

二人が得意げに胸を張る様に系は笑ってしまふ。そして、再び、二人の頭に手を置いてくしゃくしゃと髪を掻き乱す。

「この話は今度しておくか。なっ？」

「そう言いながら、系、頭撫でて私たちのこと低く見てるでしょ？」

「もーっ、子供扱いして！」

「低く見てるのは背のことだけだよ！ おっし、行くぞ」

再び、歩き出す系にエリンとウータが乱れた髪を整えながら後に続く。

「そつだ。家具屋みたいなないかな？」

「家具屋？」

不意に系が顔だけ後ろに向けてエリンとウータが首を傾げて聞き返す。系は頷いて顔を少女たちに近づけて口を開く。

キカ・クラフト号のブリッジに金属音が響く。ギュツとネジをレンチで締めて椅子を固定させる。

「ずっと気になってたんだ。この船のブリッジ、広いのに操縦席が一つあるだけで殺風景だね。操縦者以外腰掛けるスペースないわでさ」

系がレンチ片手に口の端を上げる。ブリッジの操縦席の少し、後ろの所にシートを二つ設置したのだ。

エリンとウータがシートにお尻から落ちて楽しそうに弾む。

「やったーっ！」

「系、ありがとう！」

「って、言っただって金を出したのはエリンとウータで俺は提案した
だけだよ」

「でも、系の気持ちがあつごく嬉しいの」

「今日はここで寝たいかも」

はしゃぐ二人に反して系は苦笑いしてしまう。

「おいおい、地球で出会ってからここまで仮眠ぐらいしか取ってな
いだろ？ そろそろ俺はちゃんとしたベッドで寝たいんだよ」

「なら、系は船室で寝ればいいんだよ。うん」

（「うん」じゃねえって……）と、系が二人とも本気なことに対し
ておかしくなっていた。

「温かい料理食べたいっていうか、宇宙のホテルつても気になっ
てるんだ。頼むよ」

「うーん、分かったよ」

「そこまで言われちゃったらね」

エリンとウータが悪戯っぽい笑顔を浮かべて顔を合わせる。系が
手を合わせて頭を下げて笑って見せる。

「痛み入るよ」

『ホテルの予約は入れておきました。センターホテルです。ラウン
ジで系さんの名前を出せば受け付けてもらえます』

「アーメンガード、すまないな。行ってくる」

『いえ、私は単なるキカ・クラフト号の管制コンピュータです。人
のように、ヒユナリのように疲れることもありません』

系がその言葉に眉をひそめる。

「でも、人格っていうか心はあるんだろ？」

『私にあるのは擬似人格です。系が言うような“心”はありません
……』

「そんな風に言うなよ」

『……系……』

二人が系を心配そうに見て、系がその視線に気付く。

「エリン、ウータ、先に出てくれ。すぐに追うから」

「ケンカ……しちゃ、嫌だよ」

「しない、しない」

二人がブリッジから出て行く。

『エリンちゃんとウータちゃんは出ましたよ』

「アーメンガード、俺とイデオムの会話を聞いていたのか？」

……僅かな間……

『イデオムが通信回線を交いして私に流してきたんです』

「やっぱり……」

深くため息をついて系がかぶりを振る。

「なあ、アーメンガードが何かを考えているか分からないけど、俺はエリンもウータも、アーメンガードも俺と同じ人間だと思ってる。

こうやって会話して一緒に笑えるなら俺はキミたちを他の人が言うような機械人形には思えないんだ。それじゃ、ダメなのか？」

『……ダメなんです』

「っ！」

『系さんは優し過ぎます。カジユアの遺産が見つかってエリンちゃんとウータちゃんとの別れを考えるとこれ以上、あなたの優しさを知るのはあまにも酷なことだと思っんです。』

二人はこの広い宇宙でヒユナリとして生きていくしかないんです。

分かって下さい……系』

「アーメンガードが言いたいことは分かった。でも、それを聞き入れることは出来ないよ」

『！ どうしてですか！』

「そんな風に二人のことを心配するアーメンガードのことを単なる制御コンピュータと思えない。考えられない」

『っ！』

「アーメンガード、急にそんなつんけんするなよ。俺はそんなに薄

情なことはいしない。

約束する。俺は何があっても三人を人間として見る。これが今の俺に出せる精一杯の答えだ。これじゃ、ダメかな？」

『系……ありがとう……』

「気にするなつて。じゃあ、二人が心配するからそろそろ行くな」

『はい。二人をお願いします』

「ああ」

天井に向かって微笑みかける。そして、系がブリッジを出ようとする。

『あつ、系！』

「ん？」

不意に呼び止められて不自然な体勢で系が動きを止める。

『その……良い夢を』

「ああ、アーメンガードも……おやすみ」

キカ・クラフト号から出た系を出迎えたのは明らかに不機嫌になっているエリンとウータだった。

双方とも腕を組んで荒い鼻息をついて系を睨む。

「系、おそーい！」

「アーメンガードと何話してたのよ？」

「悪い悪い、さあ、行こうぜ」

夕焼け空の下、気を取り直したエリンとウータが歩み寄る系に手を差し出す。そして、破顔一笑……

「行こつ！」

「ああ」

駆ける必要もないのに三人は駆け出し、一路、センターホテルに向かった。

ホテルに着いた系は広いエントランスでシャンデリアを見つけて感嘆の声を上げた。

「おおつ！ シャンデリアって実物初めて見た。アーメンガード、張り込んだな。」

そういえば、金つてどうしてるんだ？ 稼いだりしてるの？」

「いえ、旅立つ時にかなり持たされたので」

「そっか、オリジナルの人たちにもらったんだ。戦禍の中にいたのに結構持つてるんだな」

「詳しくは知りませんが、お父さんが兵器開発してたから印税が入ってたみたいです」

「兵器でも特許みたいなのあるのかな？」

「さあ」

そこに燕尾服を着た羊が歩み寄ってきた。丸く曲がった角はオウムガイのように綺麗な円を描いてふわふわの羊毛に全身を覆った執事姿の羊が系に話しかける。

「アキナット商会センターホテルによるこそお越し下さいました。

私、ボーイのミツジといます。

ささつ、お客様、受け付けへとご案内致します」

すこし、のんびりとした口調が特徴的なミツジが、見える位置にある受け付けへと手で指し示される。

「えっと、天海系の名前で予約してあると思うんですけど」

「さようでございますか、ただいま確認致しますので、どうかロビ―でおくつろぎして下さいませ」

「いや、ここがいいよ」

系が手を振るとミツジが頭を下げて受け付けへと歩いて行き、受付嬢と二、三、言葉を交わして何かを受け取ると系たちの元に戻ってくる。

「確認が終わりました。さっそく、お部屋へとご案内致します」

手に持つ鍵が一つだけのことを杞憂のなれと思いながら系はミツジの後に続いた。

そして、三つのベッドが置いてある部屋に通されて系は深いため息をついた。

「はあ……アーメンガード、人に優し過ぎるって言ってどうしてこんな部屋を取ったんだよ……」

『恩返しです』

見ていたかのようなタイミングでアーメンガードからの通信が入ってブレスレットを系が乾いた目で見る。

「それを言うならお返しだ。もっと言うなら仕返しだ」

『そうとも言います』

「お客様、いかがされましたか？」

「他に一人部屋を用意して下さい！」

拳を握って力強く言う系の言葉にミツジが驚く。

「申し訳ありません。急に団体様がお見えになって部屋の工面のために声をかけたら快く部屋を一つにして下さったのはお客様ではないですか？」

『通信切りまーす』

ブツツと音を立ててブレスレットの通信が切れ、ミツジが困ったように首を傾げる。

「その代わり、サービスさせて頂くのでどうかご了承ただけでないでしょうか？」

元来、頼み事を断りにくい性分の系は後ろにいるエリンとウータに顔を向けると二人とも不思議そうな顔を系の視線に気付くと小首を傾げた。

（俺が何のことを話しているのか分からないぐらいだから、意識してんのは俺だけか。

まっ、どうにかなることも実際ないよな）と、系は気を取り直してミツジと向き合って頷いた。

「すみません。身内で連絡がいつてなかっただけです。ここでいいです」

「ありがとうございます、お客様。お夕食は二十標準時間からになりますので、お待ちしております」

ミツジが頭を下げて部屋真ん中の長テーブルに鍵を置いてもう一度、黙礼、部屋を後にした。

部屋に三人だけになり、系は改めて部屋の中に目を向けた。

広く綺麗な部屋に高そうな調度品や飴色のテーブルに乗る果物などが目を引き、小さなカウンターバーまであつて系を驚かせる。

「ちよつとしたスイートじゃん。地球にいたらなかなか行けるもんじゃないぞ」

「系、食事まで時間があるから普通のショッピングしに行かない？」
「そうだな。行ってみるか」

頷く系に二人は微笑んだ。ホテルから出た三人はまたエアカーに乗って今度はショッピングモールに行った。

そこでは本当にアーメンガードの言ったように爪楊枝から恒星間弾道ミサイルまで取りそろえて系を再び、驚かせた。

最初はエリンとウータに付き合つて服や装飾品を見て回るが、彼女たちは気に入ったものを見つけて表情を明るくする素振りを見せるが、すぐに顔を伏せて少しだけ、我慢するように唇を尖らせた。

「どうした？ 買いたいんじゃないのか？」
ふるふると二人は顔を横に振つてしばらくすると口を開いた。

「私たちはお父さんの遺産を探すためのヒュナリだから……必要以上にお金は使えない。」

賢沢は出来ないの……」

「でも、欲しいんじゃないのか？」

「いい……」

「でもさ……」

「私たちはまだいい。他のヒュナリの子はこうやって見ることも出来ないんだもん」

「そつか……そこまで二人が考えてるんなら俺はこれ以上、何も言わないよ」

「うん。系……」

「系の気持ちは本当に嬉しいから……ありがとう」

三人はベンチに座つて買ったジュースに口をつけて行き交う人々に目を向けていた。

「そつだ。ちよつと、ここで待つててくれないか？」

「えっ？ どこ行くの？」

「ん……ちよつとな。すぐに戻ってくるから」

「また迷子になったら今度は探してあげないよ？」

「ははっ、何度もそうなるほどマヌケじゃないって」

系が手を振って二人と別れて駆け出した。ちらりと見えたエリンとウータの不安そうな顔に系は胸の奥にちくりとした痛みを感じずにはいられず、胸をさすった。そして、その不安を取り除くためにも系は歩を速めて懐から名刺サイズのカードを取り出した。

思い浮かぶのは虐げられるヒユナリの女の子……人間とまったく同じ姿形をした機械の体で生まれてしまった人間……

（ごめんな。今の俺は何も出来ない無力だ。使わせてもらおうよ）と、系は努めて優しい顔をして不意に睨むような目でそのクレジットを見て、顔を上げた。

あれから、すぐに戻ってきた系にエリンとウータは何も言わず、笑顔で迎えて三人はホテルの部屋に戻るとエリンとウータはシャワーに入ると言い出し、系と一緒に入るように言い出して系は頑なに拒否し、ヒユナリの力をもってしても系をバスルームへは招くことは出来なかつたのであった。

ぜえぜえと肩で息をする系が汗を拭ってやることもなく、ただ何となく地上百八階からの景色を眺めていた。

月のない夜空に地上の光のせいかわ、星などまったく見えない。だが、この惑星から出れば、星は無限の見えるほど見え、その気になれば、どの星にも……どこへでも行ける事実を彼は知る。

しばらくして、パジャマ姿のエリンとウータが湯気を立てて出てきた。エリンのパジャマは魚の絵がプリントされているもので、ウータのパジャマは猫の絵がプリントされている子供らしいパジャマだった。

「おっ、可愛いパジャマだな」

「えへへっ、ありがと」

二人がにつこりと嬉しそうに笑って系が頭を撫でるとふんわりと石けんの香りが部屋に広がっていく。

「系も入って来なよ。汗が流れて気持ちいいよ」

「俺は飯食ってからでいいよ。そろそろレストランが開く時間だろ？ 宇宙っぽいものが食べられるかな？」

「宇宙っぽいものって？」

「さあ？ 想像出来ないな。想像出来ないものが宇宙っぽいものかな？」

「何それ？」

「けらけらとウータが笑い、系が気付く。」

「その格好で行くの？ ホテルのレストランってパジャマとかじゃ入れてもらえないんじゃないか？」

「大丈夫だよ。それぞれ文化の違いが人から服装のことを言い出したら切りが無いでしょ？ だから、これがパジャマだからってツッコミは入らないの」

「何かずるいな」

「みんなしてるもーん」

「そんなもんか」

「そんなもんだよ」

ウータが系に得意げな笑みを浮かべてみせる。

三人が部屋を出て、赤絨毯の廊下を歩いて行く。エリンとウータはサンダルを履いてパタパタと可愛い音を立てて歩く。

レストランの入り口にはボーイのミツジが立っていて系たちに気付くと歩み寄ってきて黙礼、口を開く。

「席をご用意しています。こちらへ」

小さめの円テーブルに通されてエリンとウータは引いてもらった椅子に座って席に着くとすぐに料理が運ばれてきた。

レストラン内は環境BGMが流れており、端の方にはショットバーも設けられており、すでにそこに座る者がいてグラスを傾けていた。

料理に目を向けると皿に赤い三角錐が乗っていた。系の思考が止まる。その時、後ろから大きな声がしてきた。

「お前ら、しつかり食ってしつかり働け！ あのヒユナリどもを今度こそ捕まえるんだ！」

「えっ？」

系が思わず、振り返るとちょうど振り返ったサメの宇宙人 キヤプテン・ノックと顔を合わせる。

「あ……っ」

「あ……っ」

二人が固まり、静寂が訪れる。キヤプテン・ノックは二十人近い手下を連れて系たちのついてる円テーブルとは比べものにならないほどに大きな円テーブルについており、その手下たちも硬直していた。

静寂を打ち破ったのはエリンとウータ……目と口を大きく開けてキヤプテン・ノックたちを指さす。

「あーっ！ 宇宙海賊たちーっ！」

「なんでここにいるのよーっ！」

その言葉にキヤプテン・ノックたちと系の硬直が解けて一斉に動き出す。キヤプテン・ノックたちはサーベルを抜き、フリント銃を取り出して構える。

「エリン、ウータ！ 伏せて！」

その言葉に素直に従って頭を伏せると系はパンツとテーブルの端を叩いて上に乗る料理がキヤプテン・ノックたちに飛ぶ。キヤプテン・ノックがそれをサーベルで裂いて身を乗り出す。

系が後ろに跳んで右膝を曲げると右スネのプロテクターから大振りのハンドガンが垂直に飛び出して系がそれを取って構える。

「なにっ！」

「銃？ いつの間？」

驚いたのはキヤプテン・ノックだけでなく、エリンとウータも目を見開いて驚き、動けずにいた。

「撃つぞ！」

発砲　鉛弾ではなく、光線が飛ぶ　だが、光線はキャプテン・ノックたちには当たらず、天井の照明を射貫く。

「次は当てるぞ！」

外れた……のではなく、光線を外した系が手首を変えて銃口を向け直す。

「宇宙海賊に……！」

キャプテン・ノックたちがフリント銃の引き金を引く。

「そんなこけおどしが通用するかっ！」

「うわっつと！」

「系！」

エリンとウータの声を断ち、フリント銃からは弾丸が飛ぶ。系はヘルメットと服が展開、胸の前で腕を交差させて弾丸の嵐を受けて吹き飛ぶ。

ドッウウオオンッ！

壁に叩き付けられてめり込んだ系は力なくかぶりを振って自分の腕を見る。対弾性があるとはいえ、大量の弾丸を受けてポロポロとなり、服を突き破っていくつかが鉄片となって肉に食い込み、赤が滲み出す。

「くっ！　いつてーっ！」

エリンとウータが一緒に円テーブルを持ってキャプテン・ノックたちに投げつける。

驚くキャプテン・ノックたちを尻目にエリンとウータは壁にめり

込んでいる系の手を引いて助け出して系の腕を見る。

「系、大丈夫？」

「ひどい。血が出てる」

「なあに、このぐらいはかすり傷だよ」

上手く動かせず、震える腕……冷や汗を流す系がぎこちなく笑顔を作る。

（手は動く。腱は切ってないか……）と、系は自分の指が動くこと

を確かめてキャプテン・ノックたちに目を向けて口を開く。

「逃げるぞ！」

系の言葉に三人が弾かれたように駆け出した。

「そう、何度も何度も逃してなるものか！」

肩を怒らせてフリント銃を構えるキャプテン・ノックたち……それに気付いたウータが振り返ってしゃがみ込み、赤絨毯を引きはがして思い切り引く。足元をすくわれたキャプテン・ノックたちはひっくり返り、背中を床に打ち付ける。

レストランの出入り口にはうるたえているミツジがいて、系たちに気付く。

「お客様、どうしたんですか？」

のんびりとした口調のミツジだったがこの時ばかりは矢継ぎ早に言葉が出てくる。

「ミツジさん、悪い。これで許してくれ」

「はっ？」

ヘルメットを解いた系がカードを指で弾いてミツジがそれを危なげにキャッチする。

「俺のクレジットだ。修理に使ってくれ」

系が銃を買うのに使ったクレジットはヒユナリの女の子を従えていた鳥人間からもらったもので何かの手違いらしく、一日の店の売り上げほどの金額がカードに入っている知ったのは銃購入の時のことだった。

さすがに返そうと思って持って持ったものだが、こうなって仕方が無いと系はミツジに投げ渡したのだった。

系たちはエリンとウータの服を取りに一度、部屋に戻ると彼女たちは部屋の真ん中でいきなり脱ぎ出して系を驚かせた。

「二人とも、ここで着替えるなっ！」

手で顔を覆ってなるべく見ないようにする系に上着を腹部まで上げた二人が驚き、系の方を見る。

「えー、どうして？」

分かってない二人に系は背を向けてため息をつく。

「これでいい。早くしてくれ」

「変な系なの……」

（俺が気にし過ぎなだけか）と、系が深呼吸して脱力する。

着替えたエリンとウータが駆け寄って系の腕を見る。

「系、お待たせ。腕、大丈夫？ 血が出てる」

眉をひそめてウータが肩当てに手を入れてスプレーを取り出して系の傷口に噴霧すると系は傷口に熱を感じて身を引いてしまった。

「っ……」

顔を歪める系にウータは驚き、申し訳なさそうな顔をして系の手を取る。

「ごめんなさい。これ、細胞活性させるものなの。でも、人によっては急激な細胞増殖は苦痛を感じる人もいるの。系はそういう人だったんだね。もう使わないから ごめんなさい」

「いや、でも傷口は塞がったから結果としてはオツケーだよ」

「ごめんね。私たちが守らないといけないのに系に守られちゃって……」

泣き出しそうなウータに系は笑って頭を撫でる。

「そんなに気にしなくていいって。今回はたまたま俺が位置的に戦った方が良かっただけで結果として俺が少し怪我しただけだよ」

「でもっ……」

「ここで言い合いしてる暇はないだろ？ 早くここから離れよう」

「うん」

自分の頭に置かれる手を取ってウータが系を引いて窓へと向かう。ウータがマントの端を掴み、肩当てを取って窓ガラスへと振って割り、飛び出す。

「またこれかーっ！」

ウータと系、続いてエリンが外に飛び出して百八階から落下する。

「系、舌噛むから黙って！」

ウータに言われて系がぐっと口を真一文字にしてウータが手に持

つ肩当てを地面に向かって投げた。肩当てが地面に突き刺さり、マントがぐにやりと歪んでその形をバネの形にする。

そこに系の手を引くウータが落ちて一度、弾んで着地、エリンもスカート裾を押さえてバネで弾んで着地する。

「っ！」

系たちが顔を歪める。ホテル前、道路に面した広い道にはすでにキャプテン・ノックたちが待ち構えていたのだ。

「探したぞ。ガキども！」

「お前、地球には何にもしてないんだろっな？」

「あん？ あんな辺境の惑星に用はない。無駄弾を使う訳がないだろっ！」

系が顔に見せず心なで下ろし、キャプテン・ノックたちを目で捉え直す。すると、ある変化に気付く。強面のサメ怪人は辺りを警戒するように見渡し、不意にごく自然に系に歩み寄ってくる。

「ひ……っ」

思わず、悲鳴を上げる系にキャプテン・ノックは耳打ちする。

「今回はあの娘はいないのか？」

「む、娘？」

完全に涙目になっている系はなんのことを言われているのか分からず、恐怖から離れるのも何を言われるか怖く、首だけ不自然に倒す。

「あの……俺の頭を鉄パイプで殴った小娘だよ」

「あつ、藤美のことが」

「バカ！ 声がでかい！」

キャプテン・ノックが系の口を慌てて押さえて系は意外に魚臭くないことと何故、口を塞がれているのか分からず、混乱しそうになる。

「で、あの娘はいないのか？」

「んんんん！ んんんんん！」

もがもがと手を震わせる系にキャプテン・ノックが気付いて握力を緩めてポンと肩を叩く。その様子はまるでキャプテン・ノックに

捕らわれる系に見え、エリンとウータは手を出せずにいた。

咳払いして深呼吸、キャプテン・ノックを睨む。

「あいつなら地球に置いてきたんだよ」

「そっ、そうか。へっ、へっ……：：：？」

「あんだ、あいつのこと怖いの？」

「なっ！ 俺は宇宙海賊のキャプテンだ！ 地球の娘相手に怖じ気づくようなことあるはずないだろう」

取り乱すキャプテン・ノックに系は哀れみの目を向けてしまう。

（藤美、お前……：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：？）と、系はやはり連れてきた方が良かったかという思考をすぐに否定して改めてキャプテン・ノックと向き合う。

だが、系の目に映るのはすでに元の立ち位置に戻っていたキャプテン・ノックだった。

「必要な情報は聞き出した！ さあ、命が惜しければカジユアの遺産を記した宙図を差し出すんだ！」

（必要な情報って……：：：：：：：：：：：？）藤美のことかよ。組織のトップって体面も取り繕わなくちゃいけないから大変なんだな）と、系が構えた腕をだらんと下ろしてしまう。

「そう言われて渡す訳ないじゃない！ 遺産はお父さんが私たちに託したものなんだから！ あんたら、宇宙海賊なんかに渡す訳ないじゃない！」

「お前らにだど？ それは人間様が持つものだ。人間の記憶と人格を引き継いだからといって持つに相應しい者はお前らじゃない」

「くっ！」

エリンとウータが押し黙ってしまふ。

系の左肩のプロテクターが開いて白い球が出てきて手のひらへと転がる。系のヘルメットが形成、バイザーに偏光フィルターをかけたかぶりを振ってじめんに叩き付ける。

キィィィィンッ！

強烈な閃光と耳をつんざく音に辺りが包まれて次にキャプテン・

ノックたちが目を開くとそこには系たちの姿は消えていた。
「スタングレネードか……味な真似をしてきてくれる」

目を閉じて耳を塞いでいるエリンとウータを脇に抱えた系がとにかく走っていた。

二人が目を開いて系に避難の眼差しを送る。

「耳痛ーい」

「えっ？ 何か言った？」

エリンが自分の耳を指で指し示して系が気付いてヘルメットを解く。

「お礼なら後にして」

「バカ言ってるんじゃないの。まったく、急にスタングレネードなんか使ってビックリしたじゃない」

「一度、イデオムさんのところ行こう？ 修理が終わってなくても宙囃の無事を確認しておきたいし……」

「分かった」

系が二人を離して歩かせるも二人は三半規管が麻痺しているかのようにふらふらと歩き出し、それを見た系が二人を再び、脇で抱えて走り出す。

「まだ、このままでいいだろ」

「らくちんらくちん」

「空飛んでるみたい」

「俺ら、キカ・クラフト号でいつも飛んでるじゃん」

「それでも、飛んでるのは私たちじゃなくて船だからね」

「そうそう、やっぱり風を受けるのと船の中にいるのとじゃ、違うからね」

系の走る速度が落ちていることに二人が気付いて見上げると、系は荒い息をして顔中汗だくにして今にも力尽きそうな顔をしていた。

「エアカー……拾おうぜ……」

系の死にそうな顔を見て、二人は悪戯っぽい笑みを浮かべる。

「ダメダメ。このまま走って」

「系、ガンバ！」

「ったく！」

悪態をつく体力もないはずの系は顔の筋肉を動かしてむりやり笑って笑う膝に力を込めて地面を蹴っていった。

「ぜえぜえぜえぜえ……」

床に突っ伏した系は他の者の視線など気にせず、呼吸をして必死に肺に酸素を送ってはそれを血液に乗せて全身に行き渡らせていた。

「……し……ぬ……」

イデオムの工房まで系は走りきり、エリンとウータはねぎらいの言葉も贈らず、イデオムに事情を説明した。

「と、言ってもそんな都合良く修理出来る訳じゃない。まあ、二時間もあれば出来るだろうけど、いいのか？」

「？」

イデオムの発言に二人が首を傾げる。それを見て、イデオムが言葉が続ける。

「俺が宇宙海賊だったらまず、キミたちの船を拘束するけどな？」

中を調べたら航海記録も見られる訳だしさ。戻ってきたらキミたちの捕獲もし安いという寸法だ」

イデオムの言葉に理解し切れず、とりあえず、二人は頷いてみせ、考えを巡らせて不意に「あっ」と声を上げてわたわたと慌て出す。

「系！ 大変！ 早く船に戻らないと！」

「えっ？ どういうこと？ 今来たばかりじゃん」

話を聞いていなかった系は顔を上げて虚ろな目で周りを見る。

「キカ・クラフト号が危ないの！ アーメンガードが危険なの！」「なにっ！」

話の全容を理解出来なかったがそエリンの言葉に腕をついて起き上がるうとするが力が入らず、顔を地面に落としてしまう。

「もう!」

ウータが系を肩に担いで座りの良い位置に整える。

「イデオムさん、宙図の修理を先にやってもらえませんか?」

「事情が事情だからね。俺も宇宙海賊なんてヤツらにカジユアの遺産が奪われるのは気に食わないからやってやる」

肩をすくめたイデオムが椅子を回転させて作業台と向き合った。

「み……水」

系のつばやきに耳を貸さず、二人は駆け出した。系のスピードなご比べものにならないほどの速度で系は風をバシバシと受けてスピードを緩めて欲しかったが発言する体力もなく、ただ荷物として運ばれたのだった。

発着場のターミナルを目で確認したエリンとウータは顔を合わせ、頷き、跳躍、ターミナルの屋上まで行き、系を下ろして発着場に目を向ける。

発着場の隅、白い三角形がそこに鎮座し、その周りに黒い点……

「マグニファイ」

二人の目がカメラレンズのズームのように拡大して視覚がキカ・クラフト号に周りにいる魚の姿をした宇宙人を捉える。

「あちゃ、いるね」

「キカ・クラフト号の目立つ見た目が完全に仇になっちゃったね」
ウータがこめかみに指を添えて考えるような仕草、口を「へ」の字に曲げる。

「ダメだ。ジャミングかけられて通信出来ない」

「どうしよう?」

「ジャミング?」

系がむくつと起き上がるが立ちくらみを覚えてかぶりを振って倒れる。

「系?」

大の字に倒れている系がそれでも口を開く。

「ここはあいつらの陣地って訳じゃない。広い空間で通信はライフ

ラインだ。それを邪魔したらただじゃ済まない。頭に血が昇っていてもそんなことするはずがない」

系が目を細める。

「ジャミングはあいつらじゃない。何か……いる」

「ははははっ！ 未開惑星の人間にしては随分と冴えているじゃないか！」

「っ！」

駆動音の後、鈍く重い足音がして三人がそちらに目を向ける。

系が銃を出して片膝をつきながら構え、振り向くとそこには四本足の蜘蛛のような重機の胴体に立っている少女がいた。首から下を赤黒いマントで覆って少女は、口元が薄く笑い、鈍色のメカニカルバイザーをかけて目元は隠れてしまっただけのウエーブ髪の少女が更に口を開く。

「あの船に乗りたいたいのかい？ 手伝ってあげるよ？」

（こいつ、俺らのことを知ってる？）と、系は乾いた上唇を舐める。

「本当に？ 助かるよ」

エリンとウータが嬉しそうに笑って近寄ろうとする。それを系はプルプルと震える腕を横に突き出して制止する。

「系？」

「キミ、何が目的だ？」

「さあ？ あなたには関係ないよ。この宇宙に上がったばかりのお兄さん……」

背格好や口調から察するにエリンとウータよりも三、四つほど上に見える。中性的な声で凜とした張り詰めた系に触れているかのよような感覚を覚える。系の頭の中では何故か、はっきりなしに警鐘が鳴っている。本人の意志とは関係なしに頭の中でうるさく鳴り響く動悸が速くなる。銃を持つ手が汗ばむ。

喉を鳴らした系に少女がくすりと笑う。

「私が怖い？ お兄さん」

「っ！」

自分の体が丸ごと握られるような感覚に陥り、体の上がついていた熱が一気に引くのを感じて目まいを覚える。片膝をついている体勢でなければ、彼は

「大丈夫……少なくとも、今、あなたに危害なんて加える気はないから安心して」

重機の四本の脚が支える楕円形の卵のような胴体から伸びる“尾”が空を向き、その胴体よりも大きな円筒形の“尾”が一部の装甲を展開させて弾頭が顔を出す。

「待てっ！」

「見てな」

重機からミサイルが発射されて発着場へと向かった。ミサイルはその上空で弾けて華やかな光と爆ぜる音が四散した。

「はっ、花火？」

少女から目を離せていなかった系が花火に目を向ける。灯台の回っていた光が花火が爆ぜた位置に向けられる。次にその下、キカ・クラフト号に向けられる。

「まさか、ミサイルで花火を打ち上げるなんてことはしない。宇宙海賊たちが逃げ出すよ。」

やる気のない警備員が駆けつけて来るまでに早く乗ることをオススメするよ」

「……」

「系、行こう」

「ああ……」

服を引かれた系が頷いて銃をしまつてエリンとウータに手を引かれて発着場へと降りていった。

「ばいばい。またね」

少女を乗せた重機が背を向けて重機はその場を去って行った。

キカ・クラフト号の中になだれ込むように入った系たち……

『通信が遮断されて心配してましたよ。バーンザックの一味がキカ・

クラフト号の周りを取り囲んだ時はさすがに不安になりました」

「ごめん。こつちも色々あったんだ。事情は後で説明するからとにかく出発するぞ」

『了解』

操縦席のシートに腰掛けた系はステイックを握り、キカ・クラフト号は上昇、ステイックが前へ傾けられてキカ・クラフト号は飛び立った。

修理工場であるスタジアムのまだらに開いている穴へと入っていた。広い空間だが、小さなキカ・クラフト号だからこそ、ここを飛べるのだ。

『ここではイデオムさんが引いた回線で通信システムは独立しているのでジャミングの影響下ではありません』

「やっぱり、天才なのかね？」

『何が起きるか分からないから何もしないんじゃない。何かが起こった時に万全の対処をしておくのが天才なのさ』

突然、響くイデオムの声に驚く三人……

「イデオムさん、無事なんですか？ 宙図は？」

『所用時間一時間二十七分……やっぱり、天才だぞ、俺』

「修理終わってるんだな？」

『手渡ししている暇はない。空のミサイルの弾頭に入れて撃ち出す。受け取れ』

「何をそんなに急いでるんだよ！ やだよ！ そんな危険な受け渡し！」

『お前らが出て行ってからすぐにここを取り仕切るアキナット商会の本部が何者かの攻撃を受けて壊滅した。』

俺はここから逃げるから宙図を受け取ったらお前らもさっさと逃げろ』

「商会本部が攻撃？ どうして？」

『俺が知るはずないだろ？ 言えるのは通信網を遮断し、壊滅したことが発覚するを遅らせる、用意周到なやつがやったということだ』

けだ』

イデオムの工房からミサイルが発射されてスタジアムの穴の一つから外へと出て行った。キカ・クラフト号がそれを追って外へと出る。

ミサイルは弾頭を切り離して落ちる。弾頭が慣性の法則で空に昇るもやがて、重力に引かれて落ちていく。

「私たちが取りに行く。系、そのまま、近付いて！」

エリンとウータが電送によって天板へと出る。弾頭が縦に割れて中から鉄製のボールが出てくる。

「あれだ」

『巨大戦艦、接近。このパターンはヴァンドップです』

キカ・クラフト号前方から巨大な松ぼっくりを彷彿とさせる意匠の宇宙戦艦が現れる。

『ガキども！ それを渡せ！』

スピーカーからのキャプテン・ノックのドスの利いた声が響く。

「あいつら、あれが宙図って分かって来たのかな？」

『まあ、宇宙海賊としての鼻が利いたのか、もしくは私たちの邪魔をしたいただけなのかもしれませんかね』

「なんてはた迷惑な連中なんだ」

『こっちは宇宙海賊なんだから他人への迷惑を顧みないのは当たり前だろう！』

「こつちの話、向こうに聞こえてるの？」

『スピーカーは切っているので会話が聞こえているはずありません』
「だよな……」

ヴァンドップから無数のエイのような航空機が発進してくる。広い翼は胴体と一体となっており、その透明な胴体に人が収まる構造となっており、バーンザックのクルーが乗り込み、鉄製のボールへと近づく。

胴体から伸びる尻尾が穂先をキカ・クラフト号へと向けるとビームを発射してそれを系は大きく旋回して避ける。

「ダメだよ、系！ 宙図から離れちゃう！」

「そうは言ってもだな……」

鉄製のボールを目で追いながら旋回し、隙を見つけて接近を試みる。

すでにいくつかの航空機は鉄製のボールに近寄ってそれを手にしていた。

「くっ！ 少し、手荒な真似をしないといけないか！」

加速、放たれるビームをギリギリで当たり、翼を焦がすが接近を止めない。天板でぶつかり、キカ・クラフト号の天板にエリンとウータ、そして、バーンザツクのクルーたちが降りる。

「あつ、あいつ、宙図を読み取ってる！」

エリンがクルーの一人を指さす。航空機から降りたクルーが鉄製のボールを開いて緑色のリングをスキヤナーに入れて宙図情報を読み取り、コピーしていた。

「やばい！ あれじゃ、宙図取り返しても次の宙図の情報を盗まれちゃう！」

エリンとウータが弾かれたように飛び出し、襲いかかってくるクルーたちを蹴散らしてスキヤナーを作動させている一人のクルーへと近付く。

「たあーっ！」

エリンが両の腕を振り下ろすが、目を瞑って振り下ろすので簡単に避けられてしまう。

ウータが空高く舞い上がって右足を突き出して突撃する。

「いや、それ、船壊れるって！」

キカ・クラフト号が旋回してウータを避ける。それによってウータが宙に投げ出されてしまう。

「きゃああああつ！」

「あつ、悪い！」

大きく旋回してウータを拾う。

「もー、ひどいよ！ 系！」

「いや、思わず……」

クルーが口の端を上げる。エリンがシュシュを取り、振るとシュシュが伸びて秋刀魚のようなクルーの腕に絡みついて思い切り、引くとクルーの手からスキヤナーが投げ出されて中から緑色のリングが飛び出してディスクドライブからディスクが出てくる。

エリンがもう一つのシュシュを振ってリングを絡め取って手に納める。

「あれを壊さないと！」

ウータが飛び出し、拳を固める。ディスクが天板で弾んでそれを追って他のクルーたちが飛び出す。

（壊すだけでいい！ あっちは手に取らないといけないんだ！）と、ウータが拳を突き出すも、エイの形を模した航空機がディスクの間に割って入り、ウータは航空機を砕くもその破片に視界を覆われてしまう。

ディスクを見失ったウータがまた、宙に投げ出される。瞬間
ウータの身が電送で船内に戻される。

「あれ？」

『先ほどは違い、スピードに乗っていなかったので電送で中に入れることが出来ました』

女の子座りしているウータがキョロキョロと惚けたように周りを見渡す。

キカ・クラフト号の天板ではディスクを手にしたクルーが航空機に乗ってその場から飛び立っていった。

「あーん！ 逃した！」

「しょうがない！ こっちの被害はないし、あいつらが攻撃してくる前にこの場から逃げ出そう。アーメンガード、エリンを回収してくれ」

エリンも電送で船内に戻してヴァンドップから離れ、速度を上げて大気圏を突破していった。

ヴァンドップのブリッジでディスクの情報を読み取ると、『ネクストマップ』の文字の次に球状星団が映り、一つの惑星が赤く点滅した。

「これは三面描写タイプの宙図の一部か。なるほど、二千年前じゃ、立体描写タイプは出来てなかったな。これは次の宙図の在処を指し示してるんだな……」

これと同じ情報をガキどもも見てるのか。よし、俺たちもここに行くぞ！」

キャプテン・ノックが声を上げてクルーたちが「おう！」と声を上げて応える。

ヴァンドップもキカ・クラフト号を追うように宇宙へと上がった。

系たちがいなくなった商業惑星・アキナットで火が上がる。修理工場のドームも例に漏れず、火に包まれてそこでは火の中で無骨なシルエットと人の腹這いになっているシルエットが向き合っていた。「バカな！ 商業惑星を襲って何のメリットがある！ こんなに火が上がってはこの星が爆発するぞ！」

地に伏せた赤い鶏冠に青い羽毛を生やした鳥人間が目の前の者に手を伸ばす。

「いいじゃありませんか、商業惑星の一つや二つ……」

あなた方は私たちの命を何億と捨てるように使ってきたじゃないですか」

四本の脚の重機に乗った少女がぐすりと笑う。少女の言葉に鳥人間が目を見開いて驚愕する。驚きで声を失い、伸ばした手を震わせる。

「そろそろ報いを受ける頃合いですよ」

メカニカルバイザーをつけたマントを羽織った少女が口元で薄く笑う。

「ヒユナリのせいで間違えて売り上げを渡してしまったり……今日は何んていう厄日なんだ？」

「いえ、今日はあなたの命日です」

重機の円筒形の尾が回転し、装甲を展開、鋭い刃先が現れて発射される。

……ドンッ！

少女の赤黒いマントに赤が飛ぶ。重機が後ろを向くとそこには、垂れている獣毛に覆われた耳のヒユナリの少女がいた。

恐怖で身を震わせ、顔を引きつらせて重機を見つめる。

「ぶたないで……助けて……！」

「大丈夫ですよ。私はあなたをぶたない。あなたを助ける。助けるためにここに来たんですよ？」

「えっ？」

ヒユナリの少女から身の震えが消える。

重機に乗る少女が膝をついてヒユナリの少女に手を差し出す。

マントから出た肢体にはボディペイントのような体に密着するパ
イロットスーツのような特殊な服を着ていた。重機の脚が畳むよう
に折れて少女の差し出す手がヒユナリの間近まで寄る。

「？」

ヒユナリの少女が手を差し出す少女の顔を見つめる。

「さあ、共に生きましょう？ ここはあなたがいるべき所ではない
のよ」

「……」

炎の中、ヒユナリの少女は見知らぬ変わった少年に出会い、そして、初めて生きるための決断を下したのだ。

重機に乗る少女が聖母のような微笑みを見せる。

最後の宙図を手にして

系たちがエリンの手にある宙図を見て、口の端を上げた。

「よっし！ これで宙図が二つ！ あと、一つでカジユアの遺産がどこにあるのか分かるんだ！」

「うん。ガンバロー」

リングが光り、天井に『ネクストマップ』の文字が投影され、次に円を描くような光点の集まりを投影し、左下の光点の一つが緑色に点滅する。

「これは、球状星団ってやつか？」

『この隣りの球状星団ですね。百五十光年の距離にあります。ワープしましょう』

「ああ、この宙図のデータはあつちに持って行かれたからな……さっさと見つけてさっさと逃げよう」

「うん」

系が操縦席のシートに腰掛けてスティックを握ったところでふと顔を上げると自分の座るシートに手をかけるエリンとウータが見えた。

「おいおい、ちゃんと椅子つけただろ？ 何で座らないんだよ？」

苦笑いしながら系が言うと、エリンとウータがそこで初めて気付く。

「ああ、そっか。でも、こっちでいいや」

「うん。別にここでいいよ」

「はっ？ つけた時はあんなに喜んでたじゃないか。どうした？」

「どうしたっていう訳じゃないけど、こっちの方がじっくり来るんだ」

二人がうんうんと頷く。系は前を向いて気を取り直す。

「まっ、いっか。飛ばすからしっかり掴まってる！」

「うん！」

次元貫通弾を発射してキカ・クラフト号の先で爆発し、空間に穴が開く。穴というよりも渦が発生、青紫に緑色の光点が浮かぶ亜空間が顔を出す。

「いつ見ても入るのに躊躇する空だな」

言うものの系はキカ・クラフト号を進める。亜空間に入って系は少しだけ肩から力を抜く。

「他の船は普通のメトロズドアを見つけて入らないといけないからこれはアドバンテージだよな。そういえば、メトロズドアって何だよ？」

『さあ……』

「さあ……って、単純に略すと“地下鉄の扉”って意味になるけど、変な言葉だよな？」

それに、何か分からないものを使ってるのかよ？」

『いえ、それがどういった作用をもたらす天体が、というのは分かっているんですよ。』

メトロズドアとは“開いた次元の扉”という意味です。空間から時間に 三次元から四次元に 出られる穴のことをいうのです。これはどこにであるのですが、目に見えず、認識出来ないほど微小な穴で通常のメトロズドアはその特性故、ブラックホールのなれの果て 内部の重力が収まり、特異点だけが残ったものと考えられています。

メトロズドアを利用することで空間での距離を無視し、ワープできるのです。ちょうど、地上にいない人間が高速で地下を移動し、再び、地上に現れるようなもの』

「まてよ？ 四次元に通るんならタイムワープをしているんじゃないのか？」

『おおむね、そう考えてもらって結構です』

「ん？ 違うのか？」

『厳密に言うならば、私たちはメトロズドアを通じて四次元に出るのではなく、それに近いであろう異次元・亜空間に出るだけですか

ら』

「つまり、三次元と四次元の間にいるこつてことか？」

『……系さんは“時間”が見えますか？』

「えっ？ えっ？」

人間、突拍子もないことを訊かれるとただ聞き返してしまうもので、系はアーメンガードが何を言っているのか分からずに変な声を上げてしまった。

『三次元の者は四次元を認識出来ないんです。流れていると表現される時間を誰も見ることも触れることも出来ませんよね？』

つまり、三次元の住人である私たちは四次元を認識するまでに至っていないのです。だから、私たちはたとえ、メトロドアのこの亜空間が四次元であろうと無かろうと、その実態は分からず、ただの便利な抜け道として利用しているだけなんです』

「なあ、メトロドアが宇宙に点在したり、次元貫通弾で無理矢理メトロドア開けたりして何か危険なこととかってないのか？」

『宇宙は広いので少しくらいの穴は人間でいうところのピアスの穴ですから』

「なんか最近、『宇宙は広い』って言葉に騙されてる気がする」

『気のせいです』

「気のせいか？」

『はい』

系が腕を組んでため息をつく。

「そもそも、そんな怪しいメトロドアにいったい誰が入って確かめたんだ？」

『それはもちろん、冒険者や科学者です。銀河では同一視されます』
「それって誰かが最初に訳の分からないメトロドアに入ったってことだよな？」

『はい。脚光を浴びたい科学者は宇宙に数いるのでその一人が最初に入ったんです。』

この宇宙には好奇心を満たす謎は、まだまだありますからね」

「好奇心ってひどいな……」

アーメンガードの言葉に系は思わず、苦笑いしてしまう。

『全ては好奇心ですよ。目の前に何か分からないものがあれば、それに触れて何なのかを確かめたくなるものでしょ？ 最初に宇宙に出た人間もきつと、大義名分なんて関係なしに何かがあるのか知りたくて宇宙に出たんだと思います』

「すごいな、宇宙は……」

「私たちのオリジナルの人もカジユアの遺産なんて知らない。ただ、何なの知りたかって思って私たちを造ったんだよ」

「泣いてたの。本当は九才の時に何なのか知りたかったんだ。だから、私たちがこの体で生まれてきたんだ」

「エリンとウータはそれでいいのか？」

「えっ？」

系が悲しそうな顔をしている二人に質問を投げかけずにはいらられなかった。二人の気持ちを知りたかった。ヒユナリの少女が 道具のように扱われる少女たちが何を考えているのか知りたくて……（これも、好奇心なのかな？）と、系は表情を変えずに二人の答えを待った。

二人とも、微笑んで答える。

「私たちは他のヒユナリよりも自由で、道具のような扱いじゃないから良い方だよ」

「そう、カジユアの遺産を欲する記憶を受け継いだ私たちは同じようにカジユアの遺産がなんなのか知りたいから」

「……違う」

二人の言葉に系が言葉をつく。

「そうじゃない。他の子がどうじゃない。記憶を持つからどうじゃない。キミたちがオリジナルの人たちとは違うものを見て、感じて、考えて、違う人間になったキミたちが何を考えているのか知りたいんだ」

系自身も何でここまで執拗に迫るのか分からなかった。この質問

は決して軽はずみに行えるものじゃないことは分かっている……それでも、彼は彼女たちに尋ねずにはいられなかった。

二人とも、また微笑む。だが、先ほどとは違うように見えた。系はそう感じた。

「大丈夫だよ」

「私たちはそんなに悲観してない。だって、系に助けてもらったから」

「俺に？」

「うん。系が私たちを道具じゃないって言ってくれた。普通の女の子として扱ってくれた」

「それだけで、二百年の漂流の旅の空白を埋めてくれる。系との時間は私たちが生まれてからの二百年に匹敵するんだよ」

「宇宙では時の流れは緩やかだから系みたいに一生懸命な人は初めて見たんだ。ヒユナリのために頑張ってくれる人をね」

(……一生懸命なのはキミたちだろ？ 忘れてた。この子たちがカジュアの遺産を一生懸命に探していたから俺は手伝うようになったんで……)と、系がふつと口の端を上げて小さく笑い、そして笑いは次第に大きくなっていき、肩を揺すって大笑いを始めた。

二人がそんな系に啞然となる。

「どうしたの？ 系？」

膝を叩いて涙を払って系は前を見る。

「いや、バカだな……俺って」

「いきなりそんなこと言い出してどうしたの？」

『本当におかしくなっ たんですか？』

「本当についてどういう意味だ！」

その言葉にエリンとウータとアーメンガードが笑う。頼杖をついてぶすつとする系だったが誰にも気付かれないように少しだけ、口の端を上げた。

亜空間から通常空間に出たキカ・クラフト号を出迎えたのは無数

の岩塊が所狭しと浮かぶ空間だった。

「なんだこりゃ、昔、SF映画で見たアステロイドベルトみたいだ」
「いいえ、これは砕けてしまった惑星です」

「砕けた惑星？」

百メートル先も見えないような岩塊は僅かながら球状に見えた。

「多分、戦争か何かで砕けてしまったのでしよう。大丈夫、宙図の反応はここからでなく、左上に見える衛星からです」

「あそこか……」

砕け散った星を迂回して衛星へと降りる。大気はなく、月のように寒々とした風景がそこには広がっていた。

「ふえー、このクレーターの数……」

「おそらく、惑星が砕けた時に飛んできた岩によって出来たものでしょう。惑星が砕けて本来ならどこか遠くに飛んで行きそうなものですが、よく離れずにありますね」

「毎度毎度、良くも悪くも奇跡みたいな偶然がよく重なるもんだ」

「まったくですね」

「じゃあ、私たちは宙図探しに行ってくるね」

「頼む」

二人が格好そのままに電送でキカ・クラフト号の外に出る。二人とも駆け出して少し、走ったところで上体だけ振り向いて手を振る。系もつられて手を振る。

「ヒュナリって、宇宙空間でも活動できるんだな……」

「言いませんでしたか？」

「まつ、今さらか……アーマンガード、アキナットで通信ジャミングがかけられた時、妙な女の子に出会ったんだ」

「妙な女の子？」

「ああ、四本脚の蜘蛛みたいなロボットに乗った女の子で機械的なバイザーをつけて花火を打って俺たちを助けてくれたんだ」

「あの花火はそうだったものだったんですか。でも、それでどうして妙なんですか？」

「多分、あの女の子がアキナットの通信ジャミングをかけたからだ」
『！ なののために？』

「イデオムが言ってたろ？ アキナット商會を壊滅させて通信ジャミングを行ったのは同一犯だって……考えたくないけど、あのアキナットはもしかたら、もう……」

『そんな……商業惑星を襲って人に何の利益もありません。単なる商人の集まりで要人などはいるはずのない惑星なんですよ』

「考えられないことだけど、現実に起きてるんだ」

『……………』

いつまでも返事の来ないアーメンガードに系が顔を上げる。

「アーメンガード？」

『……今、アキナット商會と連絡を取ろうとしたところ、連絡断絶

……おそらくは、系の考えていることが現実になった模様です』

「っ！」

予想はしていたこととはいえ、現実として突きつけられると系は言葉を失ってしまった。

『系、お願いがあります。エリンとウータにはこのことをまだ知らせないで下さい』

「分かってる。と、いうよりも、俺も同じことを考えていた。今は

……遺産探しに集中しようぜ」

『ええ……あつ、エリンちゃんとウータちゃんから通信です』

『もしもし、聞こえますかー？』

エリンの声がブリッジに響く。

「ああ、聞こえてるよ」

『アーメンガード、宙図の反応はどうかかな？』

『そこから二時の方角へ二十キロほど行った場所に反応を確認、おそらく、その地中に埋まっているはずですよ』

『よし、エリンちゃん！ 宙図まで競争だ！』

ウータの声もブリッジに響き、系には二人の表情まで見ずに捉えることが出来た。

『今度は負けないからね！ よーい……』
『どんっ！』

二人の異口同音、今頃、駆けているのだろう。系がくすりと笑う。
「二人とも、転ぶんじゃないぞ」

『はい』

しばらくして、再び、エリンとウータの声がしてくる。

『とうちゃーく！』

エリンの声、遅れてウータの悔しがる声が聞こえてくる。

『ちえー、負けたー』

『ふふふふつ、平らな場所ならともかく、クレーターとかでデコボコになつてる所なら私の方が有利だもーん』

「二人とも、明るくなる前に帰って来なね」

「はい」

真つ暗な大気のない地上でエリンとウータは視覚を赤外線センサーに切り替えて自分の足元に目を向けて系からの通信に答えた。

そして、ウータが肩当ては外してエリンに渡すと彼女たちの前腕部にマントが巻き付いてドリルとなる。

表情を引き締めた二人がかぶりを振って地面へとドリルを突き立てて掘削していく。

「あーん、お洋服が汚れちゃう！」

「帰ったらまたシャワー浴びようか？」

七メートルほど、掘り進んだところで固い岩盤にぶつかり、二人は顔を見合わせてドリルを装着していない方の腕をまったく同じタイミングで拳を振り上げる。

小さな拳が岩盤に落ちて一拍、ヒビが入る。ヒビは亀裂となり、亀裂は広がって空気があれば音を立てたのでろう……砕けた。

中から青いリングが顔を出した。安堵のため息と共に顔をほころばせて一緒に手をかけて再び、互いの顔を合わせる。口で「せーのっ」と形作った後、青いリングを引っこ抜いた。

「ついに見つけた。最後の宙図……白い宙図の完成だ」
掲げ、昇ってきた光を反射する。

「えっ！」

二人が光の昇ってきた方を見る。太陽光が二人に迫る。大気を通していない膨大な熱エネルギーが二人に降り注ごうとしていた。

『エリイイーン！ ウウウォーターっ！』

キカ・クラフト号が船体下についている尾翼の先で大地を削りながら二人の元へと飛んでくる。

迫る太陽光から目が離せない二人にキカ・クラフト号はトラクタービームで彼女らを引き寄せて電送によって船内へと収容……キカ・クラフト号はそのまま、飛び去って衛星から離れていった。

船内でぼかんとした二人がブリッジの宙に現れて落ちて落ちて尻餅をつく。

「あたっ！」

痛みで我を思い出した二人がまだ何が起きたのか分からずに周りを見渡す。そして、系の顔を見つけるとにっこりと笑った。

「ただいま」

「おかえり……」

二人は差し出される手を両手で受け取り、立ち上がった。それによつて青いリングが転がり落ちる。

「ついに見つけたんだな。最後の宙図……」

系の手から二人の手が離れて彼は自分の足元に転がってきたリングを手取る。

「系……」

ウータが赤い宙図を系に差し出し、エリンは緑色の宙図を系に差し出し、微笑む。

「いいのか？」

「ここまで来るのに系の存在は欠かせなかったんだよ」

「系がいなかったら私たちはこんなに早く宙図を全部、手に入れなかったはず……だから、系が合わせて 白い宙図にして」

「分かった」

系が口の端を上げ、二人から宙図を受け取る。一人の手に集まった宙図の欠片それぞれに浮き上がり、回転し始める。キンツと音を立ててそれぞれはそれとなり、真っ白な球体へと姿を変えた。

「これが……白い宙図……」

系の手元に降り、白い宙図は光を發した。

キカ・クラフト号・ブリッジの天井に銀河系が映し出される。

「宇宙空間という入れ物に入っている銀河という塵の集合体を正確に映すには縦、横、奥行きを映す必要があり、銀河系という直径十萬光年の広大な空間を映し出す膨大なデータを秘めた宙図……」

本来、広すぎる銀河を細分化し、部分的に映し出すのが宙図……

この宙図のデータ量は破格のもです」

「こんな大量のデータの中から知りたいのはたった一つ……」

系たちが見つめるのは、中心部の膨らみ……点滅する一点だった。

「ここに……カジユアの遺産があるんだね」

「予測、予知、推論の異なるシステムによって弾き出された数値の誤差は百億キロありません。おそらく、あのバルジに……」

エリンとウータが感慨深そうに胸の前で手をギュッと握る。そして、系は身震いをして息を飲んだ。

……ッ……ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！

彼の手から白い球が放り出される。彼女たちは彼に手を伸ばす。

思考するものが言葉を發する。爆発……衝撃……彼が肩を壁に叩き付ける。

「白い宙図を見つけたようだね……」

宙図を見つけたことによる安心感、エリンとウータを助けられたことでの安堵感、系は速度を落としてまだ衛星から離れていなかった。完全なる判断ミス……バーンザックの宇宙戦艦・ヴァンドップがキカ・クラフト号の真上に座し、全ての砲台を紙飛行機のような船に向けていたのだ。

系の全身からじんわりと汗が滲んでくる。思考がぐちゃぐちゃだ。

肩が熱を帯びる。痛みが上がる。自分の目の前でぼろぼろと泣きながら口を開閉している二人の少女を理解するのに時間がかかった。

「俺を操縦席へ……」

振り絞った勇氣と絞り出した声……あまりにもか弱く、エリンとウータの血の気が引くのを感じた。

「系、ムチャだよ!」

「逃げる……ぞ。絶対に……逃げなくちゃ、いけないんだ」

いつもの調子で右手をついて立ち上がるうとすると痛み以上の何かが足の爪先まで伝わり、系は嘔吐する。だが、彼の胃の内容物はすでに消化されており、体液が少しポタポタと床に落ちるだけだった。

「手を……貸して」

ふるふると首を横に振る二人に系の目尻がつり上がる。

「さっさとしろ!」

ビクツと震えた二人が系の左腕を一度躊躇して掴んで起き上がらせて彼を操縦席のシートへと導く。

「アーメンガード、破損は?」

『右翼に被弾、航行性能が七十四%までダウン』

「分かった……」

右肩が動かない系は左のスティックだけ握って二人に視線を送る。今度は優しい表情を取って二人の不安を幾ばくか和らげる。

「ごめん。こっちの操縦桿を頼む」

「……うん」

二人が一つのスティックを握って涙を拭う。「いくぞ……」と、系の弱々しい言葉と共に三人はスティックを前へと傾けた。キカ・クラフト号が発進……

「まだ逃げるか……」

だが、今度ばかりは逃げおおせることは不可能だ!」

ヴァンドップからの通信、キャプテン・ノックの声キカ・クラフト号に響き、ヴァンドップも動き出す。

「系、どうするの？ メトロズドアを開いて亜空間に逃げる？」

「いや、逃げ場の無い亜空間まで追ってこられたら本当に逃げ切れない。まずは振り払わないとダメだ。そのために……」

系がちらりと左目でそれを確認、スティックを横へと傾けてキカ・クラフト号が砕けた惑星へと向かった。

「あの巨体であそこを突き抜けるのは無理だ。スピードを維持出来れば、振り切れる！」

「でも、スピードの維持なんて！」

「アーメンガード、ルート検索を頼む」

『了解、接触まであと二十秒、二万キロの小惑星帯を突き抜けるレースです』

「その意気だ！」

『ガキ！ お前は俺たちを本気にさせた！』

ヴァンドップの七つある節から閃光が走り、八つの円板が八つの円盤に分かれる。

「なにっ！」

『系、とにかく、進んで！』

キカ・クラフト号が小惑星帯へと突入　船体を傾けて身を捻り、浮いている岩石をギリギリでかわしながらスピードを維持して突き進む。

円盤へと分かれたヴァンドップ・ディスクが砲台を収納、何枚もの刃が飛び出してノコギリの刃のようになって回転、岩石を砕きながら真っ直ぐに進んで複雑な軌道を描くキカ・クラフト号へとジリジリと距離を詰めていく。

「系、追いつかれる！」

『系、ルート上に巨大岩石を確認、衝突します！』

「エリンとウータは操縦桿を絶対にそのまま！ 重力アンカー！」

目の前に迫ったスクリーンを覆い尽くさんとする巨大岩石にアンカーを打ち込み、下へと潜り込んで船体を回転、巨大岩石もその軌道に沿ってヴァンドップ・ディスクへと飛ばされた。

巨大岩石がどうなるか確認せずにキカ・クラフト号はアンカーを収納しながら軌道を戻し、進む。今の彼らには進み、逃げるしか残されてないのだ。

投げ出された巨大岩石はヴァンドップ・ディスク一隻に迫り、刃とぶつかるもすぐには断ち切れず、別のヴァンドップ・ディスクが巨大岩石に迫り、切り裂き、キカ・クラフト号を再び、追う。

（どうする？ どうする！）と、系はすでにぐちゃぐちゃになっている頭を回転させて眉間がちりちりとした痺れを感じずにはいられなかった。

「系！ あとちよつと！」

上から迫るヴァンドップ・ディスクを避け、翼の先で岩石を弾いて小惑星帯を……抜ける。

「やった！」

「でも、これじゃ！」

「そう……だよな！」

キャプテン・ノックの口の端が上がる音がした気がした。そしてキカ・クラフト号の周りに無数の爆発が巻き起こる。

ヴァンドップ・ディスクの一隻が先回りして機雷を撒いていたのだ。系の考えが完全に読まれていたことを示唆……衝撃がキカ・クラフト号に無慈悲に襲った。

真っ白だった船体は黒く煤けて薄い翼はねじ曲がり、へし折れ、中の機械部分が露出してしまっている。

『壊しも殺しもしねえ……お前らにはこの恨み、注がないとはらわたが煮えくり返ってしょうがない！』

ヴァンドップ・ディスクが集まり、元の一つのヴァンドップに戻る。全ての円板からアンカーが射出されてキカ・クラフト号を突き刺す。そして、拘束されたブリッジに地球の時と同じようにキャプテン・ノックを筆頭にバーンザックがなだれ込んでくる。

「地球人のガキにこの言葉が通じるか？ チェックメイトだ……！」
キャプテン・ノックが諸手を左右に広げて口の端を上げる。

系が右肩を手で押さえてキャプテン・ノックと向き合う。その影に隠れるようにエリンとウータが怯える。

「ほう？ 肩を負傷していながらここまでトイ・フライトを動かせるとはな……」

「トイ・フライトじゃない！ キカ・クラフト号だ。俺が名付けた」「くくくくつ、この状況でそんなことが言えるとは、お前にはまったく笑わせてもらおうよ。」

「名前は？」

「？ だから、キカ・クラフ……」

「船じゃない。お前自身の名前を聞かせてくれ」

「……天海 系だ」

「おもしろい。だが、宇宙海賊相手にあそこまでの活躍を見せられ
ては、こちらとしてはただで済ます訳にはいかないんだ」

キャプテン・ノックはそう言つて系の頭を掴むと近くの壁へと投げつけた。

「が……あつ！」

「系！」

駆け出そうとするエリンとウータの前の床に無数のサーベルが突き立てられて足を止められてしまう。

床にうつ伏せに落ちた系が顔を上げる。ぎこちなく上げた手にはハンドガンが握られており、それに気付いたキャプテン・ノックはフリント銃を出し、引き金を引く。

弾丸が系の上腕部を貫いた。血が噴き出す。系の服が収縮して穴を塞いで止血、ハンドガンがこぼれ落ちる。

「けーい！」

エリンとウータが涙をはじめさせて飛び出してサーベルを身当てで碎いて系に駆け寄る。

それを見たバーンザック・クルーが自動小銃を構える。だが、キャプテン・ノックがそれを手で制し、銃を下ろす指示を出す。そして、系たちに歩み寄って三人に睨まれることを気にせず、口を開く。

「お前の度胸は認めるよ。だから、殺さずにおいてやる」
三人は表情変えず……

「おい、小娘ども。あそこに転がる白い宙図を持ってこい」
「えっ？」

エリンとウータがキャプテン・ノックがフロント銃で指し示す扉の前に転がる白い宙図に目を向ける。

「取ってこい。そうすれば、系を助けてやる。簡単な話だろ？」

エリンとウータが目に見えて焦りの色を出す。

（それで系が助かるなら……）と、エリンが腰を浮かす。

（でも、あれが奪われたら……）と、ウータが思いながら足を向ける。

（ダメだ）と、系は堰を切った。

「ダメだ！ あれは、キミたちが二百年の歳月をかけて必死に探し出した物じゃないか！

どうして、キミたちがキミたちの手で宇宙海賊に手に渡さないといけないんだ！

間違っている！ エリン、ウータ、キミたちだけでも逃げ……」

…… ダアアンツ！

系の顔寸前の所に被弾、目を見開いて言葉を失う。

「俺は…… 本気だぜ？」

「…… 系を殺さないでくれる？」

「それも本気だぞ？」

二人が頷いてゆっくりと白い宙図へと近付いていく。ちらりと系を確認すると、彼は足で小突かれて仰向けにされて胸を踏まれる。

「妙な気は起こさないでくれ？」

にやりと笑うキャプテン・ノックが足に力を込めて系の肺の中の空気が押し出されて声にならない悲鳴が上がる。

二人は拳を震わせて足を止めることも出来ず、白い宙図を拾って系の元に戻ってキャプテン・ノックへと差し出した。

彼女たちに与えられた幼い記憶と人格は、この局面で完全に仇と

なつて結果

「確かに受け取った」

系から足を離して三人に背を向ける。その背を守るようにバーンザック・クルーが自動小銃を構えて壁となる。その壁は系たちは取り囲んだ。

「お前たちは本当によくやったよ。だから、カジユアの遺産が何なのかその目にも映してやる。その上で俺がそれを手中に収める」

系たちの前からキャプテン・ノックたちは去り、彼らは中破したキカ・クラフト号内に軟禁されてエリンとウータは彼の治療を行った。上着を脱いだ系の傷をエリンが一つ一つ見ていく。

「打撲は大したことないよ。肩の骨はヒビが入ってるから設備があればすぐに治る。腕の弾は貫通してる」

「ウータ、あの傷を治すスプレーを……」

「ダメだよ。あれは系にとって苦痛を伴うものじゃない」

系が首を横に振り、ウータが眉根を寄せる。

「体の苦痛がなんだっていうんだ。今は体勢を立て直す」

「系？」

「生かされているんだ。生きている。まだ、逃げる事が出来たんだ。バーンザックにキミたちの大切なものを奪われてなるものかよ。アーメンガード？」

「はい」

「キカ・クラフト号はどうなっている？」

「現在、十三本のアンカーが打ち込まれて管制コンピューター以外のプログラムにハッキングがかけられてに強制プロテクトされています。航行不可能……もし、出来たとしても航行性能は二十四%までに落ち込んでいるので逃げることは叶いません」

「アンカーや次元貫通弾は使えないのか？」

「使えません」

「系、アンカーなら私たちが断ち切れるよ？ やる？」

系がぎこちなく手に力を込める。

「まだダメだ。白い宙窓は向こうにある。カジユアの遺産は奪われてしまう」

「じゃあ、どうするの?」

系がエリンとウータを指で招いて三人は顔を近づける。エリンとウータ……その二人を通じてアーメンガードにも系は自分の考えを小声で伝えた。

二人が息を飲む。

「系、そんなこと……いつ考えたの?」

「さっき……」

『あなたが地球にいて、あなたを選ぶことが出来て良かった』

「俺も……こんなに生きてる実感が出来て嬉しくもある」

「口では逃げることばかり言ってるのに系はいつだって戦うことを考えてるんだね」

「へっへへっ、いつだって逃げられれば、それが一番なんだけどね。逃げられないんなら戦うよ、俺は……」

系の目の色が濃くなる。彼は口の端を上げた。

宙図の向くまま(前書き)

ひとまずの終わりを見せます。

宙図の向くまま

キカ・クラフト号を引いたヴァンドップはワープを繰り返し、銀河の中心部まで近付いた。大量の年老いた恒星が集まり、『膨らみ』を持った空間に小さな……それこそ、白い宙図が無ければ存在に気付けない惑星がそこにあった。

「随分と白い星だな？ この白い宙図そっくりとは凝ったことをする。」

だが、あそこにカジュアの遺産があるのは変わらないか……」
キャプテン・ノックがワインを瓶ごと呷り、空の瓶を横のテーブルに音を立てて置いた。

そのテーブルにはすでに何本もの空き瓶が置いてあり、キャプテン・ノックはその中から中身の入っている瓶を取った。

「これで、七十二番目の息子の誕生日には間に合う訳だ」
キャプテン・ノックが操舵手のロディに目をやる。

「ロディ、あの系とかいうガキをどう思う？」

「はっ？ どうとは？」

ロディは振り返り、酒で顔を上気させたキャプテン・ノックは瓶の栓を抜き、前のめりになって彼の目を見る。

「あのガキを操舵手としてこの船の迎え入れるのも一興かと思っ
な」

口の端を上げるキャプテン・ノックとは对象的にロディは顔を強ばらせて押し黙ることしか出来なかった。

「……なんてな、冗談だ冗談だ。そんな簡単に操舵手を取り替えるはずがないだろ？」

「は、はい」

「だが、それもお前だということは覚えておけ？」

「……」

ロディは前を向き、舵輪を回した。

ヴァンドップが大気圏へと突入、白い惑星へと降りていった。

一方、キカ・クラフト号の系たちもカジュアの遺産に辿り着いたことに高揚感をお覺えて鼓動を速くしていた。

スクリーンを窓へと切り替えて窓に手を添えて立っている系たちの目に映る景色が様変わりしていく。宇宙の黒から赤へと変わり、青空に包まれた彼が見たものは、白　真っ白い花が一面に咲き誇る大地だった。

「なんだ？　これ？」

どこまで咲き続けるユリのような白い花は地平線まで白く輝いていた。川が人間でいうところの血脈のように大地に流れて縦長の立方体ロボットがキャスターのような足を転がして花々に水を与えていた。

ロボットが細い腕を頭から出してじょうろで水をきびきびとやり続けていると来訪者に気付いて腕をしまって一カ所に集まった。

「何が始まるんだ？」

ロボットたちは花を踏まぬように集まって胴の真ん中に目のようなレンズを光らせて中空に全長三百メートルの人間の立体映像を映し出した。

ヴァンドップ・クルーヤ系がその光景にぼかんとする中、エリンとウータはぼつりとつぶやいた。

「お父さん……」

「えっ！」

二人の異口同音に驚いた系が一度、二人の顔を見て、ほんきであることを確認してバツと立体映像の人物に目を向けた。

長い髪を後ろでまとめ、顎ひげをたくわえた中肉中背の白衣を着た温和そうな男の立体映像が動き出す。片手を上げて口が開く。

「よっ！」

にこやかに笑って挨拶をする男の立体映像に系がずっこける。

「かるっ！　軽いよ！」

『はっはっはっはっ！ どうだったかな？ ここまでの宝探しゲームは？』

「ゲームう？」

『驚いたかい？ これは……この星は誕生日プレゼントだったんだよ。見てごらん？ このすばらしい景色を！ 美しく咲き誇っているだろ？ 咲かせるのが難しいと言われるシナユナの花さ』

「まさか……」

系の頭の中で今まで一連の不可解が紐解けていく。娘に遺産を残すのなら、どうして所在を三つに分けて銀河各地に散布したのか？ 回りくど過ぎたのである。だが、親子で興じる宝探しゲームであることこのアルフォード・カジユアの立体映像の人物として軽さを鑑みれば、全ての合点がいくことになる。

（銀河を使った宝探しゲームって壮大すぎるよ。しかも、なんちゅーはた迷惑なことをしてくれたんだよ？ あんたがプレゼントの隠し場所ってことを内緒にしたからややこしいことになったんだぞ）と、系は涙ながらエリンとウータを前に言い出せずに拳を固めることしか出来なかった。

『九才の誕生日、おめでとう……僕の愛しの……』

風切り音、瞬間、ロボットの真ん中にミサイルが落ちる。

「なにっ！」

ヴァンドップからミサイルが放たれて地表を焼く。

ヴァンドップのブリッジでミサイルに発射ボタンに拳を落としているキャプテン・ノックはわなわなと震えて頭を垂れていた。

「なんだ……あれは？」

顔を見ずともキャプテン・ノックの体の震えは怒りから来るものと分かるクルーたちはその雰囲気にとじろいでいた。

「なんだというんだ！ あの子供だまはああああーっ！」

激昂と共に顔を振り上げたキャプテン・ノックが叫び、ミサイルの発射ボタンを十六連打する。

「俺たちはこんなガキの遊びに付き合っつて今までカジユアの遺産を探してきたというのか！　っつていうか！　遺産でも何でもないじゃないかー！　っ！　っ！」

キャプテン・ノックの様子に慌てふためくクルーに彼はぎろりと目を向けた。

「何をやっている！　この星を！　このバカげた星を破壊するぞっ！　っ！」

クルーたちが肩を震い上がらせて自分の仕事に戻った。

「何が花だ！　そんなもんで腹の足しになるとでも思っているのか！　このボンクラ科学者がああああ！」

宇宙航行する時は必要の無い弾薬と物資は消費しないのが鉄則、事実、彼らは地球で系たちに逃げられて怒りを覚えるが、破壊行動などは一切取らなかつた。だが、今回に限っては『堪忍袋の緒が切れる』といったところだつた。

「人をバカにするのも！　大概にしるーっ！　っ！」
もはや、今までの苦勞を考えると叫ばずにはいられなかつた。

白い花畑の惑星にミサイルや熱線が降り注いでいく。

「や……やめて！」
キカ・クラフト号のブリッジで窓にバンツとエリンとウータが手をつく。

「これは私たちの物なのに！　やめて！」

「エリン、ウータ！　当初の目的から外れたけど、仕掛ける！　この星を……キミたちの花を守ろう！」

系が操縦席へと駆け寄る。尻目でエリンとウータを見ると茫然自失と立ち尽くしていた。

「エリン！　ウータ！　動け！」

系の叱咤にエリンとウータが我を取り戻して弾かれたように動き出す。バーンザックによって開けられた穴を抜け、二人は外に出る。ヴァンドップにアンカーの鎖によって貼り付けられる形を取ってい

るキカ・クラフト号……

外に出るとヴァンドップの角窓からキカ・クラフト号を見張っていたクルーにエリンとウータは見つかるも、白い花畑に驚いていたクルーは反応が鈍り、機銃の引き金に指をかけるまでに時間がかかってしまった。

その一瞬の隙で怒りに震えるエリンとウータは十二本の鎖を全て断ち切った。

「けーい！」

エリンとウータの叫びがブリッジにいる系まで届き、彼は力強く頷いた。

『プロテクトを解除、飛べます！』

「おおおおおッ！」

ボロボロのキカ・クラフト号がヴァンドップの前に躍り出て弾幕の嵐が止む。

「アーメンガード、スピーカー・オン！」

『了解』

「こおおおらあああああ！ 宇宙海賊ども！ なんでお前らが切れてるんだ！

この星は！ この花畑はあの子たちの物だろう！ それを奪おうとして、予想外れたからお前らが怒るのはお門違いだろう！」

ヴァンドップからもスピーカーを通じてキャプテン・ノックの声が聞こえてくる。

『そんなことは分かっている！ 宇宙海賊とは元来、身勝手な者の集まりだろうがああああああっ！』

「自分で言うなっ！」

ヴァンドップ・クルーが系に意識を向けている最中、そのブリッジで爆発が起きる。

「何だ！」

見ると、煙から二つの小さな人影が覗け、煙が晴れるとそこにエ

リンとウータが姿を現した。

「お前ら！」

「お父さんの白い宙図を返しにもらいに来た！」

「はい、そうですかで渡すものかよおおお！」

キャプテン・ノックがサーベルを抜いて二人に迫り、振りかぶる。

「これは人間様の持ち物だ！ 機械人形は引っ込んで！」

二人が踏み込み、エリンは脇を抜けてウータは飛び越えて彼の背後に回る。

「私たちは！」

「人形じゃない！」

後頭部と背中に蹴りをたたき込まれてキャプテン・ノックが仰け反る。

「あんたらへの怒りも！」

「花が散った悲しみも！」

二人が涙を弾かせて振り返ったキャプテン・ノックへと拳を引く。「系への感謝の気持ちも！」

突き出され、キャプテン・ノックの腹へと小さな拳がめり込んでキャプテン・ノックは白目を剥く。

「全部全部！ 本物だよっ！」

ぐらりとかぶりを振って倒れる巨体……その懐からころころと白い宙図が転がってきてエリンが拾い、ウータがキャプテン・ノックとの立ち回りを見ているだけしか出来なかったクルーをじろりと睨む。

「ひっ！」

思わず、短い悲鳴を上げるクルーたちに彼女たちは目尻に涙を溜めてため息をついて出て行った。

「だ、誰か！ 船長に気付けを！」

ロディが声を絞り出して指示を出してクルーたちはそれぞれに葉っぱのかたちをした気付け薬を持ってキャプテン・ノックへと駆け寄った。

次の瞬間、気絶していたキャプテン・ノックの悲鳴が上がったのはいうまでもなかった。

キカ・クラフト号にヴァンドップから出てきたエリンとウータが降りて開いている穴からブリッジに入り、系の横についた。

「白い宙図は？」

「この通り！」

掲げてみせて二人がウインクする。

『ガキども！』

キャプテン・ノックの声……

『この星ごと！ 燃え尽きろっ！』

弾幕の応酬、武装を持たないキカ・クラフト号ではかわすことしか出来ず、それも性能が落ちているキカ・クラフト号では全てを避けることは出来ない。

「くっ！」

スティックのトリガーに指がかけ直される。系はこれからすることのために覚悟を覚えていた。ここに来るまでに何度も頭の中でシミュレーションを繰り返した。ヴァンドップから逃げ出す算段までは打ち合わせして結果オーライになったが……

（でも、迷ってたら何も守れない！ この子たちの手に花を渡さないとの短く広い旅は終わらないんだ！ 終わらせられないんだ！）と、系がふと、自分の上があった熱が通り過ぎるのを感じた。

今までずっと力を込めていた顎から力を抜くと系の口は開き、自分の横にいるエリンとウータに目を向けた。二人とも、ただ真っ正面を見据えて悔しそうな顔をして自分に向けられている視線になど一切、気付いていない。

ふっと笑い、彼はもう一度、その松ぼっくりともパイナップルとも取れる形の宇宙戦艦に目を向けた。

「エリン、ウータ」

急に名前を呼ばれ、系の口の端を上げている顔を見て、二人はそ

の先ほどまでの緊張感で張り詰めた雰囲気は払拭されている様子に少しだけ驚いた。

「俺と一緒に操縦桿を握ってくれないか？」

「う、うん」

二人が系の手に自分の手を重ねた。

「いくぜ！」

一気に表情を引き締めた系に二人とも頷いてみせた。そして、彼はヴァンドップへと船首を向けてトリガーを引いた。

次元貫通弾が発射されてヴァンドップから発射されたビームに当て、爆発、そこへ、ありつただけの次元貫通弾を打ち込んで開かれるメトロズドアがその質量を増やしてブラックホールへと変化した。

「なっ！」

「ブラックホールが生まれた！」

「吸い込まれるぞ！」

キカ・クラフト号はブラックホールに船尾を向けて最大戦速で離れようとするが、すでに空間ごと重力に引かれ始めていた。

「系ッ！ またやってくれたな！ だが、ブラックホールなんて生み出してただで済むと思うなよ！ お前らも飲まれるんだ！ そのボロボロの船で高密度の重力に潰れてしまえええええ！」

「くっ！」

万全の態勢で光速の倍まで加速したキカ・クラフト号ならば、ブラックホールの重力場を振り切れるものの、今のキカ・クラフト号では飲み込まれることを耐えることしか出来なかった。

それすらも、ままならない状況でアーメンガードからの指示が飛ぶ。

「系！ 重力アンカーを！」

それに気付いた系がアンカーを大地に発射して突き立てる。

「これで！ 終わりだと思ふなよー！ ー！ ー！ ー！」

キャプテン・ノックの絶叫を残してヴァンドップは黒い渦の中へとその姿を消していった。

バガゴンツ！

アンカーの突き刺さっている大地が切り取られてキカ・クラフト号ごとブラックホールに吸い込まれていく。

『パージします！』

アーメンガードの機転によってアンカーの鎖は爆破されて切り取られた。

系が別の大地にアンカーを発射してそれを支えに力の限り、ステイックを前へと倒した。

エリンとウータも一緒になって後ろに引かれる力に抗って力を込める。

「諦め……ない」

「諦めたら……本当に何にもならないんだ！」

二人の熱と力が手を通して系に伝わる……その思いと共に……

「そうだ！ 諦めない！ 逃げ切ってみせる！ 終わりにしないために！」

……次元貫通弾に搭載されていたエキゾチック物質が時間を空けて散布、ブラックホールが次第に閉じていった。

惑星そのものを飲み込もうとしたブラックホールはヴァンドップと惑星の質量を百分の一ほど持つて行き、消えたのだった。

「はあはあはあ……」

その後、燃料が完全に切れたキカ・クラフト号はその場に不時着と、いうよりも落ちて三人は外に出て、系はキカ・クラフト号にもたれかかり、エリンとウータは「花を探してくる」と言って飛び出していった。

息を切らした系は自分も同行したい気持ちはあったが、今は指先一本を動かす体力ないことに気が付いて二人の帰りを待つことにした。

（俺の手……よく潰れなかったな）と、系が自分の手をしげしげと見て、キカ・クラフト号に目を向ける。

「アーメンガード、修理出来そうか？」

「もともと資源惑星だったらしく、アルフォード・カジユアが大気を作って花を植えるのに最適な環境にテラフォーミングしたみたいですよ。」

これなら、一日程度で通常航行可能になります」

「良かった。この焼け野原で暮らす訳にもいかないからな」

「そうですよね」

系の息が整った頃だった。地平線の向こうからとぼとぼとした足取りでエリンとウータが歩いてきて、ぐしぐしと涙を拭きながら戻ってきた。

キカ・クラフト号に手をついて生まれたての子鹿のように脚をプルプルと震わせて立ち上がった系にエリンとウータは何も言わず、その腰に抱きついた。

二人とも、泣きはらした目に頬は涙の跡だらけになっていてエリンの手には一輪の花だけが握られていた。

「それだけしか見つからなかったんだな？」

無言で二人が頷く。

「残念だったな。あれだけ綺麗に咲いていたっていうのに……」

二人とも、言葉を失ったように無言で頷き、また、目尻に涙が溜まる。それに気付いた系が二人の背中をポンと叩く。

「まだ……泣けるか？」

今度は頷きはせずに二人は大声を上げて泣き出した。

系は二人が泣き止むまで待つと、二人は泣き疲れて眠ってしまった。系はエリンを担いでウータを脇に抱えて船内に戻り、ブリッジを抜けて船室に連れて行って一つのベッドに寝かせると、エリンの手を開いて花を取り、アーメンガードに造ってもらったシリンダーに焦げてない土を探して中に敷き、花を植えた。

シリンダーの花瓶を二人が眠る船室の机に置くと彼はブリッジに戻って操縦席のシートを腰掛けると大きなあくびを掻いて体は脱力して目を閉じた。

「アーメンガード、悪い……寝る……何か起きたら起こして」

『はい。やっとゆつくり寝れますね』

「ほんと……だあねえ……」

系が口の端を上げたかと思うとすぐに大口を開けていびきをかき出した。

『ふふふっ……大きないびきですね。ご苦労さまです。三人とも…

…あれ？ これは？』

翌日、久しぶりに睡眠した系は体中の痛みに半日のたうち回り、やっと人の言葉を話せるところまで回復した系にエリンとウータは白い花を差し出した。

「どうした？ やつと見つけた花だろ？」

「お礼するって話……今の私たちは、本当に何も持っていないから…

…」
「これしか系にあげられる物がないから……エリンちゃんと話し合

って決めたんだ」

「受け取って……系……」
申し訳なさそうに顔をうつむかせる二人に系はふっと笑って二人の頭に手を置いていつも以上に優しく撫でた。

「それは持つておきな」

「えっ？ でも……」

「俺は別に、お礼どうこうで手を貸した訳でもないしさ。へへっ、こんな体験した地球人は俺だけだぜ？俺はそれだけで充分だからさ」

口の端を上げ、歯を見せて笑う系にエリンとウータの顔に熱が上がり、赤くなる。

その変化に気付いた系が二人の頭から手を離す。

「どうした、二人とも？ 顔赤いぞ？」

「えっ？」

二人とも、自分でこの変化が何なのか分からず、系と見つめ合う

形になってしまふ。

『あの……話を締めようとしているところ、申し訳ありません』

「ん？ どうした？ アーメンガード」

『この惑星に辿り着いたからでしょうか？ プロテクトがかかって
いたデータが開示出来るようになりまして重大な事実が発覚しまし
た』

「えっ？ 何か、嫌な予感！」

体を硬直させた系が筋肉を収縮させたことによって痛みが体中を
突き抜けていった。

ガコンッ！

後付けのエリンとウータ用の椅子の間の床が割れて何か、円筒状
のものがせり上がってくる。先にレンズがついており、それが光を
放ち、ブリッジの中にアルフォードの立体映像が現れた。

『驚いたかい？』

アルフォードの立体映像はまるで相手がいるように身を乗り出し
て話し出す。

『僕からのプレゼントは気に入ってくれたかな？ いつも仕事仕事
で悪いと思ってる。』

だから、この宝探しゲームを楽しんでくれたら幸いだ。そして、

実は実は！』

そう言ってアルフォードの立体映像が言葉を溜める。

『……プレゼントはこれだけではないんだ！』

「えっ！」

「なっ！」

「にいっ！」

エリン、ウータ、系が順番に驚いて言葉を失う。それを見てない
にも関わらず、アルフォードの立体映像はふふんと鼻を鳴らして得
意げな顔をする。

『白い宙図の次は黒い宙図を頼りに僕からの本当のプレゼントを取
りにおいて……待っているよ。ハッピーバースデー』

立体映像が切れてレンズが縦に割れて中から黄色いリングで出てくる。それを見たエリンが慌てて白い宙図を出す。ウータが黄色いリングを取って白い宙図に近づけると、黄色いリングは白い宙図に引き込まれてキンツと音を立て、緑色のリングが弾かれるように出て、床に転がる。

系が緑色のリングを拾ってエリンの手にある宙図に目を向けると、宙図は先ほどまでの白さは無くなり、漆黒に染まっていた。

「すごい。本当に黒い宙図になった」

「そう……か……じゃ、行こうか？」

系の言葉に二人が彼の顔を覗き込む。その視線に系が驚く。

「どうした？ 行かないのか？」

「だって、系は……地球に戻らなくていいの？」

「ん？ ここまで来たんだからさ。最後まで付き合わせてくれて」

「いいの？」

二人の異口同音に系が苦笑いをして答える。

「いいも何も、俺が気になってたりするんだよね。はた迷惑でスケールが大きいキミたちの親父さんが何を残したのかって……ダメかな？」

「ダメじゃない。ダメじゃないよ、系」

「系が一緒に来てくれるなら嬉しいもん」

「分かった。行こうぜ。俺はもう、うずうずしてるんだ」

差し出された系の手を見て、二人は破顔一笑 手を取ってキカ・クラフト号の操縦席へと足を向けた。

「よっし！ 黒い宙図を携えて発進だ！」

『どこまでも飛べますよ、系』

「行こう、系！ 私もワクワクしてきちゃった」

「新しい星に行く時はいつもだもんね？ 何が待ってるかな？」

「行ってみてのお楽しみだな」

操縦席のシートに腰掛けた系がスティックを握り、口の端を上げてスティックを前へと……広い広い宇宙へと向けたのであった。

宙図の向くまま（後書き）

これで書いた部分は全部です。ここまで読まれた方は分かると思いますが、これは続編を意識した作りで、新人賞応募に投稿した物としてそこが評価を悪くした一因になつてると思います。

失礼ながら、ここでこの「宇宙に転がる自由な気まま」は終わりに致します。この作品は私が本当に世界に発信したいメッセージがその後、書かれる作品なんです。これは……言うのもおこがましいんですが、プロとなって出版したい作品なんです。

これはパイロット版としてここに置かせてもらいます。身の程をわきまえない発言だと重々承知していますが、ご理解を願います。

水包トキでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7217x/>

宇宙に転がる自由な気まま

2011年10月19日02時06分発行